

---

# フィムブルヴェルト・ラブソティ

どぶねずみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フィルムブルヴェルト・ラプソディ

### 【Nコード】

N0213Q

### 【作者名】

どぶねずみ

### 【あらすじ】

ストウレーガ（悪魔付き）とされる高校生の近未来サイキックアクション。

今世紀初頭、ゴールドという疫病のパンデミックが起こる。人類は不安を払拭するために悪魔狩りを行う。ストウレーガとされた能力者は自らの身を守るために白金しろがねという組織を作り、人類に対抗した。

人類と白金との長い戦いの後、白金は人類との和平派と抗戦派に割れ、和平派は黒金くろがねという新組織を結成し、白金から脱退した。

秋葉巧は黒金の下部組織である七草学園生徒会に所属するストウレーガだった。晩春のある日、同級生がストウレーガであることが発覚し、巧は黒金への勧誘のために行動を開始する。

『正義』編、終了しました。

## オーブニング（前書き）

最初に夏がなくなる。冬の寒さは途方もないものになる。人々は寒さに凍え死んでいった。雪はあらゆる方角から降り、霜はひどく、風はきつい。太陽はなんの役にも立たない。このような冬が引き続いて3度もやってくるがその間一度も夏は来ない。

〈北欧神話エツダより〉

## オープニング

正午が近い。時間は4時限の途中ぐらいだろうか。

ここは東京、といっても電話番号が03で始まらない場所、憶良市にある私立七草学園の屋上。外を見れば山は近く、喧騒とは程遠い場所だ。

季節は晩春、桜は散り、ゴールデンウィークと花粉の猛威が過ぎ去った頃。

俺は屋上のベンチで優雅に昼寝を楽しんでいた。太陽は今日も勤勉で、俺の肌を照る。日差しは夏のものに変わりつつあり、今が屋上で昼寝を楽しめる最後の時期でもある。

「うーん！」

俺は仰向けのまま思い切り伸びをした。爽やかな風が吹き抜ける。穏やかな時、側では小鳥なんかも鳴いている。実に幸せな瞬間だ。

まあ、そんな時間はそうは続かないわけで、それを証明するように、重々しい音と共に入り口の扉が開いた。

俺は目を閉じた。俺の眠るベンチに向かってくる足音。

影が指した。

足音の主は俺の前で止まり、俺を覗き込んできた。細い髪が俺の頬を撫で、微かな吐息が迫る。俺は幸せを手放すまいと必死に瞳を閉じる。

……これは我慢比べ、つまりは俺に勝ち目はなく、俺は早々に敗北する。

「まいった、俺の負け」

眼前、まつ毛の数えられる距離に少女の顔があった。長い黒髪はカーテンとなり、整った顔立ちに陰を作っている。

俺の後輩、新橋美異だ。

「やっぱり起きていた」

「なんだ、わかっていたのか？」

「ええ、巧さん、わかりやすいから」

新橋は俺を覗き込む姿勢のままくすくすと笑った。

「ちよつと離れて。起きるから」

俺がそう言うのと新橋は素直に離れる。

陰が消え、日差しに目が眩む。俺は目を擦りながら身体を起こした。携帯の電源を入れて時間を確認する。

「それで、どうしたんだ？今授業中だろう？」

「呼び出しですよ、生徒会室に。授業中に校内放送があったんですよ。聞こえませんでしたか？みんなが集まっても巧さんがなかなか来ないから私が探しに来たんです」

「授業中に校内放送で呼び出し？まったく、無茶するなあ」

俺は立ち上がった。新橋はそうするのが当然のように俺に近づき、ネクタイの曲がりを直してくれる。新橋は、俺と2人だけの時はやたらべたべたと触ってくる。

「無茶、ですか？」

新橋は微笑みを浮かべたまま俺から一歩離れた。

「新橋？」

新橋は、ふつと、重力を感じさせない動作で飛び上がった。音も立てずにフェンスのひさしに止まる。そして、新橋は、小悪魔チックな笑みを俺に見せ、そのまま外に落ちていった。

「……おいおい」

俺は小走りでフェンスに近づくと、下を見た。校舎は4階建てだが、地面には新橋の姿はない。

「生徒会室はこの真下、だったか」

俺は一応周りを確認して、それから階段で生徒会室に向かった。

## 主要人物紹介

自己紹介をしておこう。俺の名前は秋葉巧<sup>あきはたくみ</sup>。ここ、私立七草学園高等部の2年生だ。趣味は神社参拝で得意科目は歴史と地理。生徒会役員なんてことをやっているが、概ね普通の高校生だ。普通じゃないところも少しあるが、それは追々話すことにしよう。とりあえずは生徒会だ。

俺は生徒会室の扉を開いた。中には、6人の学生がいた。

「遅いわよ。まったく、どこでさぼっていたのよ」

この、後ろで髪を結び、吊り目をさらに吊り上げて俺を睨んでいる女は恵比寿洋子<sup>えびすやうし</sup>。俺と同学年で、俺がこの学園の中等部に転入してからずっと同じクラスの腐れ縁だ。

「屋上にいたんだよ。校内放送があつたらしいな」

「ああ、まったく、こういうことはやめて欲しいもんだ」

そう言ったのは渋谷明彦先輩<sup>しほやあきひこ</sup>。生徒会副会長で、テニス部のキャプテンでもあり去年には2年生で全国のベスト4までいっている。

その実績と貴公子的外見、にもかかわらず、ある理由で校内の女子には人気がない。同じ理由から男子には避けられている。

「理由があるのよ」

そっけなくそう言った、室内で一番背の低い美少女が馬場久菜先輩<sup>まはひくのな</sup>。生徒会長だ。外見に合わない、クールなおひとだ。

俺はイスを引き、色白で巻き毛の男の隣に座った。こいつは原正志<sup>はらまさし</sup>。2年生だ。中身は軽くて付き合いやすい奴だ。こいつとは高校からの付き合い。同学年で同じ生徒会をやっているってこともあり、俺はこいつとつるむ事が多い。ちなみに俺とは反対の正志の隣は恵比寿。この位置関係には少しだけ理由がある。

俺がイスに座るのを待っていたかのように紅茶が置かれる。新橋美異だ。こいつは生徒会唯一の1年生。

「いや、甲斐甲斐しいねえ。巧くん、果報者だね」

そう言つて、八重歯を見せて俺を見上げているのは岡地留美先輩。おかちるみ  
淡い色の髪を左右で結び、ぴよこんと尻尾のように振っている。あ  
る意味、この人は俺の天敵だ。

「ほら、留美。席に着きなさい。始めるわよ」

岡地先輩は馬場先輩にそう言われると、顔に笑みを浮かべたまま  
俺から離れてイスに座った。

「それで、なんなんですか？」

馬場先輩は答えず、リモコンのスイッチを押した。コの字型に置  
かれた机の中央に映像が浮かぶ。トリビジョン（立体テレビ）だ。

映像は今朝のニュースだ。それは、俺たちの通う七草学園のある  
憶良市でのニュースだった。見出しは「憶良市で怪死体。悪魔狩り  
の再現か？」。

昨夜未明、10台のフリーター5人の死体が中央公園で発見され  
た。死因は5人とも失血性ショック死。死体には針で刺されたよう  
な無数の刺し傷があったらしい。ニュースのキャスターはその死体  
の不可解さを表向きは神妙に、実際には面白おかしく話していた。  
「一刻も早い犯人の逮捕を祈っています」の決まり文句でそのニユ  
ースは終わり、トリビジョンは消された。

偶然、だとは思うが、全員の視線が岡地先輩に集まった。岡地先  
輩は2度ほど瞬きをして、慌てて手と首を横に振った。

「私じゃないよう！最近是我慢してるもん！」

「あ、いや、わかっています。岡地先輩なら血だけ、なんてことを  
せずに骨までしゃぶるでしょうから」

「うー！いやな言い方！……そのとおりだけど」

「それで、このニュースなんだけど……」

「いや、わかりますよ。いつものパターンなんでしょう？」

「だね。それで、くーちゃん。対象者はわかってるの？」

「話が早くて助かるわ」

話を遮られた馬場先輩は少々不満そうに岡地先輩を見た。ちなみに「くーちゃん」は岡地先輩の馬場先輩に対する呼び名。

「対象者は2年A組の飯田恵」

俺はその名前に聞き覚えがあった。確か、ショートカットの大人しい娘だ。

「俺のクラスだ。恵比寿、あいつ、今日学校来てたか？」

「え？知らないわよ、そんなこと」

「今回は2年生の3人にやっってもらうわ」

「了解です。授業が終わり次第教室に行ってみて、今日登校していなかったら放課後寮に行ってみます」

恵比寿は淀みなくそう言った。

「ここ、七草学園は全寮制だ。」

「放課後ではなく昼の間に寮に行つて。早退の手続きはもうしておいたから」

馬場先輩はこういふ強引なところがたまに出る。

「くーちゃんくーちゃん！ わたしは？」

「留美は留守番。美異も明彦も、通常に過ごしていてくれればいいわ。でも、一応心には留めておいて」

「ああ、わかった」

「はい」

タイミングよく4限終了のチャイムが鳴る。俺たちは席を立った。

「おっし、恵比寿、正志、昼飯前に済ませよう」

俺たちは連れ立って生徒会室を出た。

2年A組は教室棟の3階だ。教室はもう昼休みになっており、和やかな空気が流れていた。

恵比寿は机を付けて弁当を食べている女子の集団に言った。

「ねえ、今日って飯田さん、来ている？」

仕切り魔でえぱり屋の恵比寿はこのクラスではリーダー的存在だったりする。

「飯田さん？そういえば今日は来ていないね」

「私、寮が一緒だけど今日は朝から見えていないよ」

「えっと、あなたって、確か第2女子寮だったよね。ありがとう。」

私と秋葉、早退して午後の授業出ないから、先生に伝えておいて」

「なに？今からデート？」

「そんなんじゃないって」

恵比寿は和やかに女子に手を振って、教室の外で待っていた俺と正志のところに戻ってきた。

「今日は休んでるって」

「そうか。じゃあ今から寮まで行こう。第2女子寮なら歩きでもそう遠くないな」

第2女子寮は確か学校から歩きで10分ほどの距離にある。俺と恵比寿は歩き出した。が、なぜか正志がついて来ない。

「おい、正志、どうした？」

「……なあ、巧。今から第2女子寮に行くんだよな」

「？それがどうした？」

正志はいきなり俺の手を強く引くと、耳元で呟いた。

「ばかやろう！女子寮だぞ！女子の寮！」

「ほら、なにやってるのよ！」

「おう！今行く」

正志は恵比寿の呼びかけに何事もなかったように答えた。俺は少々呆然とした後、にやける口を抑えて2人の後を追った。

## インターロード

薄暗い部屋、カーテンの隙間から入り込む光がわずかに明度を保っている。飯田恵は長い髪で顔を隠し、ベッドの上で膝を抱えていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」  
うなされるように繰り返されるその言葉は懺悔。

昨夜、恵は5人の男を殺した。暗がりには恵を連れ込む時の男たちの下卑た顔、そして、仲間を殺され、逃げ出そうとする男たちの脅えた顔。脳に焼き付いて離れなかった。

昨夜から一睡もしていない。恵は贖罪の言葉を呟き続けながら血走った目で扉を凝視していた。

そして、扉は開かれた。

「え？」

狭い部屋に入ってきたのは、中世騎士風の鎧を着た異様な集団だった。血塗られた剣を抜刀し、盾と鎧には金縁で赤い十字架が描かれている。

恵はこの集団に希望を見た。

恵の求めていたのは贖罪に対する許し。この集団の容姿は、無宗教な恵にもわかりやすい神の使いだった。

しかし、恵の希望は一瞬で碎かれる。騎士のひとりが恵に斬りかかったのだ。

恵に斬りかかった騎士は轟音と共に壁に叩きつけられ、絶命する。  
「え？なんで、なんで？」

恵の長い髪がさわさわと揺れた。騎士たちは恵に近づき、一気に斬りこんだ。

騎士のひとりは無数の黒い針に身体を貫かれ、ひとりは針が首に

巻きつき、そのまま上に吊られて頸椎を折られた。

「いや、やめて……、許して」

「無理だな」

怯える恵に答えた声の主は、扉の外にいた。プラチナの鎧に身を包んだ、若い男だった。金髪を眉上で切りそろえ、青い瞳を恵に向けている。

男は、剣を恵に向け、不敵な笑みを浮かべる口で、宣告した。

「君たち、ストウレーガは人類社会の害虫だ。存在自体が悪であり罪深い。君たちは、神でも救えぬ」

若い男は一步恵に近づいた。

「マニゴルドのデュナミス、マービン・クルード。君を滅する者の名だ」

若い男、マービンはそう言うと、恵に斬りかかった。

## 世界観説明

さて、そろそろ俺たちがなにものか、なにをしようとしているのかを話しておこう。それには、簡単に現代史に触れておく必要がある。

今世紀初頭、ある疫病のパンデミック（感染爆発）が起こった。疫病の名前をゴールドという。

ゴールドは対処する各国やWHOを嘲笑うように猛威を奮い、実に10億人以上の死者を出した。

人々は、いくら地位が高かろうとも、いくら金をもっていようとも防げないゴールドに恐怖した。人々はその恐怖に対抗するためにある儀式を行った。

それは、悪魔狩りだった。

対象はマイノリティ、少しでもコミュニティから外れる人間はストウレーガ（悪魔付き）とされ、粛清の対象になった。

あいつは少しおかしい。きっとゴールドにかかっているに違いない。感染が広まる前に殺してしまえ。

科学万能とされる時代の問題が、もっとも非科学的な方法で解決が図られたわけだ。

今でこそ悪しき風習だったとされている悪魔狩りの被害者は、1000万人とも、一説では億を超えとも言われている。

人権はおろか生存権すら否定されたストウレーガがなにをされたかについてはあまり話したくない。話すにしても聞くにしても、吐き気がするほどの嫌悪感がわき上がってくるからだ。今朝のニュースのように、全身に針を突き刺す拷問などはいかにもありそうなことだ。人間がどれだけ残酷になれるかを試みた行いだったのだ。

そして、ここからは正史には載らないことだが、そのストウレー

ガの中に、異能者がいた。

今まではサイレントマイノリティとして社会に溶け込んでいた彼らは、自己の身の安全のために悪魔狩りと戦った。

異能者たちは同じような力を持った仲間を集め、組織を作った。それが白金だ。由来は、自分たちとはゴールドは関係ない、潔白であるという意味らしい。

それから、マジョリティである人類と、マイノリティである白金の戦いが始まった。

後世の俺たちには、刑死者戦争、または12番戦争と呼ばれるこの戦いは、歴史の裏舞台で実に半世紀以上続けられる。

世界史の教科書にゴシックで記される大災害の多くはこの戦争の傷跡らしい。ちなみにこの名前は白金の結成当時の幹部は22人で、それぞれが大アルカナのカードを割り当てられ、その時のリーダーが12番、『刑死者』だったからだ。

停戦は人類側からもたらされた。いわく、ストウレーガは国連及び各国の管理下に入りその身柄を監視下に置けば、その安全と生活は保障する。

ストウレーガの多くはその提案を諾とした。

ストウレーガといっても、そのほとんどが実社会を経験しており、白金に身を置いているのは命の危険があるため仕方なく、という理由だったからだ。また、実社会を体験している彼らには、監視下に置かれることにも抵抗は少なかった。当時から、生まれたときに網膜や指紋は登録されており、多かれ少なかれ国やそれに近い団体によって管理下に置かれるのには慣れていたので。

停戦ムードは高まっていく。

しかし、白金の最高幹部22人の内、多くが停戦には賛成しなかった。

今まで奴らにされてきたことを忘れたのか？　これは悪しき敗北主義ではないか。

こうして白金は停戦派と抗戦派に2分される。

そして、当時の最高幹部のひとり、『塔』の称号を持つアイリィン・シルバーバレットは白金の8割を連れ、脱退して新しい組織を作った。それが俺の所属する黒金だ。

多くの構成員を失った白金がその活動を細々とながらも続けているのはまた別の話。

人類と和睦した黒金は各国の管理下の元、活動を続けている。やっついていることは白金だったときとほとんど変わらない。

ストウレーガの互助だ。

七草学園生徒会は黒金の下部組織であり、俺を含めた生徒会役員7人は全員ストウレーガだ。

俺たちは憶良市やその近辺でストウレーガ絡みの事件が起きた場合はその対象者を仲間に取り入れるために交渉し、保護下に置く。

そして、黒金には、白金にないひとつの仕事が加わった。もしそのストウレーガが黒金のスカウトに応じず、仲間にならない時は、その対象者を粛清する。

つまりは殺すのだ。

## アクション1

平日の昼というのはなぜか開放感がある。

俺たちは第2女子寮に向かうため住宅街を歩いていた。

「いい天気ね。学校サボって不謹慎だけど、気持ちいいわ」

「だな。たまにはこういうのもいいな」

俺は恵比寿と正志の会話を黙って聞いていた。

人通りもなく、静かだ。

もともと憶良市は東京といっても相当田舎だ。山は近いし人も少ない。

「ねえ、秋葉。なにさっきから黙っているのよ」

「ん？ああ、昼はどうしようかと思って。俺は大抵学食だからな。

一度学校出たのに戻って食うのも嫌だしなあ」

「そうねえ。私も今日は購買のつもりだったからなにも用意してないわ」

「じゃあ、飯田も誘ってなにか食うか」

「それならコンビニでなにか買っていつてあげましょう。病欠で休んでいるなら外には連れ出せないでしょうから」

ちようど通りにコンビニがある。俺は、だが、異変に気づき、店内に入ろうとする正志の肩を押さえて止めた。

「なんだよ、巧。ん？ 桃花ちゃんか？」

正志はコンビニのガラスに張られたポスターのモデルを指差すが俺は無視した。

「恵比寿、気付いているか？」

「ええ、店内に人がいないわね」

コンビニ内には誰もいなかった。店員の姿すらない。

「？それがおかしいことか？」

俺は正志の質問には答えず、周りを見渡した。静かだった。いや、静か過ぎる。

「結果が張られているな。どうやら出遅れたらしい」  
ストウレーガの中には空間そのものを隔離できる能力者もいるが、この結果は物理的に人を排除して出来ている。おそらく、マニゴルドの奴らだな。

俺は無言で歩き出した。恵比寿と正志は黙って後に続く。  
女子寮に近い、最初の曲がり角で道端に立っている警官を見かけた。

警官は俺たちを見つけると、手で制して俺たちを止めた。

「すみません。ここは通行止めです」

「なにかあつたんですか？」

「ええ、この先でガス漏れがありました」

「俺たち、この先に用があるんですけど、通れませんか？」

警官は怪訝な顔を一瞬見せて、笑顔で俺たちに言った。

「ちよつと待って下さいね」

笑顔のまま警官は懐に手を入れると、素早く拳銃を抜いた。だが、拳銃は警官の手にはなく、俺の手に握られている。

俺は奪い取った拳銃を警官の眉間に当てると、引き金を引いた。

乾いた音が静かな住宅街に響く。俺は拳銃を捨てると、倒れている警官が首に掛けていたものを取り上げた。

金縁に赤い十字架、マニゴルドの証であるブラッディクロスだ。

銃声に呼応するように、中世ヨーロッパ風の鎧を着た騎士たちがぞろぞろと俺たちの前に姿を現した。

人類とストウレーガとの戦争が停戦に向かったとき、ストウレーガが交戦派の白金と停戦派の黒金に分かれたことは話した。

実は、人類側でもその対立はあったわけで、停戦が成立した時に人類側の交戦派が作った結社がマニゴルドだ。

こいつらは神の名の下に、人類の敵、ストウレーガの抹殺を任務

とし、未だに悪魔狩りを続けている。支持団体は各宗教団体から企業など、さまざまだ。各国政府もこいつらを黙認しており、場合によっては援助している。今回、俺たち黒金の情報網より先に兵を派遣してきたのも、情報の横流しがあったのだろう。

俺は携帯を取り出す。馬場先輩にかけてみるが通じない。電波妨害がされているのだ。

「仕方ない。正志、恵比寿。俺たち3人でやるぞ」

「はあ、面倒くさいわね。ごめん、ちょっと借りるね」

恵比寿は扉から伸びている庭木の枝を一本折ると、それを一振りした。枝は棒状の鞭に姿を変える。

「ったく、こんなことなら昼飯食ってからにすればよかったな」

正志は黒い皮製の手袋をはめる。

「それじゃあさっさと済ませて飯にしよう」

俺は気負うでもなく騎士に近づいた。

右後ろには恵比寿、左後ろには正志。

敵の数は30程度。舐めてるね、本気でストウレーガと対峙するなら桁がひとつ少ない。

騎士のひとりが斬り込んできた。俺はその斬撃をかわし、右にいなした。騎士はバランスを崩しながら恵比寿の前に出る。

恵比寿は、しかし、なにをするでもなく騎士の横を通り過ぎた。

一瞬だけ動きを止め、啞然とした騎士は恵比寿の背中に斬りかかろうとした。

だが、振り上げられた剣を持つ右手は、振り下ろされることはなかった。

庭木から伸びた枝が騎士の腕に絡みついている。騎士は、その枝に振り回されるように扉に叩きつけられた。

恵比寿の能力は植物の操作だ。

「プラントパペティア」なんて偉そうな称号を持っている。

「おいおい、あまりものを壊すなよ」

「そんなこと、この時代遅れのコスプレたちに言ってもよ」

次に斬り込んできた騎士は正志の前に出す。

正志は騎士の胸甲を撫でた。それだけで騎士は悶え苦しみ、転げまわって、そして動かなくなった。

鎧の隙間からは湯気が上がっていた。

正志は熱を操ることが出来る。ファイアスターターのように発火作用はないが、熱弾と呼ばれるものを体内に打ち込み、内側から煮殺すのだ。

「えぐいね、相変わらず」

「巧、おまえもサボってないで戦えよ」

「俺の能力を知ってんだろ？こんな奴ら相手に使いたくないんだよ」

幸い俺は子供の頃から実家に武道を習わされてきた。こいつら雑魚相手にはそれで十分だ。

ふたりの仲間をやられて、マニゴルドの騎士たちは警戒して遠巻きに俺たちを包囲している。時折数人が一斉に斬り込んでくるが、俺たちは問題なく処理する。

死傷者が10人を超える頃には正面から攻める愚を悟ったのか、攻めてこなくなった。

と、その時前方から爆発音が響いた。煙が上がっている。あの場所は、第2女子寮だ。

「正志、恵比寿、俺は先に行く。ここは頼む」

俺は走り出した。妨害しようとする騎士のひとり蹴り飛ばし、俺は女子寮に向かった。

## アクション2

黒煙の上がる室内。壁はごっそりと消し飛び、薄暗かった部屋は昼の日差しにさらされていた。

「ふん、逃がしたか」

マービン・クルードは外を見た。静かな住宅街が広がっていた。マービンの姿は凄惨だった。鎧には無数の穴が開き、左手は根元からもぎ取られている。だが、口元に浮かぶ不敵な笑みは消えていなかった。

「デュナミス」

「どうしました？」

室外から騎士に声をかけられ、マービンは部屋を出た。

「ストウレーガの襲撃を受けています」

「白金、ですか？」

「いえ、どうやら黒金のようです」

「ああ、そういえば憶良市には黒金の拠点がありましたね」

マービンは残った右手で顎を撫で、少し考えた。

「今回は引くことにします。用意ありませんね。新種のデータを取れただけでよしとしましょう」

「そう言わずにゆっくりしていけよ」

その声は、マービンの背後から聞こえた。

俺は女子寮に飛び込んだ。爆発音のあった2階に階段で走りこむ。そして、廊下に3人の騎士を見つけた。

飯田にやられたのか腕のない若い騎士、おそらくこいつが指揮官だろう。

俺は開け放たれた部屋を覗く。中は血臭に満ちており、ベッドの上には見覚えのある女子の死体が寝ている。確か隣のクラスの奴だ。「まったく、ストウレーガはまさにコックローチだね。次から次へと沸いてくる」

「なら放っておいてくれないか？正直おまえらのしつこさには辟易してるんだよ」

「それは出来ないよ。だって害虫は駆除しなくちゃ、ね」

俺は一步前に出た。騎士のひとり俺に立ち塞がる。

「それで、飯田はどうした？」

「飯田？」

「飯田恵。おまえたちの目的だろ？」

「ああ、あれね。掃除する塵の名前なんていちいち覚えてないよ」

「ああ、そうかよ」

騎士が斬り込んでくる。俺は剣を持つ騎士の手を取り、回した。騎士は空中で一回転してうつ伏せに倒れる。俺は倒れている騎士の背中に奪った剣を突き立てた。さすがはマニゴルドの特殊セラミック製の剣、いい切れ味だ。

指揮官らしい騎士は舌打ちした。今倒した騎士を犠牲にして俺の能力を見るつもりだったんだろ。

俺は騎士の背中から剣を抜いた。残りは2人。

「一応名乗っておこうか。礼儀だしね。私はマービン・クルード。」

マニゴルドのデユナミスだ」

「へえ、デユナミスか。高位だな」

マニゴルドには9つの階位があり、デユナミスはその第5位。実質的には前線で活動する最高位だ。こいつがいるからこの程度の規模で悪魔狩りに来たということか。

「それで、君の名前は？」

「塵に名前を聞くのか？」

心音を数える。規則的な音、俺は軽く息を吸った。

「言っただろ？これは礼儀だって」

息を吐く。俺は答えた。

「俺は、巧。秋葉巧だ！」

俺は能力を発動した。キーンと、耳鳴りがする。そして、俺以外の世界は凍った。規則正しい心音、俺の四肢に重み加わり、周りの全てがスローモーションになる。

これが俺の能力、時伏せだ。

一足で迫り、前にいる騎士を袈裟斬りにする。2足目でマービンの腹に剣を突き立て、横に裂いた。

だが、剣の感触は目の粗い砂鉄に剣を通すようなもので、肉を切るものではなかった。

マービンの横を通り過ぎ、振り返り様に首の半分を切断する。やはり手応えが悪い。

ゆつくりと、マービンが振り返る。

「高速機動！ いや、これは時間干渉、時使いか！」

「全身を機械化している。人造人間？」

人造人間は12番戦争時、個体差で圧倒的に劣る人類側が白金に対抗するために発明した人造兵器だ。筋肉、骨格から神経に至るまでを機械化して身体能力の向上を図ったらしい。

俺は足に力を入れた。マービンの顔を見る。不敵な、いやらしい笑みを浮かべていた。ゆつくりと右手を俺に向ける。

瞬間、俺の目に火花が散った。フラッシュバックが起こる。

俺は反射的に扉の開いている部屋に飛び込んだ。

遅れて起こる爆発。轟音が女子寮を包んだ。指向性爆弾だ。おそ

らく腕に仕込んでいたのだろう。

音が収まる頃、廊下には人の気配はなくなっていた。

「……逃げてくれたか」

俺はベッドに倒れこみ、ゆっくりと時間を元に戻した。隣には名も知らない女性徒の死体。

体中を内側から軋むような痛みが走り、心臓が、不整脈が起こったように飛び跳ねる。能力を停止する際、うまく適応できない心臓が身体中に急激に血液を送るために毛細血管を傷つけるのだ。

俺の能力の副作用だ。

さらに、今日はあれも使った。差し込むような頭痛と目頭の痛みも加わっている。

「秋葉！いないの？」

廊下から恵比寿の声が聞こえる。呼びかけに答えようとすると声が出ない。俺は一度大きく息を吸って、叫んだ。

「ここだ！」

俺の声に答えて恵比寿と正志が室内に入ってくる。

「いるんならさっさと……、ちよつと！大丈夫なの？」

「ああ、問題ない。いつものやつだ。ちよつと時間を遅くしただけだから」

俺はベッドから身体を起こした。

「それで、マニゴルドの奴らは？」

「逃げたみたいね。秋葉、飯田さんは？間に合わなかった？」

「ああ、俺が着いたときにはもういなかった。見た感じだと殺されてはいないみたいだけど」

「はあ、どこかに身を隠したのね。探すのは面倒ね。ほら、立ちなさいよ」

恵比寿は俺に手を差し出す。目つきと口は悪いが根はいい奴なのだ。

俺は恵比寿の手を取り立ち上がった。よろける俺の身体を恵比寿は支えてくれる。俺は恵比寿に寄りかかった。

ふと見ると今まで無言だった正志が俺を見ていた。

「……なんだ？」

「あ、いや。巧、おまえ、今ベッドに寝ていたよな」

「？ それがどうした？」

「いや女子のベッドに寝ていたんだろ？」

しばしの無言、恵比寿はいきなり俺を突き飛ばした。

「痛い！恵比寿、怪我人になにしゃがる！」

「うるさい！死ぬ！早めに死ぬ！」

恵比寿は肩を怒らせて部屋を出て行った。正志は恵比寿の後に続く。俺はよろけながらも立ち上がり、部屋を出た。

そして、一度だけ室内を見て、扉を閉めた。

## 昼休み

「ほら、さっさと脱げ」

生徒会室。俺は渋谷先輩に言われてネクタイを緩めた。

時刻はまだ昼休み中。校舎を出てから戻ってくるまで30分も経っていない。

「ちょっと！ここで脱がないでよ！」

「怪我の手当てが優先だ」

渋谷先輩にそう言われては恵比寿もそれ以上は強く言えない。

俺は上半身裸になった。俺の身体は痣だらけになっていた。毛細血管が切れて内出血しているのだ。

「痛々しいな」

「俺はもう慣れましたけどね」

渋谷先輩は俺の腕を撫でる。すると、撫でられた箇所のはは消えていった。

渋谷先輩の能力は細胞の促進だ。『ネクロシス』なんて称号を持っている。切り傷などの軽い怪我なら一瞬で治してくれる便利な能力だ。ただ、これをやってもらうともものすごく腹が減る。渋谷先輩が言うには、この能力を使いすぎると栄養失調になるらしい。

渋谷先輩は俺の身体を弄る。先輩の手が俺の太ももに触れたところで俺は立ち上がった。

「もう大丈夫です」

「ん、そうか。残念だな」

なにが残念なのかは怖くて聞けない。と、その時扉が開いた。

「おまたせ、買ってきたよ」

馬場先輩、岡地先輩に新橋が両手に持ったビニール袋をテーブルに置いた。

「なにがいかかわからなかったから適当に買ってきたわ。好きなのを食べて」

テーブルに弁当が並べられる。定番高倍率メニューの焼きそばパンやコロツケパン。シーフードカレーに釜飯弁当の速攻でなくなるレア弁当や、フィレスターキ弁当なんて俺がみたことのないものである。

「……馬場先輩。購買は混んでいませんか？」

「そういえば混んでいたわね」

「よく買えましたね。こんなに」

ふと見ると岡地先輩が八重歯を見せてにやりと笑っている。その後ろでは困り顔の新橋。

「実は……、購買で並んでいたら、その、貰ったんです」

「貰った？弁当を？」

頷く新橋。

「につしつし。購買にはくーちゃんと行くにかぎるね」

ああ、そういうことか。うちのちびっ子生徒会長は滅茶苦茶人気が高い。隠れファンクラブがあるとかないとか。たまたま購買で見かけた有象無象がこれをきっかけにお近づきになろうと貢いだのだから。

もつとも、本人はどこ吹く風、と、いうよりは本気で自分がもてることに気付いていないふしがある。無駄に終わるだろうな、ご愁傷様。

そして、そんな馬場先輩のおこぼれを当然のように受け取るのが岡地先輩だ。この人は可愛い顔してるのにやることなすことがトリッキーだからなあ。

俺たちはテーブルに弁当を広げて昼食を始めた。

俺の前には幕の内弁当に親子丼、それに数種類のパンが並んでいる。狙っていたフィレスターキ弁当は岡地先輩の前に置かれていた。ちなみにこの人はよく食う。目の前にあるのはフィレスターキ弁当

だけではなく合計6種類の弁当だ。

「岡地先輩。フィレステーキ、一切れくれませんか？」

「えー、やだよ。私だってフィレステーキ弁当、久しぶりなんだから」

「そう言わず。俺、食べたことないんですよ」

岡地先輩は渋々とながらも弁当を俺のほうに差し出した。俺はこの時、岡地先輩の目の奥にある妖しい光を完璧に見逃していた。

「もー、一切れだけだよ」

「ごちです」

俺は岡地先輩のフィレステーキ弁当に箸を伸ばした。と、その時突然岡地先輩が叫んだ。

「あ！すっぱんぼんのくーちゃん！」

「なに！」

俺と正志は一斉に馬場先輩を見る。馬場先輩は頭の上でつかい「？」を浮かべてシーフードカレーを食べていた。もちろん服は着ている。

俺は、ゆつくりと岡地先輩に視線を戻した。

空を切る箸。フィレステーキ弁当は箱ごと消えていた。

「あの、岡地先輩。肉は？」

「もつないよ。食べちゃったからね」

「あんだ、能力使って味わいもせず食べたのか！」

「ふっふっくん、騙されるほうがわるいんだよーだ」

「うん。今のは秋葉先輩が悪い」

その攻撃は新橋からだ。横にいる新橋はジト目で俺を睨んでいる。

「この、ど変態が！」

と、これは恵比寿。なんだ？ なぜか俺、窮地に立たされてる？

「いや、あれは男なら絶対見るって」

「俺は見なかったぞ」

渋谷先輩、それはあんだが特殊だからだ。

「おい、正志」

「な、なんだよ。俺に振るなよ」

「おまえだつて見ただろ！」

「知らん！俺は知らん！」

「さて、それじゃあみんな、食べながら聞いて」

俺の窮地を救ってくれたのは空気を読まないクールな馬場先輩だった。シーフードカレーは半分以上残っている。この人は身体に合わせて低燃費だ。

俺たちは、いつも昼を一緒に取っているわけではない。

それぞれのクラスや部活の仲間と取るのが普通だ。

今回一緒に取っているのはもちろん親睦会つてわけではない。飯田恵の件だ。

「現在芳樹が市内に部下を配置して飯田さんを探しているわ。今日中には見つかるでしょう」

「もう市外に出ているかもしれませんよ」

「それはないわ。主要交通機関にはもう手配済みだから。電車なりバスなりを使ったなら報告が入るはずよ」

憶良市は田舎都市らしく車や電車などの足がないと隣町に行くのにも一苦労な場所だ。歩いて隣町まで行くには時間がかかるし、なにより目立つ。

「2年生の3人はこのまま寮に帰って待機していて。芳樹が飯田さんを発見次第動いてもらうわ」

「馬場先輩。まだ見つかってないなら授業に戻っていいですか？」

「なに優等生ぶってんのよ。午前中はサボっていたでしょ」

「俺たちのクラスの5限、御茶ノ水先生の世界史だろ？」

御茶ノ水先生は初老の、七草学園の名物教師だ。担当は世界史に地理。俺はこの人のファンだったりする。

「寮にいて。もう早退届は出しているし発見までにそれほど時間はかからないと思うわ。部屋で寝ていていいから」

「あの、馬場先輩。私が秋葉先輩の代わりに動きましょうか？」  
新橋はみんなの前では俺を名前で呼ばない。馬場先輩は新橋に笑いかけた。

「いいえ、今回はあなたが動くほどのことではないでしょう」

## フォートファイブス

学園から出てしばらく国道沿いに歩く。

それから側道に入って峠道を20分ほど登ると生徒会専用の寮、第5学生寮、通称フォートファイブスがある。

俺と恵比寿、正志は重い鉄門を開けてフォートファイブスに入った。左右に西洋風の庭園を眺めながら50メートルほど歩くと、やつと俺たちの生活している洋館に着くことが出来る。

「毎日思うが、これ、動く歩道つけようぜ。門から建物まで離れすぎだつて」

「俺たちは一応学生だからな。動く歩道はさすがに贅沢だろう」

洋館のエントランスは吹き抜けのホールになっており、ここを左に行くとき女子寮、右に行くとき男子寮だ。

正面の一階は食堂、厨房、談話室、図書室などがあり、2階は大浴場やクリーニングルーム、大型スクリーンのある映像室などの共有スペースになっている。

この広大な施設を俺たち生徒会7人と住み込みの寮母、それに通いの職員5人だけで使っているんだから贅沢だ。七草学園の生徒会はここで生活できたり勝手に早退できたりと相当好き勝手できるためにステータスになっていたりする。

「やあ、おかえり。大変だったな」

2階に通じる階段から下りてきた、黒と赤を基調にしたシックなメイド服を着たこの女性はこの寮の寮母、大久保芳樹さんだ。180近い長身。腰まで届く長髪を後ろに払う姿などは男の俺が見ても格好いい。

この人はストウレーガではない。穿った見方をするなら、俺たちを監視するため政府から派遣された公務員だ。ちなみに、この人の着ているメイド服は制服ではない。純然たる趣味だ。

「ただいま、芳樹さん。それで、どう？ 飯田さんは見つかった？」  
「いや、まだだ。どこかで身を潜めているようだな。洋子、悪いが力を貸してくれ」

「まったく。仕方ないわね」

「それで、巧。言い辛いんだが、その、また、ご実家から手紙が来ているぞ」

芳樹さんは申し訳なさそうに俺に手紙を差し出した。俺は苦笑してそれを受け取り、開封せずにその場で丸めてゴミ箱に捨てた。

「面倒かけるね。でも、言ったとおり俺に渡さないでそのまま捨てていいよ。それじゃあ俺は部屋で寝ているから。なにかあったら呼んで」

俺は不快感を抑えながらその場を去った。

秋葉巧はエントランスから男子寮に去っていった。

「なんだ、あいつ、まだ実家と揉めているのか？」

「原みたいに毎月実家に帰っているほうが珍しいわよ。私だってこの学園に編入してからだからもう5年は帰ってないもの」

「まあ、巧の場合は少々特殊だがな。それより、さっそく手伝ってくれ」

大久保芳樹と恵比寿洋子は原正志をその場に残し、一階のドレスルームに入った。

芳樹は鏡に向かい、自身の瞳を見た。きっかり3秒間、瞬きもせず見続け、網膜認証が済むと、鏡は左右に分かれ、地下に続く階段が出現した。

侵入者対策のため、曲折した狭い階段を下りる。その先には広大な半地下の部屋が存在した。

オペレーションルームだ。

部屋の中央にある巨大なトリビジョンには憶良市全域の地図が映し出されている。

「どうだ？動きはあったか？」

芳樹がモニターに向かうスーツ姿の女性に声をかける。芳樹の部下だ。

「いえ、動きはまったくありません」

「ふむ。マニゴールドと戦ったらしいな。身動きできなくなるほどの重傷を受けたってことではないといいんだが。よし。洋子、頼む」

洋子は面倒くさそうにディスプレイに触ると、集中した。

感覚が消失し、意識がオペレーションルームから飛び出す。

憶良市全域にある植物と洋子の意識は一体化する洋子は、風が流れるように、片っ端から飯田恵の探索を開始した。

「……だめ、見つからないわ。飯田さんは外にはいない。どこかの室内。それも植物のないところにいるわね」

洋子はゆっくりとディスプレイから手を離れた。ディスプレイに触れてから3呼吸ほどの時間だった。

「そうか。ご苦労だったな」

「それで、どうするの？飯田さんがじっとしていたらいつまで経っても見つからないでしょ？」

「大丈夫だ。飯田恵が何かしらの理由で動けないのなら別だが、夜までには必ず動くよ」

「なんでわかるのよ」

「はは、洋子。ストウレーガだろうと動物だ。動物は、腹が減るもんだ。だから、夜までにはきつと動きがある」

洋子はきつい目を細めた。

「あーあ。それなら夜に呼んでよ。学校早退しちゃったじゃない」

「なんだ？嬉しくないのか？私が学生の時はどうやって学校をサボるうかと心血を注いだものだが。学生の質も変わったなあ」

「それでも私たちは生徒会役員、優等生なのよ」

洋子はそれだけを言う口を押さえ、あくびをし、軽く手を振ってオペレーションルームから出て行った。

## インターロッド2

熱い熱い熱い。

飯田恵は湿った地下室にいた。

寝巻きは所々焼け焦げ、肌が露出している。

顔半分はマービン・クルードの指向性爆弾によってできた火傷のため、爛れていた。

恵は火傷を冷えたコンクリートにつける。

気持ちいい。

懺悔と恐怖に支配された恵の心がわずかに平常心を取り戻す。

そして、その平常心は狂気へと変容した。

痛い、熱い、お腹が減った。自分はなぜこんな目に合っているのか、自分がなにをしたのか。自分は悪くない。

ならば、自分以外のものが悪い。

憎い憎い憎い。

自分を取り巻く、全てが憎い。飯田の妄執は、突然の声で現実を引き戻される。

「……飯田、恵さんだよね」

恵の髪が揺れた。

その男は、恵の背後にいた。そんなはずはない。部屋には恵1人であり、誰もいなかったはずだ。入ってきたことに気付かなかった？ 狭い室内、気付かないわけがない。なにより、扉は動かなかった。

だが、その男は、いた。

男は細身の身体を学ランに包み、右手には日本刀を持っている。恵は男を見た。男は恵と目が合うとメガネを中指で押し上げて顔をしかめた。

「ああ、酷いな。黒金にやられたのかな？」

「……ひゅーっ！」

恵は大きく息を吸い込むと、針を伸ばした。

男はわずかに身を傾げるだけでそれをかわした。

「えっと、まずはなにから話そうかな。そうだね、まずは祝辞からだね」

度重なる恵の攻撃を無視するように男は話を続ける。

「おめでとう、君は選ばれた」

「わあああああ！」

悲鳴に近い叫び声を上げ、恵は針を束にして男にぶつけた。針は壁を突き破り埃を舞い上げる。

視界が消える。荒い息、ようやく視界が戻る頃、恵は、背後から肩をつかまれた。

「えっと、どこまで話したかな。ああ、自己紹介がまだだったね。

僕は神田惣一かんだそういち」

恵は男の手を振り払い、離れた。男、神田惣一は眉を寄せた。

「……少し残念だな。これでもそれなりに知名度はあるつもりなんだけど」

恵は大量の針を伸ばした。津波のように上から針は惣一を飲み込む。

ち……ん、と、その音は、遅れて聞こえた。

ばさりと針は地に落ち、神田には届かなかった。

恵は、惣一が刀を一閃しただけで、自分の針が全て切断されたことを知った。そして、自分がこの男には絶対に勝てないことを悟った。

惣一は恵の怯えた目を見て満足そうにならずいた。

「ああ、これでやっと話ができるね。まずはおめでとう。君は選ばれた、特別な人間だ。僕は神田惣一。白金の中では、『愚者』で呼ばれているよ」

## 昔の夢

夢を見た。あまり思い出したくない、昔のことだ。

俺の実家、秋葉家つてのは地元ではそれなりの名家で、俺はその長男として恥ずかしくないように、と育てられた。

その教育課程で、自分の家を名門だと信じ、誇りに思うようになった。

今考えればそれはそうなるように教育されていたんだろうけど、結果、他家を軽んじて、秋葉の人間であることを鼻にかける嫌な奴になった。

クラスメートのほとんどはそんな俺を嫌い、そして、わかりやすい手段に出た。

暴力だ。

だが、俺は幼少より武道を叩き込まれていたのでそれを返り討ちにした。

そして、俺は孤立した。

クラスメートの中には秋葉の名に媚を売ってくる奴もいたが俺はそういう奴は無視した。

当時の俺は卑しい家の人間と群れる必要はないと考え、それを口に出してもいた。

生活のために教職を選んだ担任は俺の孤立を黙認する。これは俺が孤立した小学校中学年から七草学園中等部に編入する中学2年までの担任全てがそうだった。

もっとも、俺はそれを悪からぬものと思っていたのだが。

当時の俺は、安っぽい情熱で説教してくる先生がいたらたまらなかつただろう。学校の教師というものを見下していたし、その情熱を受け取れる器量もなかつたしな。

下らない、つまらない学校生活を消化的に済まし、放課後は家に直帰して習い事の稽古を受ける。そんな毎日を送っていた。

そして、あの娘にあったのは、たまたま習い事が中止になったエポケットのような日のことだった。

控えめなノックの音に目を覚ます。  
時計を見る。

もうすぐ19時になるうかという時間帯だ。ぐっすり寝てしまった。久しぶりに使った時伏せは思った以上に俺の体力を奪ったらしい。

俺はベッドから起きて、扉を開いた。

外には新橋が立っていた。

「なに？夕飯？」

「いえ、あの、電話です」

新橋は申し訳なさそうに携帯電話を俺に差し出した。

俺のではなく新橋の、だ。余談だが今のご時世、携帯電話にもトリビジョン機能は付いてるものだが実はこれが人気がない。知らない人間に姿を晒すことになるし、一々身だしなみを整えてからでないと使えないためだ。機能自体はあるがオフにしているのだ。

「……誰から？」

「あの、東桃花あずまとうかさんっていう、女性の方から」

「たたく、あの手この手でやってくる。俺にかけても電話に出ないものだから、新橋の携帯を調べてかけてきたのだろう。」

俺は新橋から携帯を受け取ると、即行で通話を切った。そのまま押し付けるように携帯を新橋に返した。

「悪いけど、着信拒否しておいて」

俺は扉を閉める。新橋は、するりと扉の内側に入ってきた。

「まだなにか用？」

「東桃花さんって誰ですか？」

「実家関係者」

「ずいぶん親しそうでしたけど？」

強気な口調とは裏腹に、新橋の瞳には不安の色が見える。最近やられっぱなしだからな。俺は言葉を選んで言った。

「許嫁」

新橋の口角が下がる。驚いてる驚いてる。成功だ。

「許嫁、ですか？」

「元、な。俺は実家とは縁を切ってるからもうその関係も解消されてるよ」

俺はベッドに腰下ろした。ちょこんと、新橋も俺の隣に座る。

俺は言葉を続けた。

「時代錯誤だろ？ だけど俺の実家では当然のように行われていることだよ。閨閥作りの一環だよ」

「巧さんは、結婚するんですか？」

「だからしないって。向こうもその気はないはずだよ」

かちりと、時計の針が動いた。19時だ。

「今日の夕飯は？」

「各自で取ることになりそうですね。芳樹さんが忙しいから」

俺は立ち上がった。新橋に手を差し出す。

「それじゃあ飯食いに行こうか。街まで出るのは面倒だけど」

新橋は俺の手を取り立ち上がった。

「そうですね。普段は面倒に感じないんですけどこういつ時って不便ですよ、こじ」

「なにしろ山の中腹だからなあ」

俺たちは手を繋いだまま部屋を出る。

断っておく。俺と新橋は別に付き合っているわけではない。ただ、新橋が手を離さないだけだ。いや、振り払うこともないだろ。

新橋が俺の手を離したのはエントランスで転がる物体を見かけたときだった。

「ごろごろと転がる物体は岡地留美先輩だった。」

「……先輩、なにしてるんです？」

「芳樹がご飯つくってくれないんだよう。」

右にごろごろ、左にごろごろ。これは芳樹さんが夕飯を作らないことに対する抗議行動、なのか？

「あの、俺たちこれから飯食いにいきますけど、一緒に行きます？」

岡地先輩はぴたりと俺の足元で止まる。そして、仰向けのまま俺にいつものにやり笑いを見せた。

「え、いいの？2人のジャマじゃないかなあ？」

「？なに言ってるんです？無理にとは言いませんけど。」

「は。みいちゃん、苦労するね。」

「わかってくれますか？」

「??女つてのはよくわからない会話をする。」

「それじゃあ俺たちは行きますよ。」

「わあ、まってまって。私も行く。」

岡地先輩は立ち上がって俺たちの後についてきた。回りすぎたのか、少しよろけていた。

### インターロード3

フオートファイフスに向かう峠道の途中、憶良市には運動公園がある。野球場がひとつとサッカー場がひとつ、それに1週400メートルのトラックがあるだけの広場だ。

ハイキングコースの入り口でもあるそこは休日には多少なりとも賑わうが平日の夜間には人気はなかった。

その日、たまたまそこに集まった3人が半裸の飯田恵を見つけたのは不運だった。

目的もなくただ彷徨い歩いている恵に3人は下卑た笑いを見せながら近づいた。

「ねえ、そんな格好でどうしたの？」

恵は、長い髪で覆われた顔を上げて3人を見、笑った。3人は恵の焼け爛れた顔を見て絶句した。

「ば、ばけもの！」

そう口走った1人は口に針を打ち込まれて絶命した。

逃げる2人目は針に足を絡めとられ空中に放り投げられ、首から落ちて頸椎を折る。

仲間を見捨てて逃げ出した3人目は、しかし、異様な格好の集団に阻まれる。戸惑いは一瞬、3人目は状況を理解できないまま、異様な手段の一人に首を切られて殺された。

異様な集団、マニゴルドの騎士たちは遠巻きに恵を囲む。

「……蛆虫！」

恵は針を伸ばした。騎士たちはそれを小型の銃で迎え撃った。

引き金を引くと銃は炎を撒き散らした。火炎放射器だ。

黒い針は焼け落ち、炎は恵を襲った。

恵は転げ回り、動かなくなった。

騎士たちは恵の死を確認するために、ゆっくりと包囲の輪を縮めた。

そして、全滅した。

8方に伸びた針が全ての騎士を一瞬で貫いていた。しゅるしゅると黒い針は倒れている恵に巻き取られていく。恵は、死体の山の中、ゆっくりと立ち上がった。

## ブレデター

外はもう夜だった。晩春とはいえまだ少し肌寒い。

「うーん、いい季節だねえ。今が一番すごしやすいね。これから梅雨が来て、その後はほとんど暑くなるからね」

「憶良市の夏はすごしやすいほうですよ」

憶良市は東西に川が流れており、その涼気のおかげで都心ほど暑くならないのだ。

「それでも夏は暑いからねー。でも夏はスイカがおいしいからねー」

「秋はどうです？」

「秋はいいねー。なんでもおいしい季節だよ」

「私は冬の鍋が好きです。私、お鍋って去年の冬に初めて食べたんですよ」

「そういえば馬場先輩たちは？」

「くーちゃんは図書室にいたよ。明彦はまだ部活じゃないかなあ」

「正志と恵比寿はどうしてるかな」

「さー？」

そんなどうでもいいことを話しながら坂を下りる。と、その時前方でぱつと明かりが灯った。

「なんだ？火事か？」

「あそこは運動公園ですね」

俺と新橋は駆け出そうとした。だが、岡地先輩が手を引いて止める。

「まあまあ。そんなに急がないで。ほら、お客さんもいるから」

岡地先輩の声に反応したようにマニゴルドの騎士たちが脇道から現れ、俺たちを包囲する。

「ひよつとしてフォートファイブスへの襲撃か？」

「いやあ、規模と部隊配置からそれはないね。この展開から見て…、たぶん運動公園に飯田さんがいるね」

岡地先輩、なぜか戦略眼が異常に発達してる。

「だけど芳樹は駄目駄目だね。ホームタウンでマニゴールドに先を越されているんだから」

騎士たちは遠巻きに俺たちを包囲して仕掛けてこない。こいつらの目的は、おそらく俺たちの足止めなのだろう。

新橋は、俺をかばうように前に出た。

「おい、新橋」

「はい？」

新橋はこともあろうに声をかけた俺を見て、騎士に背を向けた。露骨なまでの隙、騎士の一人が迫る。

俺は焦った。

新橋はそんな俺を見て、腰を屈めてにこりと笑った。

「大丈夫ですよ」

剣が振り下ろされる。

だが、その剣は、底響きのする音と共に先だけを残して騎士ごと消失した。

カランと剣の先が地面に落ちる。その前、騎士のいた場所には直径1メートル、深さ10センチほどの穴が開いていた。

新橋の能力は重力だ。1000倍、10000倍まで増した自重で、騎士は文字通り圧死したのだ。

新橋が能力を解くと穴から今まで圧縮されていた騎士の成分、血液がごぼごぼと湧き出した。それを見て騎士たちはさらに下がる。

「わあわあ！ みいちゃんがやったら終わっちゃうよ！」

慌てて岡地先輩が新橋の前に出る。

「みいちゃんはあれだね。粹じゃないよね」

岡地先輩は小さい手を開いたり握ったりしている。

「いいよ。ここは私が相手するからみいちゃんと巧くんは先に行っ

て」

「大丈夫ですか？ けっこう数がいるけど」

「うん、食べ応えあるよねえ！」

岡地先輩は俺に八重歯を見せると、ふっと身を沈めた。そして、サイドスローの要領で思い切り右手を振った。

瞬間、右手が変容した。

岡地先輩の右手は、赤黒い、半液状のものになり、騎士たちに上から降りかかる。

ばしやりと、半液状のものは地に落ち、しばらく蠢うごめいた後、ずると岡地先輩の右手に帰っていった。

残っていたのは倒れている騎士。からんと、騎士の兜が外れた。中には、白骨化した死体があった。

岡地先輩は、騎士たちを、喰ったのだ。

半液状のものは岡地先輩の胃袋だ。

岡地先輩は身体の一部を肥大化した胃袋に変えて敵を直接消化してしまうのだ。

『プレデター（捕食者）』

それが彼女の称号だ。粹じゃないのはあんだだよ。

「さあって、と。久しぶりの食餌だからねえ。おなかいっぱいになるまでつきあってもらうよ〜」

岡地先輩は呆然と見ている俺と新橋に気付くと言った。

「ほらあ。早く行って！飯田さんを助けてあげて！」

「あ、はい」

俺と新橋は我に返り、走り出そうとした。

と、その前に一言。

「岡地先輩、その、悪食は直しましょうよ」

「好き嫌いはしちやいけないんだよ」

俺は岡地先輩のにやり笑いを見て、走り出した。後ろには新橋が続く。行く手を阻もうとする騎士は岡地先輩に喰われた。

俺たちは騎士たちの包囲を突破して運動公園に走った。

## ペルソナ

それは、運動公園の入り口にある駐車場で起こった。走っている最中、目の前が赤く濁る。続くフラッシュバック。

俺は反射的に新橋を押し倒した。

半瞬の差で頭上を銃弾が通過する。狙撃されたのだ。倒れている俺たちの前に騎士たちが行く手を遮る。

俺は、立ち上がった。少しふらつく。頭痛のせいだ。

「巧さん！大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫だ」

新橋は心配そうに俺を見た後、騎士たちを見た。

たまに新橋が見せる、ぞくりとするほど冷徹な目だ。

新橋は、ふっと、軽く瞳を閉じると俺にいつもの眼差しを向け、微笑んだ。

「ここは私が処理します。巧さんは先に行ってください」

新橋の口調は丁寧だが、有無を言わさぬ強さがあった。俺は少し迷ったが従うことにした。

「わかった。ここは頼むよ」

「ええ、飯田先輩をお願いします」

俺は、新橋に背を向けて走り出した。

秋葉巧は運動公園内に走り去っていった。

新橋美異は巧が見えなくなるまで見送り、顔に手を当てた。

最初、巧が美異をかばった時、美異は気が狂いそうなほど嬉しか

った。

胸に抱かれて感じる巧の息遣い、心音、ぬくもり……。

だが、その狂喜は一瞬で霧散した。巧が苦痛で顔をしかめたのだ。美異の周辺には特殊なフィールドが存在する。銃弾なら軌道は外れ、最新のレーザー兵器であつても光すら捻じ曲げる美異には通用しないだろう。

無駄で下らない些事でマニゴルドの連中は巧を苦しめたのだ。

手を顔から離す。

そして、美異は仮面ヘルメットを脱ぎ捨てた。

「あなたたち、邪魔です」  
美異は手を振った。

それだけで扇形の窪みができる。そこにいた10人以上の騎士はプレスされ、形すら残らず消失した。

ただ、存在した証明として赤い液体が騎士たちがいた場所から湧き出していた。

それを見て美異は口角を下げた。

「これは……、いけませんね。これでは陵辱が、ない」  
騎士たちはなおも美異に対峙している。

それが美異の癪に障る。

まだ背を見せて逃げていればかわいげがあるものを……。

群体に依存して思考を放棄した働き蟻を、美異は皆殺しにするこ

とにした。

美異は手のひらを上に向けて騎士たちに右手を伸ばす。

美異の手のひらには、黒い球が乗っていた。

いや、それは球ではなかった。

穴だ。

夜の闇の中でなお絶大な存在を誇示する暗い穴が、空間に浮かんでいた。

穴は美異の手から離れると、ふらふらと上昇しながら騎士たちの頭上に浮かんだ。

そして、大気をかき乱しながら活動を開始する。ゆっくりと、吸引を始めたのだ。

穴の周囲は光が捻じれ、遠近感が壊れる。

騎士たちは、微かな引力を感じた。

そして、それを感じたときにはすでに身体の異変に気付いた。後ろに下がれないのだ。

ゆっくりと、ゆっくりと穴に引きずられていく。

最初の騎士が穴に引き込まれる。

美異の手に乗るほどの小さな穴だ。騎士の身体は入らない。

そのはずだった。

穴に近づくと、騎士の身体はぐにやりと筒に通すように細くなった。

音すら穴に吸い込まれるその空間で、ただ淡々と、ゆっくりと騎士の身体は細くなっていく。

畳まれる本人だけは骨の碎ける音と、自身の悲鳴を聞いただろう。

騎士は、ストローで吸われるように細長く引き伸ばされると、穴に飲み込まれていった。

ここに至って騎士たちは自身の確実な死を悟った。  
慌てて逃げようとするがすでに遅かった。

騎士たちはゆっくりと、だが確実に死の暗い穴に引きずられていく。

ひとり、またひとりと騎士たちは穴の中に消えていった。

美異は、その様子を酷薄な笑みと共に見ていた。

全ての騎士が穴に消え、掃除は終わった。

美異が指を鳴らすと、穴は消失した。

そして、その声の主は美異の後ろから姿を現した。

「いいものを見せてもらったよ。それが白金の中でも最強を謳われた新橋美異のブラックホールか」

美異はその突然の声に慌てるでもなく振り返った。

声の主はメガネをかけた男、神田惣一だった。

「久しぶりですね、『愚者』。私に用ですか？」

「いや、偶然見かけたからね。素通りも悪いと思って声をかけただけだよ」

「ならば今すぐ消えなさい。見逃してあげます」

惣一は肩を竦めた。

「そろそろ戻ってきたらどうだい？ 黒金なんて退屈だろ？」

「あいにく、私はこの生活が気に入っているんですよ。戻る気はありません」

「あっははは！ 君が今の生活を気に入っているって？ そのおま

まごともみたいな学生生活が？ 白金最高幹部のひとり、『世界』の称号を持つ新橋美異のセリフじゃないよ、それ！」

美異は惣一を睨んだ。

瞬間、惣一の立っていた地面が穿つ。

だが、惣一はそこから10メートルは離れたところに立っていた。

「今すぐ私の前から消えなさい。さもないと……」

「僕を殺す？ やれやれ、ストウレーガは多かれ少なかれパラノイアだけど、君のは酷いね」

美異が再び惣一を睨もうとした時には、惣一の姿は消えていた。

声だけが響く。

「あ、そうそう。飯田恵さん、ね。彼女を黒金に誘うのはやめたほうがいい。彼女はもう、僕たち白金の仲間だからね」

それを最後に惣一の気配は消えた。美異は、巧の消えた運動公園を凝視すると、走り出した。

## 飯田恵

運動公園内は明るかった。所々に炎が上がっていて、公園内を照らしているのだ。

そして、炎は騎士たちの大量の死体を浮かび上がらせていた。その死体の中心に立つ全裸の女性。

「飯田、なのか？」

飯田は長い髪で身体を隠し、呆けたように俺を見ていた。

俺は飯田の変容に驚きを隠せなかった。

一番の変容は、髪が長いことだ。俺の知っている昨日までの飯田恵は、ショートカットだったはずだ。

それが今は身体を隠し、足元でとぐるを巻くほど長い。

さらに恵の全身は赤黒く焼けていた。

俺は倒れている騎士の手に握られている小銃を見た。火炎放射器か。これでやられたのか？ 顔は焼け爛れて目は窪み頬は痩せこけている。

俺は飯田に近づいた。

「飯田、大丈夫か？」

飯田はぼんやりと俺を見ていた。やがて目の焦点が合い、俺を確認した。

「……まだいた、蛆虫！」

瞬間、俺は思い切り身体を反らした。

俺の横を黒い針が過ぎ去る。俺はニユースを思い出した。死体には無数の小さな穴が開いていた。

そして、俺は針の正体を知った。

「髪！」

飯田は髪を硬質化して操っているのだ。

飯田の髪は束になり横薙ぎに払われる。俺はそれを身を屈めてか

わした。

「落ち着け、飯田！俺だ！同じクラスの秋葉巧だ！」

「あきば、くん？」

飯田の攻撃が緩む。

「ああ、そうだ。秋葉だ。もう大丈夫だからな」

「秋葉、くん。蛆虫！」

飯田は俺と認識した上で攻撃してきた。

「おい、飯田！」

「秋葉くん！蛆虫は蛆虫らしく醜く潰れて死んでよ！」

髪が波のように上から降ってくる。

俺は騎士から火炎放射器を奪い、飯田の身体には当たらないように放射した。

髪は炎を受けて燃え上がる。だが、それは最初のうちだけだった。燃えた髪の上からさらに髪が覆いかぶさる。硬質化して燃えにくいこともあるのだろう、圧倒的な髪の量で炎自体が飲まれていく。

俺は火炎放射器を放り出し、横に転がった。

今まで俺のいたところに髪が落ちる。

俺は転がりながら落ちていたセラミックソードを拾った。さらに追撃してくる髪を一閃して切り落とす。

「私は選ばれた人間、悪いのは蛆虫、私は悪くない！」

飯田の呟いている声が聞こえた。選ばれた人間？ まさか、白金と接触したのか？

「飯田！ 落ち着け！ 俺たちは選ばれたわけじゃない！ この力は、別に特別なものじゃないんだ！」

「うるさい！ うるさいうるさいうるさい……！」

飯田は攻撃を続ける。

俺はかわし続けた。

「私は悪くない私は悪くない私は悪くない……」  
呪詛のように飯田はそれを繰り返す。

飯田の顔は目に見えて悪くなっている。当然だ。髪を伸ばすのだ

って栄養を使う。無造作に使い続ければ体力を消耗し続けることになるだろう。

そして、それは起こった。

ばさりと、突然飯田の右手が消失した。代わりに腕からは黒い毛が生えていた。

「まずい、吞まれてる!」

優性遺伝子が疾病を誘発することがあるように、ストウレーガの能力はプラス面に作用することはかりではない。最たるものが俺の時伏せだ。使用法をわずかでも誤れば脳内の血管を破って俺は死ぬだろう。力には制御が必要なのだ。

飯田は力を使いすぎた。その副作用がこれだろう。

飯田はなおも俺を攻め続ける。

「飯田、やめろ!」

「私は悪くない!」

もはや飯田には俺の声が聞こえなくなっていた。すでに四肢は全て毛になっている。このまま身体のどこか重要な器官が変容するだけで飯田は命を落とすだろう。

俺は、覚悟を決めた。

「……せめて、人であるうちに」

俺は一度足を止めて、飯田に向かった。

飯田は髪を伸ばしてくる。

俺はそれをかわす。パターンはわかった。所詮は素人の攻撃、俺には通用しない。時伏せも必要ない。

最短距離、俺は飯田に肉薄すると、剣を、飯田の胸に刺した。

飯田の血走った目が俺を凝視する。

「あきば、くん?」

俺も飯田の目を見る。

「なん、で？」

それを最後に飯田は絶命した。

俺は剣を抜いた。飯田の身体は地面に落ちた。

飯田は、上半身を残して全て毛になっていた。

「なんで、か。俺が聞きたいよ！」

俺は、背後の人物に剣を向けた。

## ファーストコンタクト

俺は、背後の人物に剣を向けた。

背後に立っていたのは、男だった。

歳は俺と同じくらいだろう。左手には日本刀を持ち、学ランを着てメガネをかけている。

「なんだ、気付いていたんだ？ それならもつといい席で見ればよかったな」

「無料見はさせないよ。見物料は払ってもらうぜ」

軽い足取り、男は無造作に俺の横を通り過ぎ、飯田の死体を見た。「あーあ、可哀想に。噂以上の非道ぶりだね。仮にも同じ学校の仲間をこつも簡単に惨殺するなんて。七草学園生徒会、さすがは正當な悪魔狩りの継承者つてところかな」

「なんだそれ、酷い誤解だな」

「そうかな？」

男は飯田の髪を掴み、持ち上げた。

「白金、か？」

「うん。神田惣一っていうんだ」

俺の中に緊張が走る。神田惣一、『愚者』の称号を持つ白金最高幹部の一人。あらゆるものを切断する妖刀「真蛇」でこいつ一人に黒金の拠点が壊滅させられたことがある。

「大物だな。『愚者』が直々にスカウトか？」

「残念ながら無駄足になったけどね」

「助けてやればよかったんだよ」

「それは、駄目だよ。試験官が口出ししたら問題だろ？」

「飯田は白金の入団試験を受けていたわけだ」

「そういうこと」

俺は心音を数えた。

「ところで、君は？」

「俺は、秋葉、たく…！」

言い終わる前に神田は動いた。

俺の視界が広がった髪で隠される。

飯田を放り投げたのだ。

そして、俺にフラッシュバックが起こった。

俺が黒金に入る前、先輩のストウレーガにあるアドバイスをもらった。

いわく、黒金を完全に信用するな。切り札は残しておけ。

実際入ってみて気付いたが、少なくとも政府側は俺たちの完全な味方ではなかった。今回のように情報をマニゴルドに横流しするやつもいるしな。

だから、俺たちは能力を本部にも全ては報告しないことにしている。

能力は内容が知られたら対策を立てられるからだ。ストウレーガ側の本部は暗黙のうちにそれを認めている。

そして、俺の切り札がこのフラッシュバックだ。

俺に命の危険があるときに自動的に発動する。

名前は時詠み、内容は数秒先に起こることを知る、未来視だ。

俺は大きく仰け反った。

眼前を微かな光が過ぎ去る。飯田の死体は左右に分断された。

神田は刀を抜き放っていた。居合いだ。

俺の視界が塞がった瞬間に斬り込まれたのだ。

「お見事」

神田は抜き打ちをかわした俺にそう言うと、刀を鞘に収めた。

「おいおい、このまま逃がすとも思っているのか？」

「うん、今回は見逃してよ。埋め合わせはするからさ」

俺に対峙する神田に隙はない。斬り込めない。

しばし無言で睨み合う。

俺は、剣を下ろした。

「……行けよ」

「物分りがよくて助かるよ。巧くん、君とはうまくやって行けそうだね」

「メルアド交換でもするか？」

「っは！いい考えだけど遠慮するよ、今回はね」

神田は俺に背を向けた。

「秋葉巧くん。覚えておくよ。これでも義理堅いほうでね、借りはしっかり返すようにしてるんだ」

「利子は高いぜ」

「あはは、早めに返すことにするよ」

俺は、神田の姿が見えなくなつてから剣を捨てた。

ぐらりとよろける。今日は時詠みを使いすぎた。本来見えないものを見るのだ。脳にかける負担は尋常ではない。

倒れかける俺を支えてくれたのは、新橋だった。

来たことにも気付かなかった。こいつが近くにいたから神田は俺を見逃してくれたのだろう。

「巧さん」

俺はそのまま新橋に寄りかかる。新橋は、しっかりと俺を支えてくれた。

「……駄目だった。飯田を助けられなかったよ」

公園内は、未だに燻っている火で明るい。

俺は、激しい頭痛を振り払い、飯田の死体をもう一度だけ見た。



## エピソード

俺の一日は早朝ランニングで始まる。

峠道を降り、駅前を通って山を半周、ハイキングコースの山道を突っ切って、運動公園までのコースだ。

都心に通うサラリーマンの通勤の間を通り過ぎながら、駅前のキオスクで蛍光電子盤を見た。流れているニュースは芸能人の離婚と政治家の収賄事件だった。

俺は足を止め、携帯で電子新聞を見た。

地方新聞の隅のほうにその記事はあった。

「都内私立高校の女子寮で爆発事故。数人の死者」

それだけだ。飯田もこの事故で死亡したと処理される。

俺はランニングを再開した。

「巧くん、おはよう」

「おはようございます!」

荒い息を吐き、毎朝すれ違うランニング仲間と挨拶を交わしながら山道を駆け抜ける。

いつもより速いペース、終点である運動公園に到着する頃には俺は肩で息をして、その場に座り込んだ。

「おはようございます、巧さん。今日は早いですね。短いコースを走ったんですか? 体調は大丈夫ですか?」

運動公園で待っていた新橋にタオルを差し出される。俺はタオルを受け取った。

これも毎朝のことだ。

「いや、いつも通りのコース。体調は、もう大丈夫だよ。今日は少し速く走ってみた」

俺は息を整えて立ち上がった。

運動公園を見渡す。

所どころに焼け焦げた後が残っている。昨日の、戦闘の後だ。俺はその場でストレッチを始めた。

「気にすることは無いと思いますよ」

「なんのことだ」

新橋の言っているのは昨日のこと、飯田恵の件だ。とぼけてみる  
が、新橋は優しい笑みで俺の視線を受け止めた。

いつもと違うペースで走ったことで気付いたのか、こいつ、たま  
に鋭くなるな。

「……ああ、わかっているよ」

俺は新橋にタオルを返してストレッチを続けた。

「特に仲がよかったってわけでもないしな。同じクラスになってま  
だ1月ちよつとだし……」

さらになにかを言おうとする俺に、新橋は俺の右手の小指を掴ん  
で黙らせた。

「帰りましょう。芳樹さんの朝ご飯、できてますよ」

軽く小指を引かれる。

俺は、そのまま新橋に小指を掴まれたまま、寮に帰った。

## エピソード（後書き）

お付き合いいただきありがとうございます。

ここまですがこの小説の導入部になります。

明日からは『正義』編が始まります。

どうか、懲りずにこのままお付き合いくださいませ。

## とある朝の日常（前書き）

昨晩は失礼をばしました。作者<sup>マシ</sup>急病でした。さらに今回は短くて申し訳ないです。どうかご容赦を。

## とある朝の日常

「今日はいいお天気だね。よし、BBQをしよう!」  
岡地先輩がそんなことを言い出したのは、珍しく朝食に全員が顔を揃えた5月の最終土曜日のことだった。

俺たちは同じ寮で生活しているが案外食事はばらばらだったりする。

渋谷先輩は部活の朝練があるし岡地先輩は遅刻の常習だ。夜は夜で帰りは別々だし、俺なども外で済ますことが少なくない。

最初俺たちは当然のように岡地先輩を無視した。岡地先輩の奇矯は今に始まったことではない。

「ちよっとお、聞いてよお!」

「留美、いきなりなによ。桜はもう散ったでしょう?」

「だって、もうすぐ梅雨になっちゃうでしょ?だからやるんなら今日しかないんだよ!」

岡地先輩は手を上下に振って力説する。

俺は隣にいる恵比寿に聞いた。

「なあ、恵比寿。BBQってなんだ?」

「あんたそんなことも知らないの? バーベキューのことよ」

「???なんで略するんだ?」

「BBQなら3文字で済むでしょ?」

「????それを話し言葉で使う必要があるのか?」

「そんなの知らないわよ!」

「ほらそこ! 喋らない!」

岡地先輩に指差されて俺たちは黙る。

「ねえ、くーちゃん、しようよお。お小遣いももらったことだし」  
「い」

お小遣いとは俺たちが黒金の活動することによって毎月支給される生活費だ。大半は学費や進学費の積み立てに貯金させられるが、

それでもアルバイトをする必要がない程度は手元に残る。

今月のようにマニゴルドと揉めたときや飯田恵の件があったときには危険手当が出るのでけっこうな実入りがあったりする。

「そうね。みんな、今日の予定は？」

「俺はテニス部があるからパスだな」

「うっさいホモ。休め！」

「……岡地先輩、それは言い過ぎでは？」

「他は？」

「まあ、別に予定はないですけど」

「私も」

概ねみんな予定はないようだった。やるといっても昼時の2、3時間だ。渋谷先輩も昼飯を食っただけならということとで全員の参加が決まる。

「よっし！それじゃあ放課後は河辺公園に集合ね！」

こうして岡地先輩のやたら高いテンションに引きずられる形で、俺たちのBBQは決定した。

## BBQ始まる(前書き)

投稿遅れて申し訳ありません！ 単純な、作者の予約投稿ミスです。  
・・・寝る前に確認してよかった。

## BBQ始まる

「今世紀初頭、アメリカ発の経済危機、今にまで続くエネルギー問題や自然破壊に経済格差問題。そういつた山積みの問題を抱えて行き詰まりを見せはじめたときに、この疫病、ゴールドのパンデミックは起こったわけだけど……」

七草学園の土曜日は午前中で終わりになる。

うちのクラスの最後は御茶ノ水先生の世界史なので、まじめに授業を聞いている俺としては浮き足立ったような周りの空気は正直うざい。

「ここで一種のパラダイムシフトが起こるわけだな。ゴールドの前では資本主義社会における正義、お金は無力だったわけで、そこで宗教への回帰運動が起こるんだ。化学でもお金でも自らを守ることができない。形而上の救いは同じく形而上の神によってもたらされると当時の人々は考えたわけだ。それが宗教の持つ穢れとしての悪魔狩りに繋がって来るんだけど……と、そろそろ時間だ」

御茶ノ水先生がそう言うと同時に授業終了のチャイムが鳴る。

恵比寿の号令で授業は終わり、御茶ノ水先生は教室から出て行った。

「秋葉、どうする？　すぐに河辺公園に行く？」

「いや、俺は正志とちよつと寄っていくところがあるから先に行ってるよ」

俺は恵比寿と別れて正志と一緒に学校を出た。

「そういえば来週は3連休だな。正志はどうするんだ？」

「俺は実家に帰るよ」

正志はストウレーガにしては珍しく良好な家族関係を維持している。

黒金に所属するストウレーガは全世界で約10000人だ。

その内、日本では98人ほどだが、ここ、憶良市には14人がいる。

内訳は高校に俺たち7人に中等部と初等部に合わせて3人。大学に3人と社会人に1人だ。

1地域に14人も集まって、しかも飯田恵がこの地域から出たことを不審に思うかもしれない。

だが、タネを明かせば不思議でもなんでもなく、憶良市に若いストウレーガとその可能性がある人間を集めている。よく言えば守られている、悪く言うなら隔離しているのだ。

狙撃などをする際には、狙撃するポイントと、タイミングがいる。ここ、憶良市では絶好のポイントは全てチェックされており、マニゴールドがそこを使うことはできないようになっていて。そういう意味では守られているが、マニゴールドの襲撃時に一般人の被害を最低限に抑えるためや、ストウレーガを一所に集めて、管理しやすくしているという意味では隔離されているってこと。

少なくとも隔離の必要があると政府に決められているストウレーガは、言うまでもなくマイノリティであり、異端だ。

家族内からも異端者を出したとして排斥される場合は、実はけっこう多いのだ。そんな中で正志の良好な家族関係は稀有だった。

「俺はどうするかなあ。寝て過ごすのも芸がないよな」

「おまえも実家に帰ったらどうだ？」

「冗談！ 俺にはそれは罰ゲームだよ」

俺たちはコンビニで飲み物を買って河辺公園に向かう。

「そつだなあ。また神社巡りでもするかなあ」

「爺臭い趣味だな」

「うるせえよ。この広い地球の上に巫女さんが嫌いな奴がひとりでもいるか？」

「俺はどうでもいい」

そんなことを話していると河辺公園に着いた。

駐車場には見慣れたバンが止まっている。運転席からは芳樹さんが降りてきた。格好は当然メイド服だ。

「ああ、巧、正志。いいところに来た。悪いが荷物運びを手伝ってくれ」

「これは、また大量に用意しましたね」

俺たちは両手にクーラーボックスを2つずつ持って川辺に向かった。川辺にはすでに全員が揃っていて、用意もできていた。

「遅いよ。待っていたんだからね」

「すみません。遅れたみたいです」

俺はクーラーボックスを置いた。

「よし、それじゃあ私は帰る。終わったら荷物の回収に来るから連絡をくれ」

「あれ、芳樹さん、帰っちゃうんですか？」

「ああ。これでも仕事でね」

「そんなあ。芳樹も一緒にやろうよ」

岡地先輩が芳樹さんの右手にぶら下がる。芳樹さんの右肩が下がった。岡地先輩は見た目以上に重い。まあ、あんなだけ食うからなあ。

「いや、しかし、私がいたら邪魔だろう？」

「そんなことないよ」

「芳樹さん。俺も飯食べたらず活に行くから。昼飯食う時間くらいは取れるだろ？」

渋谷先輩にそう言われ、芳樹さんは困った顔をして馬場先輩を見た。

全員の視線が馬場先輩に向く。

馬場先輩は軽くため息を吐いた。

「……芳樹、一緒に食べていきなさい」

芳樹さんの顔がにんまりした笑顔に変わった。案外わかりやすい人だ。

「そうか、それじゃあ邪魔をしようかな。あ、しまった。それなら酒がないじゃないか」

「芳樹、私たちは未成年の学生よ。お酒を飲めるわけないでしょう！」

「いやいや。私が学生るときは隠れてやったもんだぞ。それにこういう席で酒がないのはいかにも寂しいじゃないか」

この人、俺たちの前ではよく年上ぶるが、確かまだ20代前半だ。「あはは。芳樹さん。さすがに生徒会が昼間から川辺でお酒を飲んで騒いでいたら問題になりますよ。ね、先輩」

同意を求めて新橋は俺を見る。

「あ、ああ。そうだな」

俺は新橋から目を逸らした。俺と正志は買ってきた泡の出るジュースをそつとカバンの奥にしまった。

## 戦い終わって、ショートケーキ

俺はひとり川辺に座り膝を抱えていた。

なんか、色々あった。

まず、ことの起こりは岡地先輩が俺の前の肉を取ったことだ。

岡地先輩は勝ち誇った顔で俺を見下した。ここに岡地先輩と俺の早食い戦争はオープンコンバットする。

だが、互角に戦えたのは最初だけで、岡地先輩がほとんど生のままで肉を食べ始めると俺はついていけなくなり、早々に完全敗北を認めさせられた。

そして、悲劇はここから始まる。

満足そうに腹を撫でる岡地先輩。俺も岡地先輩に張り合って大量に詰め込んだので腹いっぱいだ。

それを見越したように鉄板に並ぶ高級食材。

バーベキューらしい串焼きをはじめ、さっきまではなかった牛タン、上カルビ、上ロースなどの焼肉メニュー。銀紙に包んだハーブ鶏、ステーキ肉、貝や海老などの魚介類まである。

「馬鹿ね。留美先輩と張り合うなんて」

とは恵比寿談。

「留美は味なんてわからないんだから安いお肉でいいのよ」

とは馬場先輩談。

新橋だけは俺に同情の目を向けていたが、その奥にはなにやっっているんだかというさげすみの色が浮かんでいた。いや、被害妄想かもしれないが。

こうして俺はかつての同僚が楽しそうにバーベキューをする声を

後ろに聞きながらひとり黄昏ていた。

泡の出るジュースのプルタブを開ける。ぷしゅという小気味のいい音を立てアルコールの匂いが漂う。

一口飲む。苦い。だが、今の俺にはこれがいい。

「またそんなものを飲んで……」

後ろからの声は新橋だった。紙皿に乗ったショートケーキを持っている。

「巧さん、デザートは食べていないと思って」

「ああ、サンキュー」

俺は新橋から紙皿を受け取りショートケーキを食べる。甘い。だがうまい。

俺は3口でケーキを食べきった。

新橋は俺を微笑んで見ていた。

「楽しいですね」

「なんだよ、急に」

「なんとなく、そう思ったんです」

そう言っつて新橋は俺に後ろから抱き付いてきた。細い黒髪が頬を撫で、甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「その、新橋。なんか気を使わせちゃったかな」

飯田恵の件以来、俺は落ち込んでいた。それを表に出して変な気を使わせるのも嫌だったのだが、どうやらばれていたらしい。このバーベキューも、深読みすれば岡地先輩なりに俺に気を使ってくれたってことでもあつたんだろう。もっともあの人は自分が楽しくないことは絶対にしないが。

「私は、なにもしていませんよ」

「ああ、俺は仲間に恵まれているなあ」

「つい、と新橋が離れる。」

離れると同時に、抜群のタイミングで恵比寿と正志が来た。

「秋葉、あんた、ケーキ食べていなかったでしょう。持ってきてあげたわよ」

「ああ、サンキュー」

俺は恵比寿からケーキを受け取り、食べた。新橋が変な顔をしたが無視した。

「そういえば洋子先輩。来週の3連休はどうする予定ですか？」

「別に決めてないわねえ」

「予定なしか。寂しいな」

「うるさいわね！あんたはどうするのよ」

「俺か？俺は神社巡りだ」

「巧、それはそれで寂しいぞ」

正志が憐憫の目を向けてきた。

「そういえば来週は6月の最初の日曜になるわね。私の実家も月次祭つきなみやるわね」

「なに！おまえの実家って社家だったのか？」

「月次祭？社家？」

俺は正志に説明する。

「月次祭ってのは神社で毎月行われる行事で、社家は実家が神社の家のこと。つまり！

恵比寿は巫女さんだったのだ！……ええ？」

「なんでがっかりしてるのよ！」

「なんだ、盛り上がっているな」

「あ、芳樹さん」

芳樹さんの手にはケーキの紙皿があった。

「巧にデザートを持ってきてやったぞって、なんだ、酒があるじゃないか！」

芳樹さんは俺に紙皿を押し付けると俺の横に置いてある泡ジュースを取り上げた。そして、一気に半分ほどを飲み干す。

「ふー、うまいな。あはははは」

この人、酒好きだがすごく弱い。

「そういえばあんた車だろ？なんで飲んでるんですか！」

「だ〜いじょうぶ！自動運転にすれば問題ない！」

あ、駄目だ。この人もう酔ってる。俺は芳樹さんに絡まれながら3つめのケーキを食べた。新橋はなぜか不愉快そうに丸石を拾った。「たつくみく〜ん！ あ、芳樹が面白いことになってる！」

「……芳樹にお酒を飲ませたのは誰？」

岡地先輩と馬場先輩が別方向から来る。手にはケーキだ。

「巧くん、ケーキ食べるよね。つと、くーちゃんもか」

「2つは多いかしら？」

「いや、頂きますよ。せつかくですしね」

俺は4つめと5つめのケーキを受け取り、食べた。新橋と恵比寿が変な顔をしたが無視した。

余談だが、夜、ひとりで唸っているところに新橋は胃薬を持ってきてくれた。

「渋谷先輩は？」

「もう部活に行ったわ。せわしないわね」

「じゃあみんなここに来ちゃいましたね」

「ところでなにはなしていたの〜？」

「来週の3連休に恵比寿の実家に遊びに行こうって話になってました」

「はあ？いつそんな話になったのよ！」

「確か東海のある県だったよな。ってえと泊まりだな」

以前なにかの拍子に聞いたことがあるのを、俺の実家がある隣の県だったので覚えていたのだ。

「ちよつと！ 私は承知してないわよ！そもそもなにしに来るのよ！」

「俺もそろそろおまえのご両親にちゃんと挨拶しておいたほうがいいだろ？」

「え！ ま、待ってよ！ そんなこと、いきなり言われても、その、困るわよ……」

恵比寿、なにかもじもじと下を向いている。

「待て！ おまえらいつからそんな関係になっていたんだ！ 俺は

認めんぞ！」

と、これは正志。おまえに認めてもらうことでもないと思うんだが。

「いや、悪い。冗談だ。そんなに食いつくとは思わなかった」

「ああ、冗談ですか」

そう言った新橋の手から砂がこぼれた。それは、丸石だったのか？

「それで、先輩たちはどうします？」

「私はもう予定入れているわね。今回は遠慮するわ」

「うーん、私も用事あるよ。残念だね」

「新橋は？」

「ええ。ご一緒にしますよ。もちろん」

「なんで話進めてるのよ！」

「正志はどうする？」

「俺は、実家に帰るって決めてるからなあ。今回はパスだ」

「そうか。残念だったな」

「な、なにがだ！」

こいつもわかりやすい奴だな。

「それじゃあ俺と新橋の2人だな。ん？恵比寿も来るか？」

「……露骨に喧嘩売ってるわよね」

こうして、俺たちは来週の予定を（強引に）決めたのだった。

きわめてどうでもいいことながら、この後、寝てしまった芳樹さんを抱えて寮に戻るのものはものすごく大変だった。

俺はもうこの人に酒を飲ますまいと誓った。

## テニス部主将渋谷明彦

ボールを叩くラケットの音。俺は硬いコートを蹴ってボールに食らいついた。

「お、よく追いついたな」

渋谷先輩は必死で返したボールを容赦なく俺に突き返した。ボールは俺の横を過ぎ去って背後のフェンスにぶち当たる。

俺は肩で息をして膝に手を着いた。

「なんだ？ もうばてたのか？」

俺は大きく息を吸い込んで身体を起こした。

「なんの、まだまだです」

昼休み、俺は渋谷先輩の呼び出しを受けた。

テニス部の練習に参加するように、とのことだ。月に1、2回はあることだ。

俺は基本的にどの部活にも所属せずに独練で鍛えている。だが、それだと練習方法もパターン化してしまうので、たまに違うことをするのは俺のためにもなり、ありがたいことだった。

テニスの実力は正直、部の1年にも勝てない程度だが、渋谷先輩いわく「この学校で俺の球に反応できるのは男ではおまえだけだ」ということになるらしい。

俺はしばらく翻弄された後、コートの脇に腰かけた。渋谷先輩に水筒を渡される。中にはスポーツ飲料が入っていた。

「疲れたか？」

「ええ。体力には自身があるつもりなんです」

「体力はなれないことには余計に消費するからな。気にすることはないぞ」

渋谷先輩は俺の横に腰かけた。近いので少しだけ離れる。

「この間、『愚者』とやり合ったんだろう？どうだった？」

「……ここでする話題じゃないと思いますけど」

「かまわん。誰も聞いていないし、聞いてもわからんだろうからな」  
俺は周りを見た。コートは今、別のテニス部員が使っている。

昼休みまで練習に使っているだけあって七草学園はテニスでは強豪校で通っている。

他の部員は渋谷先輩とは離れたところでそれぞれ練習していた。

渋谷先輩と他の部員に、俺以上に距離を感じた。

この人は自分が同性愛者だつてことを隠していない。当然風当たりは厳しいがそんなものは無視して我が道を行っている。

自分にはなにが必要で、なにをすればいいのかがわかっている強い人だ。

「やり合ったと言っても軽く話した程度ですよ。あいつは能力を使いもしなかったし」

「『愚者』、神田惣一か。戦って勝てるか？」

「難しいですね。負ける気もないけど」

居合いで斬りつけられたことを思い出す。時詠みがなければ確実に殺されていたな。

渋谷先輩は俺に美笑を向けた。

「いい気分転換になつたら？」

……飯田恵の件だ。

この人は俺たちの誰かが困っていたら自然に手を差し伸べてくれるいい人だ。

ちなみに馬場先輩は俺たちを助けるのは義務と思っているところがある。岡地先輩に至っては「私のものは私のもの。君のものも私のもの。私のものを守るのは当然でしょ？」ってことになるらしい。「おまえが調子悪いと寮全体の雰囲気が悪くなる。落ち込むなどは

言わないがうまく切り替えるよ」

「ええ、わかつてはいるんですが」

「知り合いを手にかけてんだから落ち込むのは当然だが、自分を責める必要はない。黒金をやっていれば嫌でもこういうことはあるんだからな」

「それは割り切ってはいるんですけどね」

「そうか。ああ、それならいい」

渋谷先輩は俺の太ももに手を置いてきた。俺はその手を払い、立ち上がった。

「昼休みが終わるまでまだ時間があります。もう少し付き合ってください」

俺は空いたコートに入った。

## 御茶ノ水先生の授業

「正義の不在というのは現代哲学における主題のひとつだけど、ここで、前世紀に覇権国家だったアメリカ合衆国の初等教育というものを話してみるね」

火曜の6限は御茶ノ水先生の地理だ。多民族国家の項でなぜか話は飛んだ。いつものことだ。

「アメリカ合衆国がなぜ多民族国家であるかというと前世紀まで積極的に移民を受け入れていたんだ。研究者の中にはそれがアメリカの国力を支える原動力であったとする人もいるくらいだね。インド系、スパニッシュ系、中国系。言語も文化もばらばらな移民たちの多くは英語すら話せない。その子供たちも当然英語を話せない。そこでアメリカの初等教育は英語を教えると共にもうひとつ重要な命題を課せられたんだ。それはアメリカ人をつくることだった」

ちらと横を見る。恵比寿は真面目に授業を受けていた。恵比寿が俺の視線に気付き、俺は慌てて反対を向いた。反対の男子は隣の男子と一緒に雑誌のグラビアを見ていた。

「桃花ちゃん、可愛いよなあ」

「ああ。本物のお嬢様らしいぜ。すげえよな。お嬢様でモデルだぜ。住む世界が違うよなあ」

グラビアは、俺の知っている女、東桃花のものだった。昔から実家の関連会社のCMに出ていたが、それからブレイクしたらしい。今では全国放送のバラエティ番組にも出ているらしい。

らしいというのはまったく興味がないからだ。たまに正志なんか言っているの知っているに過ぎない。

俺は前を向き授業に戻った。

「本来、独自の生活習慣や倫理、つまりは文化の土壌によって民族

というものは形成されるんだけど、多種多様な異文化を内包するアメリカで、しかもつい今アメリカ国民になったような移民たちの子供は特にそのような土壌を持ち得なかつたんだな。そこでアメリカの初等教育ではアメリカ人とはなにか、アメリカの正義とはなにかを教えたんだ。民族ごとに存在する正義をまとめる必要があつただね」

ざわざわと窓辺のやつらがなにやら騒ぎ出す。なんだ？　うるせえな。

「お、おい。あそこにいるの、桃花ちゃんじゃないか？」

「マジで！　なんで桃花ちゃんがいるんだよ！」

「なんかこつち来るぞ！」

騒ぎは次第に大きくなり、バカ共が窓辺に集まりだす。

「な、なに？　どうしたの？」

「さあな」

騒ぎに乗り遅れた恵比寿が俺に聞いてくるが俺はそつげなく答えた。そして、3階の俺の耳にもよく聞こえる声が響いた。

「たくみー！　隠れてないでできなさいー！」

ぴくりと、俺の眉が動く。やってくれるじゃねえか。

「巧？　うちのクラスの秋葉巧か？　どういう関係だよ」

「また秋葉かよ！　くそ！」

「生徒会で馬場先輩たちと仲良くしてるくせに！」

「秋葉、死ね！」

……俺、なんでこんなに恨み買ってるんだ？

「あゝ、秋葉くん。なにやらご指名のようだよ」

「先生、授業中です。講義を続けてください」

「なに真面目ぶってるのよ」

なぜか不機嫌そうに恵比寿は俺を横から小突いてくる。

「秋葉くん。幸いもう時間も残り少ないから。それにこつなると授業にならないよ」

控えめながらも出て行けコールだ。

俺は仕方なく教室中の痛い視線に耐えながら校舎を出た。

## 東桃花登場

校門前にはすでに人だかりが出来ている。その中心は3人の男女だった。

ひとりは背の高い、豪華な茶髪の女。ひとりは背の低い、ショートカットの少女。もうひとりは、俺の知らないごつい黒服の男。

黒服の男は群がる馬鹿男子学生たちを抑えている。

その黒服の男の脇をすり抜け、色の白い男（その時は気付かなかったが正志だった）が茶髪女に走りこんだ。

その進行方向に背の低い少女が立つ。

ずっと、少女は身を屈め、体重を乗せた肘を正志のみぞおちに叩き込んだ。

息が止まった正志に少女は、垂直に飛び上がって正志の顎につま先を滑らせる。ギャラリーにはスカートが捲くりあがってスパッツが丸見えだ。

うん、流れるようないい動きだ。

正志の意識はそのままどこか遠い星にまで飛んでいった。

その一部始終を見ていた周りの馬鹿どもは一瞬で黙った。

俺はその群れを掻き分けてわざと3人にゆっくりと近づいた。

今まで黙っていた茶髪女は俺に気付くと背の小さい少女の前に出た。

「久しぶりね、巧。4年振りかしら？」

非の打ち所のない作り笑いを見せてそう言う茶髪女を俺は無視して、隣にいる少女に声をかける。

「よ、すみね。久しぶり。元気にしてたか？」

「巧さま、露骨に桃花さまを無視するのは止めてください。後で私がお小言をもらいます」

この少女は上野すみれ（うえのすみれ）。茶髪女の乳母姉妹で確か俺のひとつ下だから高校1年、新橋と同学年だ。この娘の親父は俺の実家の執事で俺の武道のお師匠さんでもある。

……仕方ない。俺は初めて茶髪女、東桃花に向き合った。

作り笑いにひびは入っていない。面の皮は厚くなってるな。

「おまえでも理解できるようにわかりやすく言ってる。迷惑してるんだよ。俺にはかまうな」

「随分な言い草ね。久しぶりに再会した許婚に対して」

「婚約は解消されてるぞ。おまえにも、東家にとっても俺はまったくの他人だろ？」

「寂しいことを言うのね。私とあなたの仲じゃない」

よく言うよ。しかし、背中の視線が痛い。このプライドだけはやたら高い女は用件を済ませないと帰らないだろう。

俺は少しだけ譲歩した。

「それで、なんの用だ？」

「あら、あなたに会いに来たでは駄目？」

「早く言えよ。これでも我慢してるんだから」

桃花はわざとらしく肩を竦めると本題に入った。

「おば様に頼まれたのよ。あなたとおじ様の仲を取り持ってくれて」

「勘違いしているな。俺が縁を切ったのは親父じゃなくて秋葉家そのものだ。ついでに言う俺は一方的に縁を切られたんだしな」

「だから、私が仲介しているんでしょ」

「おまえにも縁を切られたはずだけど？」

「細かいことに拘るのね。とにかく、一度実家に戻っておじ様と話してみたらどう？」

「それはいい話じゃない？」

突然、本当に突然そう言い出したのは恵比寿だった。いつ来たのか俺の後ろにいる。

恵比寿は主導権を握るように俺の横に立った。

「東桃花さんね。あなたが秋葉と知り合いだったなんて驚きだわ」

「恵比寿洋子さんですね。お話は聞いていますよ」

「どんな話を聞いているのか興味があるわね」

恵比寿はきつい目で俺を見た。いや、俺じゃないぞ。どうせ桃花が探偵でも雇って俺の周りを嗅ぎまわったのだろう。

「そうね。今度の連休なんていいんじゃないかしら？私が責任持って秋葉を連れて行ってあげる」

「おい、恵比寿！どういうつもりだ！」

恵比寿はついと俺に顔を寄せると小声で言った。

「私だけ実家に帰るなんて不公平でしょう？あなたも道連れにしてやるから」

「……地獄にはひとりで落ちてくれないかなあ」

「あんただけが地獄に落ちるなら温かく見捨ててあげるわよ」

桃花は俺と恵比寿が顔を寄せ合って話しているのを作り笑いのまま見ていた。眉が1ミリほど吊り上っているのに気付いたのは俺とすみれだけだろう。

「東さん、秋葉も承知してくれたわ」

「桃花でいいですよ、洋子さん」

「ええ、桃花。それじゃあ来週の、そうね、日曜日に秋葉と伺うわ  
俺は断じて承知していない。」

しかし、なんだ？なんでこんなに恵比寿と桃花の間で緊張感が高まっているんだ？

「それでは日曜日に。お待ちしていますね」

やっと帰ってくれる、そう思ったときだった。今まで背景と化していた黒服が俺の前に出た。

「取り消せ」

「桃花、こいつはなにを言っているんだ？」

「お嬢様に対する無礼な発言を取り消せ！」

ああ、なるほど、そういうこと。忠犬きどりか。

しかし、俺は桃花に無礼じゃない発言をしただろうか？と、すると発言全てを取り消すことになるな。そうすると来週実家に行かなくてもいいかなあ、なんてことを考えていると黒服は俺の襟を掴んだ。

「やめなさい、四谷！」

「いいえ、やりなさい、四谷」

制止するすみれに煽る桃花。

黒服、四谷は桃花の言に従い俺を締め上げた。

俺は、四谷の肘を押した。四谷は腕を通して肩を押される。押された肩を戻すために反射的に身体が前に傾く。俺はその反動を利用して四谷を回した。

四谷は受身も取れずに背中から地に落ちた。

俺は乱されたブレザーを調べた。

「こんなのを護衛にしているのか？役に立たないだろ」

「護衛にはすみれがいるもの。でも、すみれじゃあ防犯にはならないでしょ？」

まあ、すみれは見た目、目立たないひ弱な女の子って感じだからなあ。こいつを見て返り討ちに遭うとは、普通は思わないだろう。

桃花は最後に満足そうな作り笑いを俺に見せて背を向けた。すみれは俺に軽く一礼すると、桃花の後についていった。四谷は置いてけぼりだ。

「……恵比寿。恨むからな」

「因果応報でしょ。ざまあないわね」

こうして俺の週末の予定は（強引に）決められた。きわめてどうでもいいことながら、後で俺を質問攻めにする馬鹿ども（正志含む）は正直うざかった。

## 歴史準備室にて

放課後、俺は歴史準備室に向かった。

ノックをして部屋に入る。

「失礼します」

「ああ、秋葉くんか、どうしたのかな？」

歴史準備室には、目的の御茶ノ水先生と、もうひとり、意外な人がいた。馬場先輩だ。

「えっと、今日、授業ぶち壊したんで、謝っておこうと思って。どうもすみませんでした」

「いやあ、内容自体も脱線していたからね。気にすることはないよ」「礼儀正しいのはいいことだわ」

そう言っつて湯呑み（どうやら自前らしい）からお茶をすする馬場先輩。

用件の済んだ俺は早々に準備室を後にしようとしたが、御茶ノ水先生に止められた。

「せっかく来たんだから一杯くらい付き合っつていきなさい」「そう言っつてお茶を出される。どうやらプーアル茶のようだ。

断るのも悪いし、この後予定があるわけでもない。俺はイスに座った。

「しかし、なんで馬場先輩がいるんです？」

「息抜きよ。授業が終わっつてすぐに生徒会室に行きたくはないもの」

馬場先輩は生徒会の仕事、それは黒金本部に送る報告書類も含まれているのだが、そのほとんどをひとりでこなしている。たまに恵比寿や新橋が手伝っているらしいが、部活に忙しい渋谷先輩や本能以動で動いているような岡地先輩がそんな面倒なことをやるはずもない。まあ、言われるまでは手伝わない正志や俺も人のことを言える立場ではないんだが。

来年馬場先輩が卒業したら、生徒会長は仕切り魔の恵比寿になるだろうが、そうするとき使われるだろうなあ。

俺は歴史準備室を眺めた。

雑多な部屋だ。

本棚に入りきらない本が床に平積みになれている。

そこだけ区切ったかのように片付いている机の上には分厚い紙の束が置かれている。

俺は表題を読んだ。

「環境汚染レポート」。

「それ、国連の報告書ですか？」

「ああ、うん。ネットで転がっていたのを拾ってきてね。一応地理の一分野だから」

「底の浅いダーウィニストに言わせると、どんなに環境破壊が進んでも生き残る種は生き残り、進化する。むしろ種にとっての危機的状況は優性遺伝子を選別するために有効だったことになるらしいわ」「適者生存の法則ですか？」

「そういえば、秋葉くんは知っているかな。今世紀の初めに文化人類学の学会である報告がされたんだ。それは、アフリカの国立公園にいる猿が槍を使って狩りをするというものなんだけど」

「いえ、初耳ですね。すごいじゃないですか」

「その発表者は、猿の集団一個一個にも文化はある、と発表したんだ。狩りの仕方にも相違性があるってね。だけど、それは猛反発にあった。文化人類学とは地域軸の文化の相違性を見る学問なんだ。それを時間軸にしたのが歴史なんだけど……と、逸れたね。ともかく、猿に文化を認めてしまうと、人間という種の優位性を維持できないと当時の人は考えたのかもしれないね。本来文化人類学はそういう考えとはもつとも無縁な学問のはずなんだけど」

悪魔狩りの頃から人間扱いされなかったストウレーガとしては身に詰まる話だ。

「文化人類学、ですか？」

「うん。地理は大学では地質学や文化人類学に分化されるんだ。つまり、私の専門分野ってことだね」

「巧くん。あなたは差別の構造を知っているかしら？」

馬場先輩はいきなり話を変える。

「……いえ」

「まず差別をする多数派の差別者、差別をされる少数派の被差別者。そして差別を斡旋するプロモーター。このプロモーターは多くの場合少数派の権力者」

「少数派の被差別者、ですか？」

「権力者は自身への不満を逸らすために多数派の目を少数派の被差別者に向けさせるの。悪いのは私たちではなく、あの少数派だってね。つまり、差別は社会構造としては必然ってことよ」

「それ、本気で言っているんですか？」

俺は馬場先輩を睨む。馬場先輩は俺の眼光を微笑で受け流した。

「そういう見方もあるってことよ。マクロ的にはね。安心して。もちろん差別を肯定する気はないから」

馬場先輩はお茶を口に運んだ。

ちよつと気負ったか、俺は肩の力を抜いた。

「なにかをまとめるのに一番手早い方法は敵を作ることね。被差別者は権力者が集団をまとめるために、敵として選定されたとも言えるわ」

馬場先輩は隠喩にストウレーガと12番戦争のことを仄めかしている。

「敵である社会悪になら差別してもいいってわけ、ですか？」

「正義のために、ね」

「正義ですか？そっぴいえば今日の授業で触れてましたね」

「うん。今世紀初頭のアメリカの正義は金融資本主義、もつと平たく言つたら金満主義だね。小学校の授業の中で株の時間があるところもあつたらしいよ」

「小学校で？」

「うん。結果は知ってるの通り実態のない投資によって膨張し、そして弾けたわけだけど、それにゴルドのパンデミックが起こり、宗教回帰が起こったわけだ。それで、正義は国家が定めるものではなく、各宗教が定めるものに変わってくるんだけど、当時からある世界宗教にパンデミック後にできた新興宗教、氾濫する各宗教それぞれに正義が存在してしまっただんな。それが正義の不在と言われる現在に繋がるんだ」

「よくわかりませんね。それって、結局どういことなんです？」  
それに答えたのは、御茶ノ水先生ではなく馬場先輩だった。

「現在が、テーマ性のない、混沌の時代ということよ。当時の人が猿に感じたように不確かな優位性に依存し、差別を肯定する、嫌な時代」

俺はプーアル茶を一口飲んだ。よくわからない味がした。

下校くーちゃんど

その後、俺は馬場先輩の生徒会の仕事を手伝った。

普段なら気付かなかったふりもできるが、これから生徒会室に行く、と目の前で言われたら手伝わざるを得ないだろう。

断ってくれたらいいなあと、淡い期待を込めて提案した俺の協力を馬場先輩は「別に、好意を断るほど狭量じゃあないつもりよ」と、婉曲なことを言って受け入れた。

別に言わなくていいことを言うこのちびっ子生徒会長は、わずかに頬を緩めていた。

憶良市の夜は早い。山が夕日を隠すからだ。

俺と馬場先輩は一緒に下校した。校門を出るとき、周りからなにか痛い視線を感じたが気のせいだろう、うん。そういうことにしておくのが無難だ。

「久しぶりね、2人で下校するのは」

「ええ、そういえばそうですね」

俺と馬場先輩は口数少なく、肩を並べて歩いた。

恵比寿や岡地先輩といる時のように騒ぎまくるのもいいが、馬場先輩といるような、落ち着いた、けど、どこか和む空気も嫌いじゃない。

「巧くんはどう思う?」

馬場先輩は急に聞いてきた。

「なにがです?」

「白金の行動よ。『愚者』が出てきたことからわかるように、私には最近活発化しているように思えるのよ」

人気のない峠道に差し掛かったためだろう。馬場先輩は白金のことを聞いてきた。

「そういえば、ストウレーガの数が増えてるんですね」

「ええ。12番戦争停戦時、白金を脱退して黒金に入ったストウレーガの数は5000人に満たなかったわ。今では10000人を超えているもの。もっとも、停戦したことによってストウレーガの死亡率が下がったことも理由だと思うけど」

「白金って今どれ位いるんですかね？」

「正確な数はわからないけど、黒金より多いということはないと思う。本部では2〜3000人と推測しているわ」

俺は、少し考えてから聞いた。

「歴史準備室での話、あれ、白金のことですか？」

「あれって？」

「不確かな優位性ってやつ。白金が、もう少し広げるなら俺たち黒金を含めたストウレーガがその気になったら、人の優位性は維持できないうつてこと」

人類の総人口は100億にわずかに達しないほどだ。それが10000人程度のストウレーガに脅かされるなんてことがあるんだろうか。

「ストウレーガも人よ。それは自覚しないと駄目よ。そうしないと白金のように安い選民思想に毒される」

「覚えておきます」

風が山を揺らした。葉擦れの音が峠道を包む。

「ストウレーガは差別されていると思う？」

馬場先輩は話を変える。話が飛ぶのは女の会話の特徴だが馬場先輩も例外ではないようだ。

「そうですね。黒金に入るまでは、けっこう酷かったですね。でもそれはストウレーガとしてではなかったからなあ」

俺が家を出てから七草学園の中等部に編入するまで、まあ、それなりの経験はした。いろんな都市を放浪したことや、ストリートチルドレンの仲間と生活したこともあるが、その時は買い物もできないような状態だった。

俺は少し考えて答えた。

「俺たちは学校や住居を選ぶ自由はないけど、それは別に不便に感じてないし……。表向きはそれほどでもない。そもそもストウレーガの存在自体が隠されているから当然なんですけど。でも、マニゴルドの連中が言うように、俺たちはマイノリティですし、差別される要素は持っていると思いますよ」

「人類の敵として？」

「ええ。さっきの話で言うなら集団をまとめるためのわかりやすい敵ってことになりますから」

「ゴールドのパンデミックが起こったとき、各国は無為無策だった。その怒りの矛先を逸らすために悪魔狩りを推奨したという経緯があるのだけど、ストウレーガが差別されるためにあるとしたら私は差別されるために生まれてきたことになるわね」

馬場先輩は美少女らしからぬ顔の歪め方をした。

馬場先輩は『アーペレジーナ』の称号を持つストウレーガだが、俺たちとは少しだけ違う。フェイカーと呼ばれる、人工的に作られたストウレーガなのだ。

「本部での差別はひどいわよ。ストウレーガが実社会で生活できるのは自分たちのおかげだって、露骨に態度に出すんだから」

「芳樹さんからはそんな感じはしませんよ」

「芳樹は私たちにシンパシーを感じているのかもしれないわね。芳樹の祖母はストウレーガだったから」

「へえ、そうなんですか？」

そこで話が途切れた。

馬場先輩はなにかを言おうとして、黙った。それで俺は気付いた。この人にも気を使わせたらしい。無理に話題を作っていたのだ。

運動公園に差し掛かる。俺が飯田恵を殺した場所だ。

「……私の人選ミスだったわね。巧くんは飯田さんとは顔見知りだったんだから。つらいことをさせたわね」

「いえ。仕事と割り切るつもりもないけど、飯田を殺したのは自分

の意思ですから」

飯田は放っておいても死んだだろう。あえて胸に剣を突き刺したのは俺の意思だ。そして、その役目が恵比寿や正志ではなく俺だったことは、きつとよかったことなのだ。

俺は夜の空気を吸い込んだ。

「大丈夫ですよ。いつまでも落ち込んでるってタイプでもないから。週末に恵比寿の実家に行って気分転換してきます」

「そう……」

馬場先輩はまだなにか言おうとしたが、黙った。そして、歩く速度を落とした。俺も、馬場先輩に歩調を合わせる。

俺たちは、ゆっくり峠道を登って、フォートフィフスに帰った。

出発！

そして土曜の午前中、俺と恵比寿は寮のエントランスに集まった。俺と恵比寿の表情は似たようなもので、これから旅行に出かけるとは思えないほど沈んでいる。

「みことー！早くしなさいよ！」

「もうちよつと待ってください！」

女子寮のほうから新橋の声が聞こえる。

「新橋はなにをやっているんだ？」

「知らないわよ」

不機嫌そうにそう言う恵比寿。苛立ちが募っているのがわかる。

新橋は、それからさらに5分ほどしてエントランスに来た。

手には抱えるほどの荷物を持っている。重力を軽くしているため重くはないのだろうが、量が多いため、かさばって歩き辛そうだ。

「なによそれ！ たった2泊でなんでそんなに荷物が居るのよ」

「でも、先輩方のお家に行くのに手ぶらというわけにはいかないでしょう？」

新橋の荷物をひとつ取る。中には憶良市の老舗和菓子屋、おかずやの梅饅頭が入っていた。

「なんだ、まだ行っていなかったのか？新幹線の時間は大丈夫なのか？」

ふらりと芳樹さんが前を通る。

「今から出るところですよ。芳樹さん、これ、後でみんなで食べてください」

俺は新橋から荷物のお半を奪い（結構重い）、芳樹さんに渡した。「ああ、悪いな。ありがたく頂くよ」

芳樹さんは大量の荷物をよろけるでもなく受け取る。

新橋は少し不満顔をした。

大量の荷物がなくなっただにもかかわらず、新橋の手元にはスーツ

ケースが残っている。ちなみに恵比寿の荷物はポストンバックひとつで、俺の荷物は小さいバックパックだけだ。

「ほら、行くぞ」

俺は恵比寿のポストンバックと新橋のスーツケースを奪うと先に歩き出した。

恵比寿はいかにも重苦しい歩き方で、新橋は尻尾があつたら振りそうな軽い足取りで俺の後についてきた。

俺たちの寮であるフォートファイブスから最寄りの憶良駅まで歩きで30分、そこから新幹線の通っている大きな駅まではだいたい30分。そこで少し時間を潰し、新幹線に乗って東海道にある県までは1時間ほどの旅程だ。

新幹線の中、俺の横に座る新橋はなぜか終始テンションが高い。反対に、俺の向かいに座っている恵比寿のテンションはどんどん下がっていく。

「ねえ秋葉。このまま大阪まで行かない？」

「いい考えだ。京都で巫女さんつても悪くないよな」

「駄目です！今日のお昼はひまつぶしって決めているんです！」

テンションの高さゆえなのか、新橋は恵比寿の前であるにも拘らず俺にべたべた触ってくる。

「私、調べたんですよ。ひまつぶし、楽しみだなあ。あ、でも手羽先もおいしいらしいですね」

「ちなみに、ひまつぶしじゃなくてひつまぶし、な」

「そうでしたっけ？どっちでもいいです。はい、あゝん」

新橋は俺の口にチョコスティックを押し込んでくる。正直うざいが、これだけハイテンションな新橋も珍しいため、うまくあしらえない。

「美異、なんでそんなにテンション高いのよ」

「だって！私、先輩たちと旅行なんて初めてなんですもの！この1週間、ずっと楽しみにしていたんですよ」

「旅行、ねえ。行き先が別な場所なら気持ちもわかるんだけど」  
「同感」

俺と恵比寿は顔を合わせて、同時にため息を吐いた。  
しかし、俺は新橋の過去をなにも知らないな。まあ、恵比寿のことも知らないし、ストウレーガなんてものをやっている手前、多かれ少なかれ嫌な思いをしているから話して楽しいものではないんだろうが。俺自身の過去も誰かに話したいことではないしな。

俺は、まとわりついてくる新橋をいなしながら車窓に目を向けた。  
反射で車内を確認する。

恵比寿は、口をへの字に曲げたまま俺を見ていた。

## 帰宅〜放蕩娘編〜

新幹線を降りた俺たちは新橋の希望通りひつまぶしを食べた。

ひつまぶしとは、刻んだうなぎをご飯に乗せた郷土料理だ。いや、うまかった。

俺は別にグルメというわけではないが、これを食べただけにまたここまで来てもいいと思えるほどうまかった。

これのおかげで俺の陰気は晴れた。俺の実家に帰るのは明日だしな。俺は新橋と一緒に旅行を楽しむことにした。

恵比寿の実家は新幹線を降りてからのほうが長くかかるようだった。

まず、ローカル線で2時間ほどかけて都会から離れる。そこからさらにバスに乗り換えて1時間。それでも着かない。

空は恵比寿の心を反映するように重く、暗い雲が覆っている。

「あ、先輩！海が見えましたよ！」

「おお、海か！恵比寿、おまえんちって海の近くなのか？」

「……ええ。言っておくけど本当になにもない漁村なんだから。文句は言わないでよ」

恵比寿はうな垂れて、もはや俺たちと目を合わすことすらなくなっていた。

はしゃぐ新橋と、それに合わせてはしゃぐ俺を見てストレスが溜まりまくっているのがわかる。比喻ではなく明日の我が身だが、俺は旅行を楽しむことにしたので心の中で恵比寿に舌をだしてやった。つまり、ざまあみろってことだ。

ふと、新橋が急に黙った。それで俺は視線に気付いた。

同じバス内に乗っている女子高生らしい3人組だ。

3人組の視線の先は騒いでいた俺と新橋ではなく、顔を隠すよう

に座っている恵比寿だった。

恵比寿は視線に気付くと、ぎくりという擬音と共に身を縮めた。

3人組は俺たちに近づいてくる。

そして、恵比寿を見ると甲高い声を上げた。

「やっぱり洋子ちゃんだ！久しぶり！」

腹を括ったのか恵比寿は一度だけ前髪で顔を隠すと、勢いよく身体を起こした。

「ええ、久しぶりね。元気になっていた？」

「もう、こっちのセリフだよ。いきなり転校しちゃうんだもん」

「すごいよね、今、東京の高校に行っているんでしょ？」

恵比寿はいつもの調子で、知り合いだったのだから女子高生に対応している。凄いな、変わり身が。

「それで、こっちの人は彼氏？」

「え、すっごくいい！」

「趣味悪 い！」

……最後の奴、なんて言った？

「そんなんじゃないって！ただの同級生。言うなれば荷物持ちね」

「それで、洋子ちゃん、いつまでこっちいるの？みんなを集めるから同窓会やるつよ」

「悪いけど、明日にはもう帰るから。今回は無理ね」

「えー、残念！」

完全においてけぼりを食った俺と新橋は顔を見合わせた。恵比寿は俺と違って地元で嫌われ者というわけではないようだ。

「次は、恵比寿神社前、恵比寿神社前」

「あ、秋葉、美異、次で降りるわよ」

俺たちは女子高生3人を残してバスから降りた。車窓から身を乗り出して手を振る女子高生に恵比寿は笑顔で対応し、見えなくなっただけからひとつ大きなため息を吐いた。

「どうしたんだ？昔馴染みと再会できて嬉しくないのか？」

「あんたはローカルネットワークの恐ろしさを知らないのよ。ここ

は憶良市なんかとは比較にならないほど田舎なんだからね」

確かに、バス停の周りは見事なほどなにもない田んぼ道だ。

恵比寿は無言のまま田んぼ道を歩き出した。

俺たちは恵比寿の後をついていく。

進行方向には、小高い丘と、大きな赤い鳥居が見えた。

100段を超える石段を登り、社殿に一礼して俺たちは境内に入った。

正面には賽銭箱のある社殿、右には、おそらく集会所も兼ねているためだろう大きな日本家屋があり、左手には手水舎と社務所がある。立派な神社だ。

社務所では若い巫女さんがなにやら書きものをしている。

俺たちは手水舎で手と口を清めてから参拝し、社務所に向かった。

「お守りはある？」

少々緊張した面持ちで恵比寿は巫女さんに声をかける。巫女さんは恵比寿ほどこいつい目をしていないが、どことなく似ている。

「はい、どのようなお守りをお求めですか？」

「そうねえ。ここの神社はどんな神様をお祀りしているの？」

「ここ、恵比寿神社はその名の通り、七福神の恵比寿さまをお祀りしています。恵比寿さまは商売繁盛の神様ですよ」

「50点。うちの神社の説明としてはそれだけでは足りないわね」

巫女さんは怪訝な顔をした。どうやら逆光で恵比寿の顔が見えないようだ。

「うちで祀っているのは蛭子命ひこみこと。同一に見るところもあるけどうちでは別々にお祀りしているでしょ？」

巫女さんは少し体の位置をずらし、恵比寿の顔を見た。途端、怪訝な顔が満面の笑みに変わった。

「おねえ！」

「わ！ちよ、ちよっとー！」

巫女さんは窓口から飛び出して恵比寿に抱きついた。

「なにやってんのよ、はしたない！」

「おねえ、おねえ！」

恵比寿は困った顔をして俺を見た。

「あ、そうだ。お父さんたちを呼んでくるね！ 待っててよ。どこにも行かないでね！」

巫女さんは緋袴をまくつて日本家屋のほうに走っていった。

「まったく、騒々しいわね」

「可愛いじゃねえか。妹か？」

「ええ、由紀ゆきよ。今、中3かな。言っておくけど変なことを仕込まないですよ」

「俺は巫女さんを邪な目では見ないことにしてるぞ…ちょっとしか語尾はわざと小声で言う。恵比寿が俺になにか言おうとしたとき、日本家屋から3人が走ってきた。」

ひとりにはさきほどの巫女さんの由紀ちゃん。ひとりは親父さんだろう、神主姿の男。ひとりは割烹着を着たつり目の女性、これは、間違いなくお袋さんだろうな。

「ようこー！」

恵比寿は照れくさそうに一步前に出た。

神主さんは恵比寿の前に走りこみ、そして、そのままの勢いで、恵比寿を、ひっぱりたいた。

「！」

「??？」

俺と新橋はその光景をあっけにとられて見ていた。

「おとん！なにするぎゃー！」

混乱しているのだろう、恵比寿は叩かれた頬を押さえながら方言らしき言葉を使った。

「家出娘はまずは叱らないとな」

神主さんはそう言うのと恵比寿を抱きしめた。

「おかえり、洋子」

割烹着姿の女性にそう言われて、恵比寿は涙ぐみながら頷いた。

ふと気付くと新橋が俺の袖を引いている。まあ、情けだな。俺と新橋は荷物を置いて長い石段を降りていった。

## 昔の出会い 1

「ひまつぶし、おいしかったですね。私、お茶漬が好きです。帰りも食べていきましょね」

「手羽先はいいのか？」

「うーん、それも捨てがたいですねえ」

俺と新橋は知らない町をただぶらついていた。適当に時間を潰して神社に戻るつもりだ。

「これからどうするかなあ。時間を潰すにしてもどこになにかあるかわからないじゃあなあ」

「海を見に行きましょうよ。たぶん、歩いていけますよ」

新橋の提案で海を見に行くことにする。

海は神社から10分ほど歩くと見えた。浜はなく、コンクリートの堤防に小型船が並んでいる。

俺はコーヒー、新橋はミルクティーを自販機から買い、街道沿いのベンチに腰を下ろした。

「潮の匂がしますね」

「ああ。天気がよかつたらもっと見晴らしがよかつたらうな」

あいにく、天気は曇り空で海も鉛色だ。

「巧さんは巫女が好きですね。なんでですか？」

「いきなりだな。フエチに理由を聞くのも酷な話だと思っけど」

まあ、俺の場合は理由があるんだが。

新橋は身体ごと俺に向け、聞く体勢になっている。

ここが海だからなのか、俺は話すことにした。

あれは俺が小学6年の時の冬のことだ。その日はちょっとした災

害にニアミスした日なので日付も覚えていない。

いつものように学校を終えて家に直帰した俺は、たまたまその日の習い事が中止になったことを知った。

暇の潰し方を知らなかった俺は、突然できた余暇を持て余した。

今の俺なら寝て過ごすこともできるけど、当時の俺はそんな無駄遣いはできないと思ったんだな。

しかし、やることはない。こんな時にしかできないことを考え、それで俺は海を見に行くことにした。

秋葉の屋敷から海までは電車を使って1時間もかからない。遠い場所ではないが日常を習い事で埋めている俺にはふらりと行ける距離でもない。

そこで、俺はあの娘と出会った。

その日は今日のように灰色の空が覆った陰鬱な天気だった。

さらには冬の寒風が海から吹きつけ、砂浜は町より一段と寒かった。

俺はなにをするでもなく浜を歩いた。

正直に言つと楽しいものではなかった。ひたすら寒いし景色は暗い海が続いているだけだ。

しばらく歩くと、朽ちかけた小型船を見つけた。

彼女は、そこにひとりで座っていた。

普段の俺だったら無視しただろう。その娘に声をかけたのは、このまま帰ったら時間を無駄に過ごしたという、なにか敗北感に似た脅迫観念を抱いたからだだった。

俺は小型船の縁に手をかけると、一気に船の上に乗った。

少女は、俺には目を向けず、ただ海を見ていた。

俺は少女を見た。

……綺麗だった。

歳は俺と同じくらいか下だろう。肩口で揃えられた艶のある黒い直毛は海風に揺られている。着ているものは、冬の寒い海で、薄汚れた白衣と緋袴だけだ。

整った顔立ちは、桃花のような造形美とは対極の、自然の美しさがあった。

そして、まだ少女の彼女を、可愛いではなく美しいと感じたのは、その顔立ちと共に、纏っている空気によるところが大きかった。

日本の神を英語に訳すなら、ゴッドではなく、ノーブルスピリットになる。

俺には、彼女と、彼女の纏う雰囲気、高貴で神聖なものに思えた。

俺は彼女に見惚れてしまった。

どれくらい彼女を見続けていたのだろう。実際は1分も見ていなかったと思うが、俺は首筋を撫でる寒風で現実に戻された。

俺は、俺を完全に無視している少女に声をかけた。

「そんな格好で寒くないの？」

少女は俺に視線を向けることもなく答える。

「寒いです」

澄んだ声で少女は答える。

返答があったことが俺には少し意外だった。無視されると思ったからだ。

触れることすら出来ない、そんな浮世離れた空気が彼女の周りにはあった。

「なにやっているの？」

「ここは危険です。早く去なさい」

少女は俺の質問に答えることなくそう言った。

逆らい難い言葉、結果から言えば俺は彼女に素直に従ったことで命拾いしたことになる。

しばしの逡巡の後、俺は着ていたジャケットを彼女の細い肩にかけた。

少女は、初めて俺を見た。

俺は高鳴る心音を隠して、一言だけ言った。

「やるよ」

俺は逃げるように小船から降りた。

少女は、足が悪いのか、立ち上がらずに船から身を乗り出した。

「あなたは？」

「俺は巧！秋葉巧だ！」

垂れる鼻水を隠すために俺は少女に背を向けて、砂浜を後にした。

## 昔の出会い2

「それで、その娘とはどうなったんですか？」

新橋は、俺ののろけにもならないような初恋話になぜか食いついた。聞いていて楽しい話でもないと思うんだけどなあ。

「いや、それつきり。実際には5分も一緒にいなかったけどな」

「その娘、その後どうしたんでしょうね」

「多分、死んだんじゃないかな」

新橋はきよんとする。俺は話の補足をした。

「あの後、俺の行った海岸一带に津波が来てね。カルト雑誌では小隕石の衝突が原因とか言っていたけど。死者は1000人を超えた大災害になったんだ。今思えばあの津波もストウレーガの誰かが起こしたものかもしれないな。俺はぎりぎり被害には遭わなかったけど、浜に残った彼女は波に飲まれただろうな」

俺はベンチから立ち上がり、コーヒーの缶をゴミ箱に捨てた。

「それで、彼女のことを少しでもわかればと思って、彼女の着ていた服を調べてみたんだ。よく調べると違っただけで、巫女装束みたいに見えた俺は時間の空いた時に近隣の神社を巡ってみて、それで巫女さんが好きになったんだな」

新橋もベンチから立ち上がり、缶を捨てる。そして、自分の腕を俺の腕に絡めてくる。

新橋は、あの娘に似ている。だが、纏っている雰囲気はまるで違った。

「さて、下らない長話も終わりにして、そろそろ戻るか。恵比寿の感動の再会もそろそろ終わっている頃だろう」

俺たちは来た道に戻ろうとした。

その時、船から魚の荷下ろしをしている漁師と目が合った。

歳は30前後だろう漁師は俺と目が合うと、不機嫌そうに魚を投げつけてきた。びちゃりと、嫌な音を立てて魚は俺の足元で跳ねた。

「こんなもんは売り物にならん。やる」

一方的に漁師はそれだけを言うと、話は終わりとはばかりに作業に戻った。

投げつけられた魚は、エラが不恰好に発達していた。

そういうのは多いのだろう、漁師は箱の中から規格外の魚を見つけると、驚づかみにして海に放り投げていた。

俺は軽く息を吐くと、怖い目で漁師を睨んでいる新橋の腕を軽く引いた。

「ほら、行くぞ」

「あ、はい」

新橋は、両腕で俺の腕を抱きしめてきた。俺たちは、腕を絡めたまま神社に戻った。

新橋美異は秋葉巧の腕に抱きついたまま、昔のことを思い出した。巧と、初めて会った、あの海での出来事だ。

美異は肩にかけられたジャケットを抱きながら、巧が浜から去る姿を見ていた。

異常がある。心拍数が上がっているのだ。

だが、不快ではない。こんなことは初めてだった。

新橋美異は物心がつく頃には白金にいた。

白金として成長し、実績を重ね、そして、今ここにいた。

幼稚園、小学校、中学校、と一連の中で幼少時代を過ごすように、美異がここにいることはごく自然なことだった。

白金では強きことが自身と仲間を守る手段であり、強きことでその地位を確立する。

それには戦うのがもつともわかりやすい証明方法だった。

ゆえに美異は最高幹部であり、もつとも強きものとされる22人の大アルカナの称号を持つものに挑んだ。

その自然な流れの中に微かなノイズが走る。

美異は昂る気持ちを抑えることなく、船の縁に手をかけて立ち上がった。

足元には血溜まりが出来ている。

美異の血だ。

後に巧が気付くように、美異の着ているのは巫女装束ではなかった。それは、死者の着る、白装束だった。

緋袴に見えた下半身は、美異の血で赤く染まっていたのだ。

美異は火照った気持ちを抑えるために冷たい海風を肺の中に吸い込んだ。そして、荒涼とした灰色の海に向かって叫ぶ。

「そろそろ終わらせましょう、『世界』！」

その声に呼応するように海の中から、30前後の女性が姿を現す。ウェーブのかかった長い銀髪、赤い唇の右下にはほくろがある。

女性、『世界』はゆつくりと海から浜に上がった。その姿には一粒の水滴も付いてはいない。

「もう隠れんぼはいいのですか、美異？」

「『世界』、私は今不思議な気持ちなんです。とても気持ちいい。あなたにはこの気持ちかわかりますか？」

「ええ、見ていました。かわいい少年でしたね。あなたにお似合いましたよ」

「ああ、『世界』。こんな気持ちは初めてです。胸の高まりが収まらない」

「うふふ。いいことを教えて差し上げます。それは、恋ですよ」

「恋？そうですか。これが、恋……」

「そうだ。あなたが寂しくないようにあの少年も殺してあげましょう。それならあなたも安心して死ねるでしょう？」

美異は『世界』の言葉が聞えないのか、下を向いてなにかを呟いている。そして、なにかが切れたように突然大声で笑い出した。

「ああ、凄いわ。私にこんな感情があったなんて！ 凄い、凄い！」

『世界』は眉をひそめ、腕を組んで豊満な胸を支えた。

美異は笑いを収めると、凄惨な笑顔で『世界』を見た。

「『世界』、私はこの気持ちに浸っていたい。あなたは、邪魔です」  
「……状況はわかっているのですか？ あなたは満身創痍で立っているのもやっとならないですか。それでも私を、倒せると？」

確かに美異の身体は傷だらけだった。白装束で見えないが美異の左足は千切れかけている。その傷は全て目の前の女性、『世界』が美異に与えたものだった。

『世界』は腕組みを解くと、人差し指を立てた。すると、『世界』の背後の海から100を超える水球が浮かび上がる。

「もうわかっているでしょう？ 私の力は『水』です」

『世界』は人差し指を折り、美異に向けた。水球はまるで一斉に投げ飛ばされたように美異に向かっていった。空気抵抗により、水球は槍へと姿を変える。

だが、水槍はそれが自らの意思であるように直前で美異を避けた。美異が周囲の重力を変え、軌道を逸らしたのだ。

外れた一本は提に突き刺さり、粉々に砕く。水槍は、たとえ一本でも直撃するなら美異の小さな身体をたやすく破壊するだけの力を持つていた。

「超重力、厄介な力ですね。さすがに私に挑むだけのことはある」

『世界』は突然美異に背を向けた。

それと同時にあるものが消える。

音だ。

半永久的に聞こえていた波の音が消失した。

「それでもあなたには私を攻撃する方法がない。あなたの射程は、せいぜいが30メートル。射程外にいる私には手も足もでない。そうでしょう？」

「今のが見えなかったのですか？ 私には遠距離攻撃は通用しませんよ」

「それは、どうかしら？」  
音が戻った。

ごく小さなさざ波、それは次第に大きくなっていく。

そして、それは美異の前に姿を現した。

津波だ。

30メートルは超えるだろう巨大な津波が浜に迫っていた。

すでに音は轟音と化している。

「あなたは溺死と圧死、どちらで死ぬのかしら？」

『世界』は美異に笑いかけた。

津波は海に近い『世界』から飲み込む。

津波は勢いを減じることもなく、美異に迫った。

そして、津波は町を飲み込んだ。

### 昔の出会い3

どれくらい経っただろうか、波は引き、浜は町から引き込まれた雑多なもので汚れていた。

小船は津波によって圧壊し、跡形もなく海に飲まれていた。ぐらりと、砂浜に縦に突き刺さったワゴン車が揺れ、倒れた。

『世界』はひとり、浜に立っていた。

検分するように浜を歩く。

「波に飲まれましたか。つまらない」

『世界』は髪を払うとその場を後にしようとした。だが、出来なかった。

背筋を走る悪寒、そして、上から押される物理的な圧力。

『世界』は上空を見た。そこには、ゆっくりと降下する美異がいた。

「重力を軽くして空に逃げたのですか！」

美異は両手を上に掲げている。美異の手の上には、直径1メートルほどの禍々しい黒い『穴』があった。

異常な力場に回りの空間が歪んでいる。『世界』は戦慄した。

「待ちなさい！そんなものを使って地球を壊す気ですか！」

「まさか。あなた程度を消滅させるのにそんな力は必要ありませんよ」

『世界』はぎりりと歯を食いしばった。

もはや『世界』に余裕はなく、押し潰される圧力で逃げ場はない。

『世界』は持ち得る最大の能力を発動した。

「落ちなさい！」

『世界』が上空にいる美異を指差すと同時に、海から巨大な螺旋状の3本の槍が飛び出した。

3本の槍は一直線に美異に向かっていく。

質量、速度、その全てがさきほどの水槍の比ではない。もし直撃したのなら高圧縮で吐き出された水のように全てを切り裂き、よしんば直撃を避け得たとしても、螺旋の回転に引きずり込まれ、美異は身体ごとねじ切られるだろう。

美異は迫る死を凄惨な笑みで笑い飛ばした。

「消し飛ばせ！」

美異は両手を振り下ろした。

黒い『穴』はゆっくりと、落ちていった。

それを迎撃するように伸びる3本の槍。

4つの高物質は衝突した。

空間が歪み、帯電する。

ほんの一瞬の拮抗、槍は解けるように霧散した。

黒い『穴』は徐々に加速していき、『世界』に落ちていく。

ぱらぱらと、『世界』の周りの、津波によって水に濡れた重い砂が舞い上がる。

ふわりと、『世界』から重力が消える。黒い『穴』は『世界』の胸に吸い込まれた。

そして全てが消えた。

グラウンド0を中心に起こる大爆発、範囲内にあるものは全て消失する。

人も、地も、あらゆるものが消し飛んだ。

美異は、空からゆっくりと今出来たクレーターに降り立った。

傷めた足を着け、顔をゆがめる。

だが、すぐに美異は空を仰いだ。

思い浮かぶのは今の戦いのことではなく、先ほどあった少年のこ

と。

美異の足が水に濡れた。窪んだクレーターに海水が入り込んできたのだ。

美異は自身の周りを軽くすると、片足だけで飛び上がり、クレーターの外に出た。

こうして美異は『世界』の称号を得た。

そして、ここから美異のストーキングが始まる。

名家の出である秋葉巧を見つけるのには苦労はなかった。

美異は巧について調べた。

過去のこと、現在のこと。

最初は好奇心に過ぎなかったものが恋心に昇華するには時間がかからなかった。

周りから孤立している巧を知り、彼を理解しているのは自分だけだと優越感に浸った。

巧が自分と同じストウレーガだと知った時は狂喜した。

だが、その喜びは長続きはしなかった。

## 恵比寿家へ宴会前へ

再び長い石段を登って神社の境内に入る。

新橋が俺の腕を離すと同時に恵比寿が駆け寄ってきた。

「あ、秋葉。どこに行っていたのよ」

「よう、恵比寿。感動の再会は終わったか？」

「そんなんじゃないわよ！」

「涙ぐんでいたくせに」

「ちが！ そう、あれは、叩かれて泣いていたのよ！」

「ま、そういうことにしておくか。それより、これはなんだ？」

神社の境内は人が溢れていた。2〜30人はいるんじゃないだろうか。

「月次祭の準備か？」

「違うわよ。月次祭はそんなに大したことをやるわけじゃないからもう準備は終わっているわ」

「じゃあこれはなんだ？」

恵比寿は軽くため息を吐く。

「言ったでしょ。ローカルネットワークを舐めるなって」

タイミングよく数人の男女が石段を上がってきた。

「あ、いたいた！ 洋子ちゃん！」

男女は恵比寿に勢いよく手を振る。恵比寿は困ったように手を振り返した。

こいつら、全員恵比寿の知り合いか？ 数もさることながら、年齢層の幅が広いのがすごい。小学生くらいから老人まで老若男女揃っている。

それに、俺たちがバスを降りてからまだ2時間も経っていないのだ。

……ローカルネットワークか。

「秋葉、美異。とりあえず母屋のほうに行つて。由紀がいるから部

屋に案内させるわ」

「あ、ああ」

恵比寿は忙しそうに今来た男女のほうに小走りで向かった。

俺と新橋は目を合わせると、母屋に向かった。

「あ、巧さんと美異さんですね。私は洋子の妹で由紀といいます。いつもおねえがお世話になっています」

由紀ちゃんは玄関で俺たちを見かけると軽く頭を下げてきた。定時を過ぎたのか巫女装束は脱いでしまっている。残念だ。

「ああ、今晚お世話になるね」

「よろしく願います」

「ええ、こちらこそよろしく願います。ところで、おねえは？」

「外で来客の対応中。すごい人気だね」

「ええ。少し妬けますよね」

余談だが、今晚の来客は100人を超える。そして、明日の月次祭はさらにすごいことになる。

俺たちは由紀ちゃんに部屋に案内された。俺は8畳の客間に案内される。新橋は隣の部屋だ。

俺は客間に入った。寮の部屋は洋間なので和室は久しぶりだ。荷物を置いて、軽く室内を見回した後、俺は応接間に向かった。

そこは、戦場だった。

夕飯の用意だろう、おばさん連中がせわしなく応接間と厨房を行き来している。来客全員の分を用意しているのだろうか、勝手口には出前なども来ていた。

さて、なにか手伝ったほうがいかと考えると、中年のおじさんに手招きされた。それが、さきほどまで神主姿をしていた恵比寿の親父さんなのだとかかるのに少しだけ苦労した。

「秋葉、巧くんだね。洋子の父です。いつも洋子がお世話になっています」

親父さんは俺に頭を下げる。大人に頭を下げられるのは久しぶりだから恐縮してしまう。

俺と親父さんは縁側に腰を下ろした。いわく、厨房は男子禁制で邪魔してはいけならしい。

「それで、向こうで洋子はどうか？」

「たぶんこつちと同じですよ。面倒見のいい姉御肌。元気に人気者をやっています」

親父さんは手で顔を撫でた。俺に聞きたいことが山ほどあるんだろが、なにから聞いていいのかわからないといった感じだ。

「えっと、君も、その、洋子と同じなのかな？」

目的語が省略された言だが、俺にはなにを聞きたいのかわかる。「ええ。俺もストウレーガです」

「そうか……」

親父さんは、少し躊躇ったようだが、語りだした。

「今から5年前、中学1年の時に洋子が突然失踪してね。少なくとも私たちには前兆は見えなかった。すぐに警察に届けを出したよ。だけど、洋子は見つからなかった。洋子が失踪してから1カ月後、東京の役人さんが来てね。その時に聞いたんだ。洋子がストウレーガだということ。全寮制の七草学園にということ。浅はかにも世情には疎くてね。その時初めてストウレーガというものを知ったんだけど……」

ストウレーガのことは報道管制が布かれていて秘されている。知らないのは当然のことだ。

「それで、今日帰ってくるまでなんの連絡もなくてね。私たちは洋子の家族として、なにが足りなかったのかなあ」

「そんなことはありませんよ。俺はようこ、さん、が、失踪した気持ちはわかります。俺たちは、心配させるかもしれませんが、頻繁に命を狙われたりするんです。自分が家族と一緒にいたら迷惑がかかると思っただんですよ。だから、洋子さんが家族と距離を置いたのは、嫌だからとかそんなんじゃないです。なかなか帰らなかった

のは、多分、勝手にいなくなった手前、気まづかったからだろうけど」

親父さんは俺の顔を見た。俺は、親父さんを安心させるために笑顔を作った。

「あ、秋葉、お父さん」

来客の対応が終わったのか恵比寿は外から縁側にやってきた。

「なに話してるの？」

「おまえの弱みを聞いてるんだよ。今後、俺に逆らえないようにするためにな」

「くっだらないことしてるんじゃないわよ!!」

「あはは、巧くん。洋子のことは気長に見てやってくれよ。これも男を立てる古風なところもあるからね」

「おとんも馬鹿言うなや!」

親父さんは最後に「結婚式は神前だぞ」と、とんでもないことを口走って去っていった。

## 恵比寿家〜宴会〜

夕飯はなにか盛大な宴会といった感じだった。

100人以上の来客は当然母屋に入りきらず、境内まで使ったちよつとした祭りになっていた。

料理は漁村らしく新鮮な刺身や寿司が並び、新橋は俺の横でおいしそうにヒラメを食べている。恵比寿はというと忙しそうに動き回っている。

まあ、ここにいる連中全員が恵比寿目当てだからなあ。

「洋子！実は昔からずつと好きだったんだ！付き合ってくれ！」

「はあ？とりあえず3回くらい死ねば？そうね、4回目に美男子で金持ちに生まれていたら考えてあげる」

同級生だったのだから振られた男は泣きながら走っていった。境内が笑い声に包まれる。ご愁傷さま。

「それで、巧さんとおねえの馴れ初めってどんな感じだったんですか？」

「馴れ初めって、変な言葉使うね」

新橋の隣にいる由紀ちゃんが聞いてくる。

由紀ちゃんと新橋はいつの間にか打ち解けていた。人懐こい由紀ちゃんが新橋にじやれてるって感じだが。

「まあ、俺も今の学校に転入した口だからね。そんであいつも転校組で同じクラスだったから世話になったのが最初かな」

「それで、どつちから告白したんですか？」

なぜかこの連中は俺をそういう目で見ている。と、いうよりは俺と恵比寿をくつつけたがっているように見える。

「そりゃもちろん恵比寿からだよ。いきなり校舎裏に呼び出されてね、おつと」

いきなり飛んできたビール瓶を受け止める。

「あゝきばー！」

「恵比寿、ビール瓶はさすがに危ないだろ？」

「あんたねえ！そういうことは言うんじゃないわよ！」

「なんだよ。冗談だろ？」

「ここでは冗談では済まないのよ！ちょっとでも口走ったらいつの間にか3人目の子供はいつ生まれるんだってなことになるんだからね！」

「……結婚飛ばしていきなり出産かよ。しかも3人目！」

ローカルネットワークか。怖いな、確かに。

「ねえねえみことちゃん」

ふと見ると由紀ちゃんも俺から離れ、新橋にまわり付いていた。妹ができた感じなのだろうか、新橋は嬉しそうにしている。恵比寿はというと俺の隣に腰を下ろして刺身を小皿に取っていた。客の対応はいいのか？

「東京の学校つて楽しい？」

新橋は、俺と恵比寿を見て、気持ちのいい笑顔で言った。

「ええ。とつても楽しいですよ。私は今が、今の生活が大好きなんです」

俺は恵比寿を見た。恵比寿も俺を見ている。

たぶん、俺も同じ顔をしているだろう、恵比寿は、気持ちのいい微笑を浮かべていた。

恵比寿家〜宴会〜（後書き）

今話が短いのと相まって、今日は21時にもう一話投稿いたします。

## 恵比寿家へ宴会後へ

宴会は9時には終わった。明日が月次祭なこともあり、早々に切り上げたのだ。

俺は風呂をこ馳走になり、10時にはあてがわれた客間に入った。持ってきた文庫本を読み、眠気を覚えた頃に恵比寿は来た。

「秋葉、起きてる？」

「ああ。入れよ」

恵比寿は障子を開け、客間に入ってきた。

微かに甘い香りが漂う。恵比寿はどうやらお香をまとっているようだ。

「お疲れさん。なんか大変だったな」

「まあね。私もここまで人が集まるなんて思わなかったわ。私が小学6年生のときに一緒に登校した1年生のことなんて覚えてるわけないわよ」

「確か、5年ぶりの帰郷だったっけ？」

「ええ。あんたに会ったのはここを出た翌年だから、付き合いもけっこう長くなってきたわねえ」

恵比寿との付き合いは俺が七草学園に転入してからだからもう4年になる。

「それなりに色々あったわね。命を助けられたのも1度や2度じゃないし……」

同じかそれ以上に俺も助けられているが、恥ずかしいから口には出さない。恵比寿は、俺にとっては背中を任せられる奴だ。

「そうだぞ、感謝しておけ。おまえの欠点は俺を尊敬していないところだな」

「あんたはまずその悪言を直しなさい！」

それを最後に恵比寿は黙る。俺は恵比寿が話すのを待った。

「その……、ありがとうね。強引にでも私をここに連れてきてくれ

なかつたら、多分私は家族と和解できなかつたから」

「礼を言われることでもないよ。俺には俺の目的があつたわけだしな」

「目的？なによ」

「巫女さんを見ること。それと……」

「それと？」

「おまえを困らせること」

「馬鹿！」

「明日もう一泊したらどうだ？ご家族も喜ぶだろう？」

「自分だけ逃げようつたつてそうはいかないわよ。明日はあんたの実家に行くんだから」

「うちはそんな楽しいもんじゃないんだけどなあ」

俺と恵比寿は笑つた。

「しかし、正志も来ればよかつたのにな」

「原？なんで原が急に出てくるのよ？」

「……恵比寿、正志のことどう思う？」

「???同じ寮生でしょ？」

完全に脈なし、か。がんばれよ、正志。

そのまま恵比寿としばらく歓談した後、俺はあくびをした。久しぶりの長旅で疲れていたのかもしれない。

「さて、俺はそろそろ寝るぞ」

「あ、もうこんな時間ね」

「一緒に寝てくか？」

恵比寿はなぜか黙り、心なしか身体を寄せてきた。恵比寿の甘い体臭が香る。俺は2度目のあくびをした後、言った。

「まさか夜這いに来たわけでもないんだろ。おまえも明日に備えて早く寝ろよ」

恵比寿は一瞬驚いた顔をして、下を向いて表情を隠した。

「……そうね。デリカシーのない」

?女つてのはよくわからない思考をする。恵比寿は障子を開けた。

「じゃあね、秋葉。また明日」

「ああ、おやすみ」

俺は恵比寿が障子を閉めると同時に眠りに落ちた。

恵比寿家〜宴会後〜（後書き）

申し訳ありませんが、明日（1月31日）はお休みです。というのは、次回投稿は、カタルシスのない人死にがありますので・・・。  
なるべく月曜日は鬱にならないものを掲載したいという、どぶねずみの勝手な思惑からですが、どうかご了承ください。

## インターロード

新橋美異は布団に入り今日一日を回想する。

今日はいいい日だった。おいしいものもいっぱい食べられたし由紀と友達にもなれた。そして、今日は巧と長く一緒にいられ、多くのことを話せた。

中でも、巧が過去の自分を覚えていてくれたことが嬉しかった。過去の少女を美異とは思っていないようだが、昔から好意を抱いてくれていたのだ。美異は興奮を抑えきれないというように身もだえした。

だが、美異は、今まで隠しきれなかった笑みを一瞬で消すと、突然声を発した。

「なんのようです、『驚』」  
その冷えた声に反応するように、部屋の隅に女性が浮かび上がった。

『世界』に仕える使徒、『驚』だ。

『驚』は膝を着き恭しく美異に頭を下げている。

「ご就寝中、失礼いたします」

「ええ。私の安息を妨げる以上はそれなりの覚悟があつてのことなのでしょうね？」

「お叱りは後ほど。報告があります」

美異は布団に入ったまま、目で先を即した。

「『正義』が来日しました」

美異は身体を起こした。

「目的は？」

「申し訳ありません。そこまでは掴めていません」

美異は不快感を隠しもせず舌打ちする。

「監視しなさい。おかしな動きがあれば報告するように」

『驚』は深く頭を下げると、解けるように消えた。美異は害された気分を収めるために頭から布団をかぶった。そして、隣の部屋で寝ているだろう巧を想い、目を閉じた。

関東では午後から雨が降り出している。空港のフロアーも傘に付いた雫で所々水溜りを作っていた。

神田惣一は入国ゲート近くのイスに足を組んで座り、吐き出される入国者の群れを見ていた。

人の流れがまばらになった頃、3人の男女が入国ゲートを通った。一人は浅黒い肌を持った男。2メートル近い長身に、細身だが引き締まった筋肉をしていた。

一人は黒人の女。背は低く、厚い唇を持っている。

そして、一人は白人の女。赤い唇と長い金髪を持ち、サングラスをかけている。

3人がゲートを通るとき、センサーが反応した。係員が先頭にいた白人の女を止める。

「なにか？」

「すみません。貴金属類を外してもう一度通ってください」

女はサングラスをずらし、係員を、作り物めいた銀色をしている両目で見た。

係員はその瞳に吸い込まれるように、ゆっくりと前のめりに倒れた。

3人は痙攣している係員を無視して、ゲートを通過した。惣一は3人に近づく。

「あーあ、可哀相に。『正義』の裁き、か」

「彼は運がなかったわね。久しぶりね、『愚者』。去年のサバト以

来かしら」

「確かにお手伝いを送ってくれと頼んだけど、まさか君たちが来るとはね」

白人の女は微笑を浮かべた。彼女はゲルトルート・ガルボ。『正義』の称号を持つ白金最高幹部だ。

男は片頬を吊り上げた。彼の称号は『ブレード』。黒人の女は表情を変えることもなく口角を下げている。彼女の称号は『天秤』。

『ブレード』と『天秤』は『正義』に仕える使徒だ。

「また面白いことを考えているんでしょ？日本ということは、ターゲットは『世界』、かしら？」

「あはは。お見通し、か。正確には少し違うんだけどね」

「あなたの気を引くほどのストウレーガがいるの？」

「うん。この間新しく友達になったばかりだね。ほら、友達には喜んでもらいたいだろ？」

「へえ。馬場久菜あたりかしら？」

「外れ。彼女の部下なんだけど。この間スカウトした娘を始末されちゃってね。それがどうやら『世界』のお気に入りなんだ」

「そう。それならその子はあなたに任せて私は『世界』と遊ばせてもらうわね」

「ああ、頼むよ。場を盛り上げて欲しいんだ」

惣一は3人に恭しく頭を下げ、一礼する。

「ようこそ日本へ。『正義』ご一行さま」

## 舞台作りと居間でトリビ

「そら、行くぞ。いつせえの、せ！」

俺は肩に力を入れて木材を持ち上げる。

ここは恵比寿神社境内。

今、俺は神楽舞用の特設舞台を作っているところだ。

舞台自体は夏祭りや年末年始に毎回組み立てるものなので、それほど複雑なものではない。ただ、力仕事なので俺は氏子さんの男衆に混じって手伝っているわけだ。

男衆のみなさんは昨日以上に俺に親密に接してくれていた。だが、たまに親しみを持って「甲斐性なし」と呼ばれる。この地方のスラングだろうか？

由紀ちゃんにはおにい（ニュアンス的には義兄？）と言われるし、なぜだ？

「あ、いたいた。あきばー、なにやってんのよー!!」

「おう、えび、すー!!」

俺は恵比寿の姿を見て目を見張った。

なんと、恵比寿は巫女装束を着ていたのだ。それも正装。千早を羽織り、頭には挿頭<sup>かかし</sup>。髪はいつも通り後ろで結っているだけだが、髪飾りという筒状の布でまとめている。

男衆からは、おー、と歓声が沸く。あ、なんか涙が出てきた。

「恵比寿、・・・その格好？」

「どう、似合う？今日のお神楽、私が舞うことになっちゃって。なにしろ5年ぶりだから自信ないんだけど」

俺は恵比寿の手を取った。意外にも小さい。

「恵比寿、いや、洋子！俺と付き合ってくれ！」

おおー、とさらに大きな歓声が沸く。恵比寿は頬を赤らめて俺を見た。

「え？そ、そんな、いきなり。その、本気なの？」

「いや、今のなし。巫女装束姿に我を失：ぐっふう！」

緋袴を舞い上げ、俺の腹部に恵比寿のつま先がめり込んだ。わああ！と、今までで一番大きな歓声が沸いた。くそ、いい蹴りだ。

「死ね！早めに死ね！」

男衆は俺と恵比寿を指差して笑っている。恵比寿はガニ股で母屋に去っていった。あいつ、なにしに来たんだ？

「甲斐性なしの兄ちゃん。今のはまずいよ。気立てのいい洋子ちゃんでもあれは怒るよ」

「気立て？ いや、それより、なんで俺が甲斐性なしなんです？」

「そりやおまえ、据え膳食わなけりゃ甲斐性なしと言われても仕方ねえよ」

？さっぱりわからない。なんなんだ、一体？

舞台を組み立て終えて母屋に戻ると、居間で新橋がひとりトリビジョンを見ていた。格好はTシャツにホットパンツと軽装だ。こいつも他人ん家でくつろいでるなあ。

「よお、新橋。なにか面白いのやってるか？」

「あ、巧さん。お疲れ様です」

トリビジョンはニュースをやっていた。空港の入国監査員が急死したらしい。

空港ということもあるのだろう、ゴールドのパンデミック以来トリビジョンはこの手の話題に敏感だ。

「急死、ねえ。変な病気じゃなければいいけど」

「たぶん、そういうことではないと思いますけど」

新橋を見ると少し怖い顔でトリビジョンを見ている。

「？なんでそう思うんだ？」

新橋は慌てて俺を見て手を横に振る。

「あのその、インタビューで言ってたんです。同僚の人が、死んだ人は変な病気にかかっているように見えなかったって」

「ふーん。ところで、恵比寿家の人たちは？」

「社殿で月次祭をやってますよ。遠目で見学させてもらいましたけど祝詞を奏上していました」

どの神社でも行事は祝詞を奏上してお神酒を飲んで福鈴を授けられる、と大した違いはない。

神社巡りで見慣れた俺としては今さら改まって見るものでもない。不謹慎ながら俺の神社参拝の目的は巫女さんを見ることなのだ。途中から顔を出しても迷惑だろうしな。

俺は新橋の隣に腰を下ろした。新橋は身体を寄せてくる。

「なあ新橋」

「なんですか？」

「おまえ、昔は白金にいたんだよな。神田惣一って知ってるか？」

びくと、新橋の身体は一度跳ね、そのまま固まった。

「おい、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。今日はいい天気ですね」

「ああ、そうだなあ。それで、知ってるか？『愚者』」

「日本語って難しいですよねえ。私、未だに間違っちゃいます」

……つまり、俺の言ったことは理解できないと。まあ、無理には聞かないよ。

軽い振動、俺は携帯を確認した。メールが着ていた。

## 平和なフォートファイブス

ばたんと、大きな音を立ててフォートファイブスの重い扉は開かれた。

原正志はエントランスに駆け込み、左右を見渡す。誰もいないのを確認すると階段を駆け上った。

テラスに馬場久菜と岡地留美を見つけ、正志は駆け寄る。

「あ、おかえり正志くん。お土産は？」

「岡地先輩！巧たちは？」

「な、なによう急に。3人なら明日まで戻らないよ」

正志は携帯を取り出すと巧にメールを送った。内容は「いつまで恵比寿の実家にいるつもりだ！」。

久菜は正志の慌てようなど無視するようにゆっくりとティーカップを口に運んだ。

憶良市は昨日の雨空とは違い、晴天が広がっていた。

テラスは、フォートファイブスが山間にあることもあり、憶良市を展望できる見晴らしのいい場所だった。

「しっかし、巧くんもやるよね！。昨日はきつとぬぶぬぶのぐぼぐぼのべちゃべちゃだよ」

正志の手が止まり、久菜は口に運んだ紅茶を噴き出しかける。

「留美、その擬音はやめて。なにか汚いわ」

留美と久菜は、正反対の性格だが仲がいい。

「それで、正志くんはどうしたのかな？ 3人が心配になったのかな？」

留美は八重歯を見せて正志を下から覗き込む。

正志は黙った。

正志の携帯に返信メールが届く。『昼ご馳走になって俺の実家に行く予定（涙）。帰るのは明日。長居はしないから昼には着くと思っ』。

正志はそのメールを見てさらにメールを返した。『俺もそつちに行く!』。

「先輩! 俺はこのまま巧の実家に行きます!」

それだけを言っただけで正志はテラスから出て行った。

留美は頬杖をついて正志を見送る。

「いや、青いね、青い春だね!」

「赤面してしまうわ」

久菜は恥ずかしそうに町を見下ろした。

「ねえ、くーちゃん。たくみくん、ぬぶぬぶしたと思う?」

「……無理ね。彼、にぶいから」

「そうだね、たくみくんはにぶいからね。きっと女の子が夜、部屋に来てそのまま帰しちゃうんだよ。ちゅーもしないんじゃないかな。カイシヨなしだね。みいちゃんが苦労するわけだよ」

「いいことよ。学生の自分は勉強なのだから」

久菜はなにを想像したのか頬を赤く染め、目を閉じた。

留美はそんな久菜を見て笑う。

そして、あることに気付き愕然とした。

「しまった! お土産もらってない!」

原正志は焦っていた。

正志は月に一度は実家に帰っている。実家の居心地がいいということもあるが、それは家長命令だからだ。

正志の価値基準の中で家族というものはかなりの上位に位置する。逆らう意思も必要もなかった。

だが、今回はそれが仇になった。

秋葉巧が、正志が密かに、実際は正志と洋子の当人同士以外にはばれているのだが、想っている恵比寿洋子の実家を訪問したのだ。

初めはなんの心配もしていなかったが、実家でなんでも相談しているひとつ上の姉に言ったところ、煽られた。

いわく、そんな余裕があるのか？ 寝取られるぞ、と。

不安は時を追うごとに増大していく。

正志は我慢がでさず朝一の電車で寮に戻ってきたのだった。

そして、正志は、今度は新幹線に乗り、巧の実家に向うのだった。

## 巫女舞

境内には人が溢れていた。昨日の比ではない。屋台が出ていないのがおかしいくらいだ。

「ほら、新橋、はぐれるなよ」

俺は新橋の手を握り舞台横の見学席に着いた。

「あ、おにい、みことちゃん。やっと来ましたね」

「由紀ちゃん、ここの月次祭っていつもこんなにすごいのか？」

「いいえ、おねえのせいですよ。みんなおねえの巫女舞を見に来たんです」

恵比寿はすでに舞台上にいる。久しぶりだからなのか緊張した面持ちをしている。

「昨日の来客数もすごかったですよね？いつも私が舞うときは社殿で済みますんですけど、おねえの場合は今回みたいに特設の舞楽殿を作るんです」

「なに？ 恵比寿ってこの世界では有名なの？」

俺はそれなりに神社関係には詳しいつもりだが、それを知らなかったってのは正直悔しい。

「ん？君は洋子ちゃんのお神楽を知らないのかな？」

突然横に座っていた男性に声をかけられた。歳は30中盤だろう、痩せ型でメガネをかけている。

「あ、目白さん、こんにちは」

「由紀ちゃん、こんにちは」

俺と新橋は由紀ちゃんに目白と呼ばれた人を紹介してもらった。

「えっと、氏子の目白さんです。県会議員をされているんですよ」

俺と新橋は軽く頭を下げた。目白さんはふと俺の顔を見て眉間に皺を寄せた。

「君は、ひよっとして秋葉さんのところの巧くんかな？」

「どこかで会いましたか？」

「あはは。何度かパーティーであったことがあるんだよ。でも、あの頃は僕はただのしがない議員秘書だったからね。覚えていてもらえなくても仕方ないよ」

「はあ」

「それより洋子ちゃんだよ。僕も昨日洋子ちゃんが帰っているって聞いて今日の仕事を放ってきたんだから」

あの恵比寿がねえ。

俺は恵比寿を見た。

恵比寿は例の吊り目で頼りなげに俺を見ていた。

俺は舌を出してやる。

恵比寿は少しだけ目を見開くと、口元に笑みを浮かべた。

……一瞬で引き込まれた。

しゃん、と神楽鈴が鳴らされる。

それを合図に巫女舞は始まった。

境内に鈴の澄んだ音が響く。

これだけ多くの人がいるのに、それは鳴り響く。

全員が、恵比寿を見ていた。

恵比寿は舞う。

言葉を飾らずに言うなら、綺麗だった。

俺は恵比寿に見惚れ、目が離せなかった。

「中学生の時もすごかったけど、大きくなってますます綺麗になっ  
たね」

「ええ、綺麗ですね」

言った後ではっとなったが、新橋は気付いていないようだった。

「巧くんはこの神社がどの神様を祀っているか知っているかな？」

「確か恵比寿さまと蛭子命の二柱って聞いています」

「蛭子命はどんな神様？」

「イザナギとイザナミの最初の子供でしたね」

「うん。不具であるとして葦の舟で流されて捨てられてしまう。その舟が流れ着いたところで富をもたらず漂着神として各地で信仰されているんだけど……」

目白さんは一度言葉を切った。

「ちょっと、君に似ているね。ストウレーガとして秋葉家から絶縁されたところとか」

俺は横目で目白さんを見た。議員なんてことをやっている、ストウレーガのことや俺の実家の裏事情も知っているってことが。

「よくご存知で」

「気に障ったかな？」

「いえ。本当のことですしね」

目白さんとの話はそれきり、俺は視線を恵比寿に戻した。

## 巫女舞終わって

「あー、疲れた！」

恵比寿は居間で大の字に寝転がった。残念ながら巫女装束はすでに脱いでいる。

テーブルには氏子さんのための仕出し弁当があった。

「お疲れ様です、洋子先輩。すごく綺麗でしたよ」

「ありがと、美異。秋葉、これからの予定だけど……」

「ああ、ちよつと寄るところが出来た」

「？どこよ」

「正志がこっちに向かっていているんだってよ。あいつを捨わないとな」

「はあ？面倒くさいわねえ」

恵比寿は身体を起こし、し弁当を食べ始めた。

「昨日も言っただけどもう一泊してもいいぞ」

「おねえ、そうしてよ。昨日はあんまり話せなかったし」

「由紀、駄目よ。秋葉さんのご両親にも挨拶しなくちゃいけないんだから」

と、これはお袋さん。挨拶ってなんの挨拶だ？

弁当を食べ終えて小休止をした後、俺たちは石段上の鳥居前に集合した。正確には新橋以外。

「まったく、用意の遅い娘ねえ。なにやってるのよ！」

「すいません、遅れました」

新橋は小走りで俺たちのところに来る。

格好は先ほどまで着ていた服とは違い、白いワンピースだ。

「なんでわざわざ着替えてるのよ」

「え？だってこれから秋葉先輩のご実家に行くんですよ？ 似合いませんか？」

新橋はその場でぐるりと回ってみせる。

「似合ってはいるけど……」

「本当は振袖か白無垢のどっちにしようか迷ったんですけど、そこまで気分うとかえって逆効果かな、と思ひまして」

……白無垢？

恵比寿は同時にため息を吐いた。たちの悪いことに新橋には悪気がまつたくないのだ。

「だからスーツケースなんて持ってきたのね。お母さん。これ、寮に郵送して」

恵比寿は新橋のスーツケースを奪い、お袋さんに渡した。

「これからは定期的に戻ってくるのよ」

「あはは、考えとく。ここはちよつと遠いからね」

「巧くん、洋子のことを頼むよ」

「ええ、頼まれました」

「なにしれつと頼まれてるのよ！」

「みことちゃん、メール送るからね！」

「うん、由紀ちゃん。またね」

こうして俺たちは恵比寿神社を後にした。

俺と新橋は、軽い足取りで先頭を行く恵比寿の後について長い石段を降りていった。

俺たちは来たときと同じようにバスに乗って漁村を出た。

最初は親父さんが最寄り駅まで送ってくれると言ってくれていたが月次祭がまだ終わっていないので遠慮した。

また1時間近くをかけて最寄り駅に行き、さらに1時間をかけて正志と落ち合う予定の駅に向かった。

正志は駅に先に着いていた。

「遠いんだよ！東京から3時間はかけてるぞ。今のご時世、3時間あればアメリカを往復できる！」

「悪かつたわね、田舎で」

恵比寿に凄まれて正志はたじろぐ。マヌケ。

「正志、実家のほうはいいのか？」

「ああ。顔を見せたからもういい」

「それじゃあ、秋葉の実家に行きましようよ」

恵比寿は馴れ馴れしくも俺の手を取った。

正志と新橋の視線が突き刺さる。

俺は恵比寿の手を振り払った。

「俺の実家は恵比寿の実家ほど遠くはないよ」

「どうかしらね。そんなこと言ってすっごい田舎なんじゃないの」

そう言っただけ恵比寿は俺に顔を寄せてくる。近い近い！

テンションの上がつてきている恵比寿、ああ、これは昨日の新橋

と同じだ。

自分の用事が済んで気が楽になりやがったな。

俺の緊張を解すためって理由もあるのかもしれないが、すっげえ

うぜえ。

俺たちは駅のホームに向かって歩いた。俺の左には新橋、右には恵比寿。さらに恵比寿の右側に正志がいる。

が、恵比寿は正志に背を向けて俺に絡んでくる。昨日いじめすぎたか……。

俺は正志と恵比寿がいる時はなるべく正志と恵比寿を話させるようにしている。

余計なお世話かもしれないが、友人の恋路を応援する程度の気配りはできるつもりだ。

だが、今日のように恵比寿が正志をドン無視すると、正直、困る。付き合いが長い分、恵比寿にとっては正志より俺のほうが気を使わなくていいからだろう。俺も恵比寿には気なんて使わないしな。

だから意識的な気配りが必要なのだが、今日の恵比寿は昨日の新橋と同じように難敵だった。

俺は、険の籠った目で俺を睨みつけてくる正志を、なるべく見ないようにした。

## 帰宅〜放蕩息子編〜

俺たちは1時間ほどローカル線に揺られて俺の実家がある最寄り駅に着いた。

ここから歩きで30分ほどだ。

駅前には片道3車線の大きなロータリーのある小奇麗なものだが、それに反して人手はほとんどない。

そこで俺は嫌なものを見た。

「役立たず！あなたの時給程度で私の貴重な時間を賄えると思っているの？」

「すいません、お嬢様」

赤いリボンをしたセーラー服の少女が運転手だろう中年の男を頭ごなしに怒鳴っているのだ。

少女はその外見とは似使わしくない言葉で男を罵る。男は少女の言われるままになっていた。

恵比寿はそれを見て眉をしかめた。

「なに、あれ？」

「この街の弊害」

俺は少女と運転手に近づいた。

「いい加減にしろ。街中でみっともない」

少女は驚いたように俺を振り返った。この街で自分に逆らう人間がいるとは思わなかったのだらう。

少女は嫌な笑みを浮かべて言った。

「あなた、よそ者ね？いいことを教えてあげる。ここでは私に逆らわないことね。さもないと、拘置所に何日か泊めてもらうことになるわよ」

まあ、4年ぶりだしな。覚えていないのも仕方ない。

「きゃんきゃん吠えるな、馬鹿が。すねかじりが凄むのに一々他人の威を使うな！」

恵比寿と正志は言葉遣いの変わった俺に目を見張っている。いけないね。どうも地が出る。

新橋はとうとなぜか懐かしそうに俺を見ていた。

少女は目を剥くと、俺を平手打ちしてきた。

踏み込みも甘いし振りも弱い。武道の練習をおろそかにしている証拠だ。

俺は少女の手を掴み、捻りあげた。

「いた、痛い！あなた、秋葉の人間にこんなことしてどうなるかわかっているんでしょうね！」

「秋葉？どこの野良犬だ？」

俺はさらに少女の手を捻る。運転手は少女を助けようとするが、俺の一睨みで動けなくなった。

「ちよつと！やり過ぎよ！」

恵比寿が俺を止め、俺は少女の手を離した。

少女は悔しそうに涙目で俺を睨んでいる。俺は少女を見下した。そこに、2台のリムジンが俺たちの横に止まった。

少女は一転して勝ち誇った笑みを俺に向ける。

リムジンからは数人の黒服と背の高い、銀色の髪とひげを持ったスーツ姿の男が降りてきた。

「上野！こいつ、よそ者よ！私に無礼を働いたわ！」

スーツ姿の男は少女を無視し、俺の前に来ると、腰を90度折り、頭を下げた。

「おかえりなさいませ、巧さま。お迎えが遅れて申し訳ありません」

スーツ姿の男の名は上野良治。秋葉家の執事で俺の武道の師匠だ。すみれの父親でもある。

少女と恵比寿たちはきよとんとその様子を見ていた。

「上野、貴様が付いていながらなんだ、この佳苗の不甲斐なさは！少女の名前は秋葉香苗。俺のひとつ下の妹だ。」

自分で言っておいて内心苦笑する。佳苗の振る舞いは秋葉で育った人間の特徴だ。

今、俺が上野を怒鳴り散らしているのも、路上で年上を罵倒しているわけで、さっきの香苗と大差ない。こうなるように教育されているのだ。

「私の不徳の致す所です」

「たくみ？ 巧兄さまなの？」

俺は佳苗を無視し、上野に頭を下げさせたまま黒服がドアを開けているリムジンの後部座席に乗った。

おっと、いかんいかん。

「おい、恵比寿、新橋、正志。早く乗れよ」

新橋は躊躇うこともなくリムジンに乗った。

恵比寿と正志は少し躊躇いながらリムジンに乗る。

後列で4人が乗ってもまだスペースがある。

扉は閉まり、リムジンはゆっくりと走り出した。

「……びっくりしたわ。あんた、相当な内弁慶だったのね」

「耳が痛いな」

リムジンは10分ほど走ったところで止まった。

車を降りると、そこは広大な日本庭園がある武家屋敷だった。

秋葉邸だ。

広さ自体はフォートフィフスと変わらないが無駄に金をかけている。

「おかえりなさいませ、巧さま」

30人近い使用人が総出で俺たちを出迎える。

新橋は堂々としたものだったが、恵比寿と正志は面喰らっていた。

俺も、昔はこういう生活に慣れていたんだなあ。

「上野。まずは客人を部屋に案内してやってくれ」

「はい。離れを用意してありますがよろしいでしょうか」

「ああ。あそこならくだらないごたごたに巻き込まないで済むな。

助かる」

上野は恵比寿たちを離れに案内するために俺から離れた。

俺はそのまま玄関に上がる。侍女のひとりが脱いだ俺の靴を揃え

た。

「巧さま、奥の間で奥さまがお待ちです」

「俺に用はない。待たせておけ！」

ふと気付くと侍女は声を荒げた俺に怯えている。俺は頬を叩いて顔を変えた。

「いや、悪い。少ししたら俺から出向くと伝えておいて」

侍女は急に態度を変えた俺に戸惑いながらも頭を下げた。

俺は、自室として使っていた部屋に入る。

殺風景な部屋だ。俺の私物が片付けられたわけではなく、昔からこうなのだ。

10畳ほどの和室に本棚が2つと机が1つ、それだけだ。

本棚の中も学校と習い事関連、後は寺社仏閣関連の書籍が数冊だけ。

自室はただ寝るだけの場所だったのでこんなもんだ。

片付けないで残しておいてくれた、というよりは部屋が余っているから放っておいたつてところだろう。

部屋の中央に畳まれた着物が置かれていたが、俺は無視して、荷物を置くと部屋を出た。

奥の間へ続く廊下を歩く。

ふと、あるものが目に入った。

道場だ。

俺は渡り廊下を歩き、道場に入った。

そして、昔を思い出した。

帰宅〜放蕩息子編〜（後書き）

巧には1ヶ月生まれの早い弟がいますが今回出番はありません。ちなみに年上なのに弟というのは、巧が正妻の子供で弟は妾の子供だから、上下関係をはっきりさせるためにそうだったのでした。

## 4年前1

ばん！と、相手を畳に叩きつける音が響く。

「次！」

俺は今倒した奴を無視して周りの練習生に言った。だが、誰も俺の前には出なかった。

俺は胴衣の襟を正して舌打ちする。

「巧さま、今日はこの辺りにしたらいかがですか」

上野はやんわりと俺を諭した。

俺の習った武道は投げ技を主体にした古武道だ。才能もあつたの  
だろうし努力もした。結果、俺が中学2年になる頃には大人も含め  
て俺より強いのは師匠の上野だけになっていた。

「上野、すみれはどうしたんだ？」

「今日は桃花さまのお側付きです」

「俺の相手になるのがおまえとすみれだけでは練習にならん！」

俺は練習生に挨拶もせず、神棚に礼もせず道場を後にした。そ  
のまま屋敷を出てランニングを開始した。

時折すれ違ふ住民は俺に目を合わせずに軽く頭を下げる。俺はそ  
んな人たちも当然のように無視した。

この街では秋葉は特別な人間だった。なにをやってもいいし、許  
される。

秋葉は選ばれた人間なのだ。

当時の俺はそう思っていた。

いつものランニングコースを折り返し、帰路に着く頃、俺はその  
視線に気付いた。

頬が緩む。こういうことはたまにあるのだ。

俺はランニングコースを外れ、人気のない土手に下りた。

それを合図にわらわらと10人ほどが俺を囲んだ。中には道場で

見知った顔もある。

「なにか用か？」

「巧さん、あんた生意気だよ」

「ああ、よく言われるね、愚民にはそう見えるんだな」

俺は数を頼りに俺を囲んでいる男たちを鼻で笑った。

「一応、聞いておいてやる。秋葉にたて突く覚悟はあるんだろうな？」

この街では7割以上が秋葉と東の関連会社に就職している。秋葉の家と対立するということはこの街から、いや、この地方から出て行くことになる。

「ああ、俺たちは昨日、工場を解雇されてな」

「それで復讐か。そんなことを考えるから解雇されるんだよ」

男たちは一斉に俺に向かってきた。俺は余裕を持って男たちに対する。

1人目の顎に掌底を叩き込み2人目を投げ飛ばす。3人目は小手投げで転がし、4人目の眉間に拳をめり込ませた。

そして、5人目に対する時、それは起きた。突然目の前が赤く染まった。そして、自身が後ろから後頭部を殴られている映像が浮かぶ。

時詠みだ。

今まで命の危険に触れる機会がなかったからだろう、これが俺の能力が初めて発現した瞬間だった。

俺はとっさに身を屈めた。空気を叩く音が過ぎ去った。振り返ると、男がスパナを持っていた。こんなもので後頭部を殴られればそりゃあ死ぬな。

「危ねえだろうが！」

俺は男の腕を取り、思い切り回した。乾いた音がして男の腕は折れ、地面に落ちた。情けない悲鳴を上げて転がっているスパナを持つていた男を見て、残りの5人はたじろいだ。

俺は、急に始まった刺し込む頭痛に軽く目眩みを起こした。

頭を一度振って頭痛を追い出すと、残っている男たちに言った。

「まだやるか？」

その中のひとりの男の行動は明快だった。拳銃を取り出したのだ。「数を頼まなければなにもできない雑魚に人を殺す度胸があるのかよ」

俺はこの時、集団心理というものの理解が浅かった。人は、一人ではできなくても群れば気が強くなるのだ。

拳銃を持った男は周りに自分の度胸を見せ付けるように引き金に力を入れた。

俺は内心焦った。

そして、今日二度目の時詠みが発動する。

視界が赤く染まり、銃弾の軌跡が見える。

撃つ弾は2発、タイミングもわかった。

一発目を俺は身体を逸らしてかわし、2発目を屈んでかわす。そして、発砲者に近づくと即頭部に上段蹴りを叩き込んだ。

残りの4人はそれを見て逃げ出した。

今なにが起こったのか俺には理解できなかったが、その時は頭痛が激しくて思考を放棄した。

俺は、よろけながら秋葉邸に帰った。

## 4年前2

あれから1週間が経った。

俺は特に何するでもなく日常に戻っていた。首になった工員に囲まれたことは誰にも言っていない。突発的なアクシデントとしてまあ楽しめた、その程度に思っていた。

「巧、今日の予定は？」

放課後、桃花に声をかけられる。俺の通っていた学校は幼稚舎、小中高から大学までくっついていて一貫性の私立だ。

小学校から孤立している俺に声をかけるのは桃花かすみれぐらいのものだった。

「いつも通り。今日はお茶と英会話だったかな」

「たまには私に付き合いなさいよ、おばさまの許可も取ってありますからね」

俺は家に依存する手前、親には逆らえない。そのことを桃花は心得ている。

「ああ、わかった。それで、なにするんだ？」

「この間封切になった映画、一緒に見ましょうよ」

桃花に付き合うのも義務のひとつだ。正直に言えば嫌ではなかったしな。

俺は桃花と後で駅前で落ち合う約束をして秋葉邸に帰った。

「巧さま、お館さまがお呼びです」

秋葉家の主人、つまり俺の親父はお館さまと呼ばれる。時代かかった言い方だ。

俺は制服を脱ぎ、邸宅内での正装である紋付の着物に着替えて親父に会いに行った。

「父さん、巧です」

「ああ、入れ」

俺は障子を開けて親父のいる奥の間に入った。

俺の親父は背だけは高い、神経質な官僚タイプの人間だ。  
プラスよりマイナスを見つけることに重点を置き、相手を非難する。

当時から俺は親父より上野に懐いていた。しかも、あの頃は秋葉の家を絶対視していたから、親父がパーティーなどで誰かに媚びへつらっているところを見て軽蔑していたところがある。

なぜ家と同じように他所でも振舞えないのか。まあ、当時の俺は子供だったというよりは幼稚で、世間を理解できてなかったわけだ。「なにか御用ですか？」

「ん、最近なにか変わったことはないか？」

「いえ、特には」

親父は、無駄話ともいえる当たり障りのないことを質問してきた。今考えればこれ自体が変調だったのだ。

他所の家は知らないが、秋葉家では家族と顔を合わせないことなど珍しくない。実際このとき親父と顔を合わせたのは1ヶ月ぶりだった。

「父さん、特に用がないのでしたらこの辺で。実は桃花と待ち合わせをしているんです」

「ん、ああ、そうか。行っていいぞ」

親父は追い払うように俺に手を振った。

俺は一礼して奥の間を出た。

桃花との待ち合わせの時間が迫っていることもあり、俺は着物のまま玄関に向かった。

俺はそこにいた上野に声をかける。

「上野、天気悪いけど、これから雨は降るかな？」

「はい。降水確率は90パーセントを超えていますから、傘をお持ちになるのがよろしいかと」

「そうか。いや、いいや。帰りは迎えに来てくれ。それじゃあ行ってくる」

俺は玄関を出た。だが、上野に呼び止められる。これも珍しいこ

とだ。

「巧さま」

「ん？なんだ？」

「どうかお気をつけて」

俺は軽く手を振って心配性の上野に答えて、秋葉の家を出た。

これから実に4年間、俺は帰宅しないことになるのだった。

## 4年前3

天候は刻一刻と悪くなっている。

行きに雨に遭わなければいいと思っていた俺は、上野の言うことを聞いておけばよかったと後悔しながら走った。

そして、その視線に気付いた。

いつものような下から見上げる卑屈なものではなく、上から見下すような殺意。

俺は多少戸惑いながらもそのまま走り続けた。

そいつは、気がなくなっただのを見計らって、俺の前に姿を現した。

無精ひげを生やした、薄汚れたコートを着た男だった。両手をポケットに入れ、はれぼったい目を俺に向けていた。

「秋葉、巧か？」

「あんたは？」

「俺はマニゴルドのエクサーシス、駒込<sup>こまごめ</sup>だ。おまえ、ストウレーガか？」

エクサーシスはマニゴルドの第6位だが、当時の俺が知る由もない。

「わかる言葉で話してくれ。なにが言いたいんだ？」

駒込と名乗った男は右手をポケットから取り出した。

その右手には拳銃が握られていた。見覚えがある。それは、1週間前に俺を襲った男が持っていたものと同種だった。

「銃弾をかわしたんだってな。俺にも見せてみるよ」

俺は気付いた。拳銃に乾いた血がこびりついていることに。それは、駒込のものではなかった。

「……拳銃の持ち主を殺したのか？」

「ああ、おまえのことを聞くのに金を要求されてな。黙って言うことを聞いていれば死なずにすんだのにな」

駒込はくつくつとくぐもった笑い方をした。俺はそのとき恐怖よりも嫌悪のほうが勝っていた。

駒込を観察する。鍛えられているのは立ち居振る舞いでわかる。銃を差し引いても厄介な相手だった。

俺は時間稼ぎに駒込に話しかけた。

「ストウレーガってなんだ？」

「害虫だよ。人類社会にはびこる、な。マイノリティでありながらマジョリテイにたて突く、救いようのない屑どもだな」

と、そのとき駒込は俺から目を逸らし上を見た。雨が降ってきたのだ。

唯一の隙だ。俺は逃げ出した。ここからなら秋葉邸は近い。

「無駄だ！逃げ場所なんてねえよ！」

駒込は後ろから撃つこともなくそう言った。その意味はすぐにはわかった。秋葉邸はまだ夕刻だというのに門が閉まっていたのだ。

「俺だ！開ける！」

俺の怒鳴り声に対する反応はすぐに返ってきた。

「巧さま、門をお開けすることはできません」

声は門の内側から聞こえる。上野だ。

「上野？どういっつもりだ！」

「巧さまは本日を持って秋葉家とは関係がなくなりました。どうかご自由になさってください」

「なんだと！」

「もし扉を乗り越えるようなことをなさるなら私が全力で排除いたします」

上野の強い口調に黙る。上野は言葉を続けた。

「お察しください。巧さまは秋葉家に害悪をもたらすものなのです。親父が言ったのなら前言を撤回することもあるだろう。だが、上野が言った以上、それは絶対だった。

俺は初めて突きつけられたことの大きさに愕然とした。

「せめて状況を説明してくれ」

「できません。はやくここから立ち去りなさい。秋葉の家に害悪が及ぶ前に」

俺は一步後ろに下がった。門のひさしから外れ、雨に濡れる。

そんな俺の肩を叩く右手があつた。駒込だ。

「な、言つたる？面倒かけさせないで大人しく死んでくれよ」

俺は拳銃を握っている駒込の右手を掴むと、思い切り投げ飛ばした。

駒込はとつさのことに反応できずに倒れる。

俺は拳銃を蹴り飛ばした。

「てめえ！」

立ち上がり殴りつけてくる駒込の顎に掌底を決める。

駒込は顎を押さえながらたたらを踏んだ。だが、顔は笑っていた。

「へへ、おしいな。まだ若いのにこれだけやれるんだから。ストウレーガじゃなかったらスカウトするんだが……」

駒込は左手をポケットから抜くと、思い切り振り上げた。反射的に下がった俺の髪を数本散らす。

駒込の左手は、義手だった。

指先に刃物が付いている、シザーハンドつてやつだ。

当時の俺は実戦の間合いを知らない。義手を振り回す駒込に圧倒された。

俺は状況を好転させるものを探して周囲を見渡した。俺の前、駒込の後ろに拳銃が落ちていた。

だが、駒込の義手をすり抜けて拳銃を拾うなど不可能だ。

「この後、この家の人間も皆殺しにしてやるよ。なあに、おまえと  
いう穢れを出した家だ。誰も文句は言わねえよ！」

俺は決心した。こいつは倒さなければならぬ。そのためにはこいつの義手を潜り抜ける必要がある。

そのためには、速く動かなくてはならない。

はやく、早く、速く！

そして、俺の時伏せは発動する。

その時できたのはコンマ以下の秒数だけだった。だが、駒込には俺が消えたように見えただろう。

駒込の義手は空を切り、俺はスライディングをするように駒込の下を潜り抜けた。

駒込は慌てて振り向いた。俺の手には拳銃が握られている。

「へ、当たり前じゃねえか！ストウレーガは地獄へ落ちろ！」

「うるせぞ、おっさん！」

俺は銃を撃った。銃弾は義手に当り弾かれる。

駒込は、俺に接近すると再び斬りかかってきた。

だが、そこはもう俺の間合いだ。

俺は義手を外に捌き、駒込に肉薄する。みぞおちに拳を叩き込み、顎に肘をぶつける。

よろけながらも、斬りつけてくる駒込に、俺は、練習でも喧嘩でもやったことのない、相手を殺すための投げを放った。

駒込を首から落とす。ぐき、と嫌な音を立てて駒込の動きは止まった。

荒い息を整えるために深呼吸する。

途端、むせ返り、吐血した。この時はまだわからなかったが時伏せの副作用だ。この時は呼吸が乱れているときに使ったから副作用も大きかったのだ。

「へへ、ストウレーガ、人類社会にはびこる害虫。そのうち思うぜ、ここで死んでおけばよかったってな」

動けないのだろう、駒込は目だけを俺に向けて言った。

俺は拳銃を駒込に向けた。駒込はなお笑っている。

「殺せよ。いい経験になるぜ」

「ああ。おまえは俺の守りたいものに手を出そうとした。その落とし前はつけてもらおうぜ」

俺は、引き金を引いた。

俺は、雨の降る天を仰ぎ、一度だけ、今まで守りたいと思っていた、そして、今まで依存してきた秋葉の門を見て、その場を後にした。

#### 4年前4

雨で濡れた着物とあざだらけの身体を引きずって、俺は駅前に向かった。

通行人は誰も俺を見ない。俺は、遅まきながら気付いた。秋葉の人間は、街の人に敬意を払われていたのではなく、無視されていたのだ。

秋葉の家を通さなければ交友関係は絶無である俺の頼れる人間は桃花だけだった。

駅前に行けば桃花がいる。

そんな淡い期待を持って俺は重い体を引きずった。

だが、駅前に桃花の姿はなかった。

代わりに小柄な少女がひとりで立っている。すみれだ。すみれは俺を見つけると駆け寄ってきた。

「巧さま！」

「すみれ、桃花は？」

すみれは傘で表情を隠した。それで、なんとなくわかってしまった。

「桃花さまはいません。っ…、申し訳、ありません」

「言い辛いかもしれないけど、はっきり言ってくれ。それが務めだろ？」

すみれは涙声で言った。

「とうか、さまと、たくみさまは、金輪際、他人だと。もし見かけても、ぜったいにこえを、かけるな、と」

すみれはその場にしゃがみこんだ。

嫌なことをさせたなあ。ま、ショックはショックだが、桃花がここにいないことで覚悟は出来ていた。欲を言うなら直接言って欲しかったな。

「わかった。すみれ、ご苦労様。帰っていいよ」

俺はすみれに背を向けた。

さて、当てがなくなつたがどうしよう、と、やけくそ気味に考え始めたときだつた。

すみれは傘を放り出し、俺の背中に抱きついてきた。あざを押されて痛かつたつてのは内緒だ。

「おい、すみれ」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

すみれは俺の背中であいていた。俺はすみれに向き直り、すみれの顔を覗き込んだ。

「なにを謝っているんだ？ おまえのせいじゃないだろ？」

「ごめんなさい！ わたしには、巧さまを助けられない！ なにもできない！」

俺は、この言葉に救われた。

秋葉の家も、桃花も、すみれと同じだつたのだろう。

どうやつても俺を守れない。だから、仕方なく俺を切つた。

この言葉がなければ、俺は秋葉の家も桃花のことも、陰湿にうらみ続けたかもしれない。

俺は雨で濡れた着物ですみれを抱きしめた。すみれの温もりが伝わる。

「俺は大丈夫だから。おまえはなにも心配するな」

「でも、でも！」

俺はすみれの涙で濁つた目を見た。

「すみれ、大丈夫だから」

瞳にキスをする。俺にとってすみれは佳苗以上に身近な妹のような存在だ。

「……はい！」

すみれは嗚咽を上げているものの、気丈にも頷いた。

「桃花を頼むな。あいつはおまえがいないとなにもできないから」

「はい、はい！」

俺はもう一度だけすみれを抱きしめて、離れた。

「じゃあな、すみね。俺は、行く」

元気でやれ、とか、幸せになれ、とか色んな言葉が浮かんだが、どれも陳腐に思えて言うのをやめた。

ただ、行くと、すみねに伝えられればいいと、そう思った。

こうして俺は秋葉の家を出た。その後、紆余曲折あつて黒金に入り、七草学園に転入することになるが、秋葉の家が派遣した弁護士が俺を見つけ出して、財産相続破棄の書類にサインをしたのは転入する1ヶ月前のことだった。

## 家族のそれぞれ

「巧、ここにいたのね？」

誰もいない道場を眺めていた俺に背後から声がかけられる。桃花だ。横にはすみれがいる。

「なんだ？来てたのか？」

「ええ、あなたが帰ってくるんだもの。当然でしょう？」

桃花は例の作り笑いをした。俺にまで見せるってことは、もう顔に張り付いているんだな。

「巧さま、奥様がお待ちです」

「ああ、すみれ。わかった。行くよ」

神前に一礼すると、俺は桃花の後に従って奥の間に向かった。

桃花の後ろを歩いているすみれに近づく。

「すみれ、ちゃんと練習しているか？」

「はい、もちろんです。桃花さまの護衛も私の務めですから」

「明日帰る前に手合わせしてやろうか」

「よろしいのですか！」

すみれはいきなり声を荒げる。

桃花は立ち止まり、すみれを一瞥した。すみれは頭を下げる。

桃花が再び歩き出すと、すみれは俺にだけ見えるように舌を出した。

「おばさま、巧を連れてきました」

「お入りなさい」

俺と桃花は奥の間に入った。すみれは外に控えている。奥の間には、上座に中年の和服姿の女、これが俺のお袋だ、と、佳苗がいた。

「巧さん、久しぶりですね」

「ああ、4年ぶりかな」

敬語を使わない俺に佳苗は眉をしかめた。お袋は、さすが年の功というべきか表面上に変わりはない。

俺は胡坐をかいた。

「元気にしていましたか？」

「ご心配なく。楽しくやっていますよ」

「そうですね。あなたは秋葉の人間なのですから節度を守り……」

俺は足を投げ出して話を遮った。

「用件はなんですか？」

「お兄さま、お母さまがお話している最中に遮るなんて無礼すぎます！」

俺は佳苗を見た。先ほどのことが尾を引いているのか、佳苗はわずかに仰け反った。

秋葉家は親父で6代目になる。確か3代目から東家から妻を迎える風習があり、近親婚が続いている。お袋も元は東の人間だ。

東の家は秋葉の分家筋にあたり、その人間も秋葉と似たようなものだ。

安っぽい権威主義者ってこと。

俺のお袋も秋葉の家紋を絶対視する権威主義者だった。

自分たちの狭い箱庭で権威を振り回すのならいいが、もはやその外にいる俺にそれに従えと言われても不快なだけだ。

「……話はお館さまが帰ってからにしましょうか」

「助かる。厄介ごとは一回で済ませたいからね」

俺は立ち上がって、そのまま奥の間を出た。外にはすみれがいた。俺はすみれに肩をすくめ、その場を離れた。

離れは、その名の通り、母屋から少し離れたところにある。屋敷の隅にある東屋だ。前には錦鯉のいる池があり、裏は竹林が塀まで続いていた。

新橋は池を覗き込んで錦鯉を見ていた。俺に気付くと手を振ってくる。

「新橋、今晩は鯉の洗いにするか？」

「留美先輩じゃないんだからいつも食べ物のこと考えているみたい

に言わないでください！」

「なんだ、違ったのか」

「……鯉こくがいいです」

俺と新橋は一緒に離れに入った。中には恵比寿がいる。

新橋に聞くと正志は部屋で寝ているらしい。今日は朝一の電車で寮に戻ったから眠いとのこと。その後ここまで来ているんだから恋する男子はなかなかハードだ。

「待たせたな」

「あ、秋葉。あんた、いいところのお坊ちゃんだったのね」

「まあな。退屈してないか？ やることないだろ」

「大丈夫よ。それなりに時間つぶしているわ。それで、どうだった？ 感動の再会はできた？」

「ああ、まあね」

表情に出たのか、俺の顔を恵比寿は訝しそうに見ている。仕方ないな。俺は少しだけ本音を話した。

「和解の必要を俺が認めてないから」

「あんたも頭が固いわね。家族が仲良くするのは当たり前でしょ？」

「ひとそれぞれ、さ」

俺は座布団を枕にして寝転んだ。

そして、しばらくするとそのまま眠りに落ちた。

## 女のそれぞれ

「寝ちゃいましたね」

しばらく秋葉巧の寝顔を眺めた後、新橋美異は恵比寿洋子に言った。

「疲れていたんでしょ。虚勢張つても緊張していたのよ。昨日の私がそうだったから」

洋子は寝転がる。それに倣うように美異も畳の上で横になった。

「明日までに秋葉もご家族と仲直りできるといいんだけど」

「それってそんなに重要なことですか？ 先輩の言っていた通り、家族のあり方なんてそれぞれだと思えますけど」

「それはそうよ。もし親がいなかったってそれは非難されることじゃないもの。でも、うまくいくならそれにこしたことはない。そうでしょ？」

「私にはわかりません。私は家族の情なんてもの、知りませんから」

「白金の『世界』がどんな幼少期を過ごしたか、興味があるわね」それを聞くと美異は表情を一変させ、冷徹な目で洋子を見た。

洋子は美異の威圧を受け流すように微笑んでいる。

「知っていたんですか？」

「まあね。私は寮のメインコンピューターにアクセスすることがあるから」

「秋葉先輩は？」

「知っているのは私と芳樹さん、あと、久菜先輩くらいよ。秋…、巧は知らない。もっとも、あいつは知っていても気にしないだろうけど」

美異は身体を起こした。

「それを今私に明かす理由は？」

洋子はうつぶせに寝返り頬杖をつく。

「あんたとはとことんやり合うことになりそうだから。秘密を知っているのはフェアじゃないでしょ？」

「なんのことです？」

洋子は横目で巧を見た。美異には、それで、それだけでわかった。「そろそろ誤魔化すのも飽きてきたからね、自分の気持ちに」

睨む美異、微笑する洋子。

ふっと、美異は肩の力を抜き、畳に倒れこんだ。

「言っておきますけど、茨の道ですよ。巧さん、自分のことには久菜先輩並に鈍いから」

「知っているわよ。あんたより付き合い長いんだから」

美異は少し考えて、洋子に教えることにした。

「そうですね。私も洋子先輩に教えます。私が白金を離れたのは、あなたがいたからなんですよ」

「？なんでそんな大事が私のせいなのよ？」

「実は、私と巧さんはずっと前に会っているんです。私はずっと巧さんを見ていました。だから、付き合いは私のほうが長いんですよ」

美異はくすくすと笑った。

「ここでの巧さんは一人でした。東桃花って人はいたけど、あの人は体裁上の付き合いだってわかったから。だから私は遠くで見ているだけで満足できたんです」

美異は、孤立する巧を見て自分のみが巧を理解していると優越感に浸っていた。

巧がストウレーガだとわかってからは、その思いはさらに募り、狂喜した。

だが、その狂喜はすぐに冷めることになる。

それは、巧が七草学園に転入したからだった。

七草学園で巧は社交的になり友達を作るようになった。

秋葉の家に依るような態度は当然学園では通用するはずもなく、それは巧なりの処世術だったのかもしれない。

巧は変わった。

美異は焦った。親しく付き合えば巧の優しさは伝わる。今まで独占していると思っていた巧は、もはや美異だけのものではなくなっていた。

そして、その陰に同じストウレーガの存在、洋子や久菜たちのことを知ったとき、美異の焦りは行動に変わっていた。

「我慢できなくなっただんですよ。巧さんの側に私以外の誰かがいるのが」

「そんなことでねえ。それで、今は？」

美異は少し考えて、洋子に微笑んだ。

「恋愛は難しいです。殺したら終わりってわけにはいかないから」  
洋子は腹這いで巧に近づくと、頬を突いた。

「しかし、お互いに見る目はないわね、こんなのがいいって思うんだから」

巧は眉間に皺を寄せると寝返り、洋子に背を向けた。洋子の対面には美異がいる。

「わかっているんですか？ あなたの話をしているんですよ？」

巧は口を動かしながら仰向けに寝返った。女2人は男を挟んだまま、笑いあった。

## 夕食

見慣れぬ天井を眺めながら目を覚ます。今、俺は秋葉邸に戻ってきているんだと思いつき、1秒かかった。

日は暮れている。俺は、寝癖の付いた髪を掻き乱しながらゆっくりと上体を起こした。

「……、うお！」

左右を確認すると新橋と恵比寿が寝ていた。なんか、距離が近い。いつの間にか俺たちは川の字で寝ていた。こんなところ正志に見られたら面倒なことになる。

俺はその状態から逃げ出すように立ち上がり、部屋の明かりを点けた。

「巧さま、いらつしやいますか？」

縁側から使用人に声をかけられる。俺は縁側に顔を出した。

「ああ、ここにいますよ。」

「あ、すみません。玄関ではご返事がなかったものでこちらに伺いました。」

まだ年若い使用人さんは恐縮する。

「悪い。寝ていたからね。それで、なんの用？」

「夕食の準備ができました。こちらにお運びしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、頼むよ。それで、親父はまだ帰宅していないのか？」

「お館さまはもうずいぶん前にお戻りですよ。」

そう言って使用人さんは恭しく頭を下げて去っていった。

しかし、親父は帰っているのに俺を呼びに来ないな。まさか無理やりここに呼び出しておいて俺から挨拶に来させる気でもないだろうに。

俺は、なにか違和感を覚えた。

夕飯は懐石料理だった。鯉こくはなかったが、新橋はおいしそう

に箸を運んでいる。

「洋子先輩。この煮物、おいしいですよ」

「あ、これはうまいわね。よく味が染みてる」

心なしかこの2人、仲良くなってる。俺がいない間になにかあったかな？ 善哉善哉。

「おい、巧」

「ん？なんだ、正志」

「なんかおまえ、恵比寿と仲良くなってないか？」

「俺と？ いつも通りだろう？」

俺たちは夕飯が終わると食い終わった食器を厨房に運んだ。寮ではいつもしていることだ。どうでもいいことながら食器洗いは当番制でやっている。

「た、巧さま！ そのようなことは私どもでやりますから！」

「ああ、いいよいいよ。このぐらいなら俺たちでもできるから。」  
馳走様」

「……、本当に巧さまですか？」

年離れた料理長は訝しげに俺を見る。どういう意味だ？

「巧さまにそのようなこと言って頂けたのは初めてですから」

「ああ。これでも外で苦労してきたからね」

世間の荒波に揉まれて俺もまるくなったのだろう。昔の俺のような傲慢な態度は世間一般では通用しなかったわけだ。

もつとも、今の俺が無理しているってこともないわけで、いつも眉間に皺を寄せていたような昔よりずっと自然体にいると思う。

「巧、あんたかなり最低だったのね」

「否定できないな、残念ながら」

俺たちは厨房の人たちと少し談笑した。こんなことは確かに昔にはなかったことだ。

離れに戻るために日本庭園を横切る。久しぶりだからか、やけに静かに感じる。微かな違和感。その静寂を引き裂くように女2人は喋りまくっている。

「巧、巧！ちよつと、聞いているの？」

「あ、悪い。聞いていなかった」

「まったく、ちゃんと聞いてなさいよ」

俺は、そこで正志がさつきから俺を睨んでいる理由に気付いた。

「なあ恵比寿。なんで俺を名前で呼んでいるんだ？」

「なにか文句ある？」

恵比寿は俺を見る。目つきがきついたため凄まじると迫力がある。

「いや、文句はない、けど……」

俺の言を聞き、恵比寿は勝ち誇ったように笑った。

## マービン・クルード再び

俺たちが離れに戻ると玄関に人がいた。すみれだ。

「どうしたんだ、すみれ」

「あ、巧さま」

すみれは俺に駆け寄ってきた。ぶつかると寸前、10センチの距離ですみれはぴたりと止まった。すみれは俺を見上げる。

「巧さま。このままここを立ち去ってください」

「なんだよ、藪から棒に」

「その、この屋敷は囲まれています」

その言葉で俺たちにスイッチが入る。こういう事態には、慣れてるのだ。

「……マニゴールドか？」

「家人には屋敷内から出るなど、お館さまから厳命がありました」

「ちよつと、それって家絡みで私たちをはめたってこと？」

「いや、おまえたちは勝手に来ただけ」

「そんなことを言ってる場合じゃないでしょ！」

まあ、そうなんだけど。携帯で連絡を取っていた正志が舌打ちをした。

「駄目だ。繋がらない。フォートファイブスのほうも襲撃されてるかもしれないな」

「……すみれさん。あなたはなんで私たちにこのことを教えてくれたの？」

すみれは恵比寿のきつい目を真正面から受け止めて、言った。

「私は巧さまをお慕いしていますから」

「俺もすみれのが好きだよ。可愛い妹だからな」

俺に振り返ったすみれはなぜか複雑な顔をした。ため息を吐く恵比寿。新橋は親しげにすみれの肩を叩く。

「すみれさん。私たち、きっと仲良くなれますよ」

? 女つてのはよくわからない思考をする。

「とにかくここを抜け出そう。恵比寿、新橋、正志。おまえらは裏から屋敷を抜ける。竹林を突っ切れば塀に突き当たるはずだ」

「待ち伏せされてるんじゃないか?」

「ああ、当然そうだろう。だが、あそこなら恵比寿がいればなんとかなるよ」

「巧はどうするのよ」

「俺はここに残るよ。ここまで来て逃げるわけにも行かないからな」

「秋葉先輩、私も残りましようか?」

「いや、新橋は正志たちと行ってくれ。馬場先輩たちが心配だ」

「わかりました」

俺とすみれは竹林に入る恵比寿たちを見送る。

「先輩、お気をつけて」

「ああ。みんなを頼むな」

新橋は笑顔で答えて竹林に入っていった。残ったのは俺とすみれだけだ。

「さて、と。すみれ」

「はい?」

俺はすみれの腹部に拳を叩き込んだ。すみれは一瞬だけ目を見張り、気を失った。

俺はすみれの身体を抱き上げて、離れに寝かした。これから起る殺し合いはすみれにはきついだろう。

俺は離れを出た。そして、大声で叫ぶ。

「そろそろ始めようぜ!」

それに反応するように出てくるマニゴルドの騎士たち。10、20、50、100人はいるな。裏にも兵を配置しているだろうし屋敷の外にもいるだろうからかなりの数だ。

今夜は月が明るい。月光に照らされて、見知っている騎士が俺の前に出た。

「確か……、マービン・クルード、だったな?」

以前俺がつけた傷は完全になくなり、両腕も付いている。

マービンは勝ち誇った笑みを俺に見せた。

「ストウレーガは家族からも見放される、いかに罪深い存在かは理解できたかな？」

「あいにく、そうでもないな」

昨日は恵比寿と家族との和解が見れたしな。秋葉家が違っただけだ。

「どうせ裏から圧力をかけたんだろ？マニゴルドの支援団体は世界的大企業も少なくないからな」

「君の親は快く今回のことを承諾してくれたよ。君のような穢れを出したことを悔いているんだろうね」

「権力に依るものはより大きな権力にかしづく。それは必然だ。それが嫌なら権力の外にいるしかない。俺たちみたいにな」

「あはは！ マイノリティらしい考え方だね！ それがどれだけ周りに迷惑をかけているのかわからないのかい？」

「黙って従えっというんなら、やってみればいい。だが、俺たちは無抵抗主義は気取らないぜ」

「ああ、わかっているよ。だから私たちが強制執行するんだよ」

マービンは片手を挙げた。騎士たちは殺気立った。俺も足に力を入れる。

「それでは滅させてもらうよ、正義の名の下にね！」

マービンは腕を振り下ろした。

それを合図に騎士たちは俺に向かってきた。

## 『天秤』

新橋美異と恵比寿洋子、原正志の3人は竹林の中を走った。

塀までの距離は100メートルもないだろう。その中間まで来たところで美異は急に足を止めた。

「ちよつと、どうしたのよ、美異！」

美異は手で洋子を制した。洋子は美異の背後の人影に気付いた。人影、『鷲』は美異に言った。

「失礼いたします。『正義』に関して報告があります」

「……どうしました？」

「『正義』が憶良市に入りました」

「フォートファイブは？」

「現在、マニゴルドの襲撃を受けています」

美異は舌打ちをした。

「洋子先輩。少し状況が危険です。私、先に行きますね」

「え、ちよつと、みこ……」

美異は周りの重力を軽くして、一気に飛び上がった。竹林を突きぬけ、そのまま秋葉邸を出る。

洋子は飛び去った美異を見上げた。視線を戻したときには『鷲』の姿もない。

「な、なんだったんだ？今の」

「さあね」

洋子は、正志の突然だが当然の疑問を軽くあしらひ、周囲を警戒した。

おかしい。美異の行動は目立ったはずだ。それでも、当然あるはずのマニゴルドからの襲撃はない。

洋子は竹に触り、竹林内を探った。

50を超える死体がある。

これはマニゴルドの騎士たちのものだった。

そして、生きているのは3人。

洋子は竹から手を離して、藪を払った。

そこには、隠されているようにマニゴルドの騎士がいた。

「なんだ？死んでいるのか？」

正志は足の先で騎士の兜を蹴った。兜は外れ、苦悶の表情が現れる。

「ごぼりと、口から液体がこぼれる。

その騎士は、溺死していた。

洋子は意を決して叫んだ。

「いるのはわかってているのよ、出てきなさい！」

竹林の中に生存者は3名。ひとり洋子、ひとりは正志。すでに美異はいない以上、もうひとりがここにいるはずなのだ。

それは、最初はただの水溜りだった。その水溜りはぶくぶくと泡立つと、ゆっくりと人型になっていった。

「よく気付いたね」

人型は、小柄な黒人の女になるとそう言った。

「……白金ね」

「ああ。『正義』に仕える使徒、『天秤』だ。あなたたちが死ぬまでの短い間、覚えておきな」

『天秤』は厚い唇を吊り上げた。

「『正義』？『正義』がなんの用なのよ」

「私の目的は美異さまを憶良市に行かせること。邪魔なマニゴルドには死んでもらったけど、あなたたちに用はな……」

『天秤』の言は止まった。

『天秤』はゆっくりと自分の胸を見る。そこには、地から伸びた竹が突き刺さっていた。

「私たちもあなたに用はないわ。どきなさい」

『天秤』は洋子を見ると、にやりと笑った。ずるりと、竹が『天秤』の身体をずれ、抜ける。

「……液状になっているの？」  
「あんだ、恵比寿洋子かい？ あの『プラントパペティア』の  
「白金に名前が知られていても嬉しくないわ、ね！」  
洋子は跳ねた。『天秤』が洋子に飛び掛ったのだ。  
自らの意思で妨害するように竹や藪が『天秤』の進行を阻む。  
だが、『天秤』は障害物を避けることもなく洋子に迫った。

## 『天秤』 VS 『プラントパペティア』

『天秤』は障害物を避けることもなく洋子に迫った。

「つち！」

洋子がわずかに上を見た。それに呼応するように竹林が揺れ、大量の笹の葉が落ちてくる。それが『天秤』の身体を切り刻んだ。

「無駄だよ、そんなの！」

笹は『天秤』の身体の中に沈み、ゆっくりと落ちていった。

急に洋子は正志を見る。

「原！熱弾を！」

今まで見ていただけだった正志はその声で我に返り、熱弾を『天秤』に放り投げた。

熱弾自体には発火性はないが、熱段は笹の葉を媒介として一気に燃え上がった。

笹の葉に囲まれた『天秤』は炎に包まれる。

『天秤』の足が止まった。

『天秤』は、しかし、事も無げに炎の中から出てきた。

身体のうちこからは泡が沸き立っている。

『天秤』の身体はやがて泡も収まり、元通りになる。ダメージをまったく受けていなかった。

洋子は正志に近づいた。

「原、熱弾を直接叩き込める？ 私が囿になるから」

「あ、ああ。やってみるよ」

洋子は竹から枝を一本折り、一振りした。枝は棒状の鞭へと変わった。それを洋子は『天秤』に叩きつける。

鞭は微かな抵抗と共に『天秤』の身体に飲み込まれ、そのまま抜けた。

洋子は再び『天秤』を打ちつける。

「利かないんだよ、そんなもの！」

『天秤』は洋子の顔を掴んだ。

洋子の口と鼻に粘着質の液体がまとわりつく。液体が洋子の体内に流れ込まれそうになった時、正志は『天秤』の腕に熱弾を撃ち込んだ。『天秤』の腕はぶくぶくと沸き立ち、洋子の顔から離れた。

正志はむせ返る洋子の背中を撫でた。

「大丈夫か、恵比寿！」

「げへ、ごほ、なんであいつの身体にぶち込まないのよ！」

「え、いや、だって……」

「はあ、はあ。次はしつかりやってよ」

洋子は立ち上がり、『天秤』を見た。『天秤』の身体には変化はない。

「おしかったね。だけど私の身体は水じゃあないんだ。この程度じや蒸発しないよ」

「それなら蒸発するまでやってやるわよ！」

洋子は前に出ようとした。その肩を正志が押さえる。

「なんなのよ、もう！」

「俺に考えがある！」

正志は洋子に作戦を伝えた。洋子は少し考えた後、それを採用した。

「作戦会議は終わったかい？」

「ええ、さっそくやらせてもらおうわ」

そう言う洋子の周りを笹の葉が覆う。『天秤』から洋子と正志の姿が消えた。

「なんだ、逃げるのか！ させないよ、せっかく面白くなってきたんだからさ！」

『天秤』は笹の葉の中に飛び込んだ。だが、そこには2人はいなかった。そして、笹の葉は一気に燃え上がった。

「またこれかい。言ったる、利かないってさ！」

『天秤』は掻き分けるように炎を消していく。

「なるほど、ね。原の言うとおりだわ」

「やっとわかったかい？ おまえらの攻撃は通用しないんだよ」

「ええ、今のままでは、ね」

『天秤』は背後に気配を感じた。正志だ。だが、『天秤』は正志を無視した。正志は『天秤』の背中に能力の弾を撃ち込む。

「懲りないねえ、利かないんだよ！」

『天秤』は振り返りざまに正志を打った。正志はそれをかわし、胸に能力の弾を撃ち込んだ。

「面倒だ！おまえから殺す！」

『天秤』の両手が正志の顔を覆った。正志は呼吸を止められながららる発めを撃ち込んだ。

『天秤』はそこで初めて自分の身体の異変に気付いた。

『天秤』の腕に、地から伸びた竹が突き刺さった。

竹は『天秤』の腕をすり抜けることもなく、粉碎する。

むせながら正志は『天秤』から離れた。

洋子は、動かない、いや、動けないでいる『天秤』に背後から寄った。

「なにを、したんだい？」

洋子は『天秤』を無視し、正志に言った。

「ご苦労様、原」

「ごほ、ごほつ。ああ、うまくいったな」

正志は洋子に言った。

『天秤』の身体は液体だから物理攻撃をすり抜ける。ならば液体でなくせばいい。正志の能力は熱弾に見られる熱量の変化だ。それは、温度を上げるだけではない。冷やすことも出来るのだ。それが正志の切り札、冷弾だ。

『天秤』は、冷弾で凍らされたのだった。

洋子は『天秤』の肩を触った。

「うん、硬い。これなら壊せそうね」

「ま、まで！」

「駄目よ。あなたは割れなさい！」

『天秤』の顔が引きつる。八方から竹が突き刺さり、『天秤』は粉々に砕けた。原型が残った下半身はぐらりと揺れ、倒れて割れる。

「ふう、終わったわね。原、大丈夫？」

「ああ、俺、役に立っただろ？」

「？ ええ、助かったわ」

「そうだろう」

正志は満足そうに頷いた。洋子は正志を訝しそうに見る。巧がこの様子を見れば「黙っていればいいものを……」と正志を諭しただろう。

「さ、行くわよ。寮のみんなが心配だわ」

「ああ、っと」

走り出そうとした正志はよろけた。

「？どうしたのよ。行くわよ」

「すまん、ちよつと立てない」

洋子は大きいため息を吐いた。

おそらく堀の外にはマニゴールドがいるだろう。そんな場所に立てない正志を置いていけなかった。

洋子は一度だけ巧のいる屋敷の方向を見て、正志に手を差し伸べた。

## V S マービン

1人目と2人目を回し、地に叩きつける。3人目の腕を取り関節を決めて振り回し、向かってくる4人目にぶつけた。騎士の腕の折れる感触が伝わる。

「巧くん、君は相変わらず出し惜しむねえ。早く能力を使ったらどうだい？」

「この程度で？ 必要ないな」

俺は斬り込んでくる騎士から剣を奪い、マービンに投げつけた。マービンは側にいた騎士を前に突き飛ばし、盾にする。騎士は胸に剣を突き立て、絶命した。

「ああ、可哀相に。君のせいで死んじゃったよ」

「盾にしたおまえが言うな」

「そうじゃないんだよ。そもそも君がいなければ私も、死んでいる彼らもここに来ることすらなかった。だから彼らが死んだのは君のせいだ。君のせいで彼らは死んだんだよ」

「おまえらマニゴルドと付き合うのは正直疲れるよ」

「まあ、そう言わないでよ、巧くん。ちょっと趣向を凝らしたからさ」

マービンの横から重厚な鎧をまとった騎士が3人現れる。

「彼らの階級はアンゲロイだけど、着ている鎧が特殊だね。君でも楽しめるんじゃないかな」

アンゲロイはマニゴルドの最下級、第9位。ちなみに有象無象の騎士たちは階位外となる。3人の騎士は足元に噴煙をあげ始める。

俺は軽く腰を落とし、敵の攻撃に備えた。

それは、突然来た。

予兆は一瞬、重騎士の足がわずかに浮いた瞬間、俺は横っ飛びに

飛んだ。俺の今まで居た場所を重騎士は一斉に通り過ぎる。

「どうだい、マニゴルドの最新ロボットスーツは？ 君のふざけた能力に合わせて高速機動ユニットだよ」

重騎士は再び俺に突撃するために足元に噴煙を上げる。

ま、この程度ならなんとかなるか。

俺は腰を落として重騎士に構えをとる。重騎士の足が浮く。

俺は、ふつと息を吐いた。

重騎士は吹っ飛んだ。

ひとりは灯籠に激突し、ひとりは地面を跳ねる。最後のひとりは仲間の中に突っ込み、数人を下敷きにして動かなくなった。

「……なにをしたのかな？」

「別に、突っ込んでくる重騎士をいなしたただけだよ。ただ速いだけの直線的な動きで武道経験者をなんとかできると思っているわけじゃないだろ？ しかも、速く動けても中身の人間の反射神経なんてたかが知れてる。少しバランスを崩したただけでこれだからな」

マービンは舌打ちをして、手を上げた。俺を囲んでいる全ての騎士が殺気立った。

俺は落ちている剣を拾う。

「邪悪なるストウレーガ。遊びは終わりだ。滅ぼさせてもらう！」

「口調が変わったな。ま、いいだろう。まとめて相手させてもらうよ」

俺は剣を担いだ。心音を数える。

「それじゃあ見せてやるよ。俺の能力、時伏せをな！」

マービンが手を振り下ろす。

秋葉邸内にいる100を超える騎士たちが一斉に俺ひとりに向かってくる。

俺は時伏せを発動した。



## 上野良治

耳鳴りが始まり、騎士たちはスローモーションになった。

空気抵抗のため身体が重くなる。

俺は手始めに右から斬り込んでくる10人ほどの騎士を殺した。

騎士たちには俺の残像だけは見ることが出来たかもしれない。

10人目の胸に刃こぼれしたセラミックソードを突き立てる頃、最初に倒した1人目が地面に倒れる。

騎士たちは、自分がなにをされているかわからないだろう。

俺は間を置かず剣を拾い、11人目に取り掛かった。

俺は剣を一振りして血糊を払い、時伏せを解除した。

身体を揺さぶるほど心臓が跳ねる。俺は胃からこみ上げてきた血の塊を吐き出した。

実時間は10秒ほどか、全ての騎士は倒れ、庭園内で立っているのは俺とマービンだけになっていた。

俺は剣をマービンに向けた。

「今回は逃がさねえよ」

「ストウレーガ！ 人類社会の敵！ なぜ貴様らは正義に従わない！」

「1億歩譲っておまえらが正義だとしても、従えないようにしてるのはおまえらだ」

俺はマービンにゆっくり近づく。

「この傾いた世界には神の正義による秩序が必要なのだ！なぜそれがわからない！」

「マイノリティであるという理由で差別されている俺たちが宗教的穢れ、差別の必然を認めるわけがないな」

マービンとの距離は1メートルほど、一足の距離だ。

急にマービンはいやらしい笑みを浮かべると、左手を俺に向けた。

俺はそれを剣先で逸らした。

轟音が俺の横を過ぎ去る。指向性爆弾だ。

爆弾を仕込んでいたマービンの左手は吹き飛び、なくなっていた。

「それはもう見た」

俺はマービンを袈裟斬りにした。途中で剣が折れる。

マービンは俺に右手を向ける。

俺は手首を取り、投げ飛ばした。だが、手首はずれ、投げはすかされた。

その時、視界の端に少女の姿が映った。

「なに？これ」

俺とマービンはほぼ同時にその声の主を見た。香苗だ。指向性爆弾の爆発音を聞いて見に来てしまったのか。

マービンは一度俺を見てにやけると、香苗に向かって走り出した。まずい、マービンのほうが香苗に近い！

俺は折れた剣をマービンに投げつける。剣はマービンの背中に刺さったがマービンは足を止めなかった。

マービンの無くなった手首から剣が突き出る。

「きゃあ！」

マービンは剣先を香苗の喉に突きつけた。

「ためえ、それが正義を謳う奴のすることか！」

「はは、形勢逆転だね！」

俺は齒軋りした。香苗を見る。香苗は脅える目で俺を見ていた。

「香苗、じっとしている。俺がなんとかするから」

香苗は涙ぐみながら頷いた。

「ああ、わかっているね。この状況は君にしか解決できない。君が大人しく死んでくれるならこの娘は殺さないであげるよ、約束する」  
心音を数える。鼓動は早い。だが、ためらってはられない。俺は足に力を入れた。

「おっと！」

マービンは香苗の白い喉に剣先を突き立てた。血が一筋流れ落ち

た。

「能力は使わなくてもらおうかな。いくら君が速くても私がこの娘を殺すほうが早いからね」

マービンは笑う。

下卑た笑いだ。

自身では悪意の欠片も感じていない。自身の絶対的な正しさを疑いもしない群体に依存した人間の笑い方だ。とにかく、なんとか香苗から注意をそらさないで。

……その時だった。

香苗とマービンの背後に背の高い男が立つ。

上野だ。

マービンの警戒は、上野が秋葉家の人間だとわかったことで解ける。

そして、それは一瞬で終わった。

上野が無造作にマービンの頭を片手で掴む。そのまま、首を捻じ切り、地面に落とすと同時に頭部を踏み潰した。

赤黒い脳漿は上野の足を汚した。

マービンの頭部の無くなった身体は未だに香苗に剣を突きつけている。

マービンは、結局頭部以外は全て機械で出来ていた。

「お嬢さま。もう大丈夫です」

香苗は上野にそう言われると腰を抜かしてその場にへたり込んだ。俺も大きく息を吐いた。

「上野、助かった」

「いえ。家人を守るのも私の仕事ですから」

上野は俺にまっすぐ対峙している。

俺は眉をひそめた。

その様子を見て香苗が俺と上野を見比べた。

「上野？」

「お嬢さま、お館さまの言い付けを守り、屋敷内にお戻りください」

「え、でも……、巧兄さま？」

香苗は俺を見るが俺は上野から目が放せない。

「上野、どういっつもりだ？」

「巧さまを今晩は秋葉邸から出すなどのお館さまの命令です。巧さま、どうか離れにお戻りください」

「状況を見て言えよ。俺を離れに入れておくのはマニゴールドに襲撃させるためだろう？ それはもう失敗に終わった。俺を押し留めておく理由はもうないはずだ」

「お館さまから命令の変更を受けていません。それに……」

上野は一度言葉を切った。

「ここで巧さまに去られては、巧さまと秋葉家との和解の機会はなくなりです」

「おいおい上野、俺は秋葉家にとって害悪のはずだぜ。和解なんてしないほうがいいだろう？」

「それでも巧さまは秋葉家の人間です」

「はは。それ、4年前に聞いたかったよ」

香苗は雰囲気は圧倒されているのか声も上げられない。

「申し訳ありませんが本気で当たらせて頂きます」

上野は、腰を落とし、ゆっくりと構えた。

## 秘技といい女

「申し訳ありませんが本気で当たらせて頂きます」

「ああ、そうしろ。俺もそうさせてもらうからな」

俺は上野に合わせて腰を落とした。

「残念ですね。巧さまが常体の時に手合わせさせてもらいたかったです」

「……わかるか？」

俺の身体は時伏せの副作用でぼろぼろだ。だが、泣き言も言ってもらえない。

俺と上野はゆっくりと間合いを詰める。

手と手が触れる瞬間、上野が俺の手首を掴んだ。

マービンの機械仕掛けの身体を片手で捻じ切るほどの握力で俺を引き込む。

俺は逆らわずに上野の懐に飛び込んだ。

上野は、急に手を離すと俺から離れた。

「強くなれましたな」

「ああ。これでも実戦には事欠かないんでね」

俺は、前に出た。

拳を打ち合う。

お互いの手の内はわかっている。これは投げにつなげるための、組み手争いのようなものだ。

そう思っていた。

「な？」

俺の掌底は空を切った。

一瞬だけ上野の姿を見失う。

とん、と背中に、物理的には軽い、精神的には重い衝撃が走る。上野が俺に背中を合わせてきたのだ。

「こんな型は習っていないぞ」

「はい。これは、秘技とでも言いませうか」

俺は、この型の意味を悟った。

俺の使う武術の投げは相手の力を利用する合気道のそれに近い。

この型は先に相手に動かさせ、それに対応して投げるのだ。

つまり、先に動いたほうが負けだ。

俺は舌打ちする。

俺は先に行かなくてはならない。寮が襲撃されているのだ。

俺は、意を決して動いた。

その時、時詠みが発動した。

俺の身体は宙を舞う。

投げ飛ばされた俺は、背中から地面に落ちた。

激しい頭痛と共に、むせ返る。

「お見事です」

立っている上野は言った。

「上野、おまえ俺を殺すつもりだったな？」

「本気で当たらせてもらうと申しました」

上野は、右手の小指を押さえた。

上野の小指は、折れていた。

投げられる瞬間、俺は上野の小指を叩き折って投げから逃れたのだ。

俺はよろけながらも立ち上がった。

「上野、俺は行くよ。今は秋葉家よりも守りたいものがあるんだ」

「承知しました。巧さま、行ってらっしゃいませ」

上野は恭しく俺に頭を下げた。

ふと見ると香苗が俺を見上げている。俺は香苗に笑いかけた。

「香苗。もつと鍛えておけ。どんなに気取ったって、結局制御できるのは自分自身だけだからな」

俺はぽかんとしている香苗に背を向け、門に向かった。

そこには、今まで出番を待っていたかのように、桃花が立っていた。

「遅かったわね」

完璧な作り笑いを見せる桃花を俺は無視して門を潜ろうとした。

「おじさまもおばさまも最初は本当にあなたとの和解を望んでいたのよ。それはわかってあげて」

俺は足を止めた。

「今さら、どうでもいいことだな。結局和解はならなかったんだから」

「ええ、そうね。私は、今回のことに私が絡んでいないことを知っておいてもらいたかったの。すみれがあなたのところに行くのを止めなかったのも、あなたのことを思ってたのよ」

「それもどうでもいい。結局、俺とおまえも赤の他人だ」

「へえ、許婚にそんなことを言っているの？」

桃花はそう言うと、ちらと鍵を鳴らした。

「私、この間バイク買ったのよね。ここから憶良市まで電車なら乗り換え時間も入れて4時間はかかるわね。でも、バイクなら2時間もあれば行けるかな」

俺は桃花の顔を見た。

俺の妻になる予定だった女は、余裕の表情を俺に向けている。

「……いいのか？ 勝手なこととして」

「いいのよ。東家も秋葉家も関係ない。私があなたのためにやりたいんだから。それができる程度には成長したつもりよ」

桃花はにやりと歯を見せて笑った。造形美のない、地の笑いだつた。

「俺はおまえを見損なっていたみたいだな。おまえ、いい女だよ」

「当然でしょう？ これでもタレント好感度で上位にいるんだから」

俺は桃花から鍵を受け取る。

「助かるよ。恩に着る」

「今度会う時までにお返しを考えておきなさいよ」

俺と桃花は笑いあつた。

そして、俺は秋葉邸の門を潜って外に出た。

## フォートファイブ襲撃

その日のフォートファイブスは夜まで実に穏やかなものだった。

「大久保隊長、先に失礼します」

「ああ、ご苦労だった」

大久保芳樹は通いの部下を定時で帰し、作戦室から出た。

黒金としての仕事は終わりだが、ここから彼女の仕事、寮母としての、が始まる。

「よしき、晩御飯まだ？」

「今から作るから。ほら、これでも食べている」

芳樹はまとわりつく留美に魚肉ソーセージを投げ与える。留美は嬉しそうにそれを受け取った。

「そういえば今日も下級生はいないんだったな。ふむ。作る量が少なくて助かる」

芳樹は夕飯の準備に取り掛かった。

鍋に火をかけ包丁を振るう。趣味で着ているとはいえ、メイド服は伊達ではなかった。

夕飯の準備が終わる頃、渋谷明彦が部活から帰り、馬場久菜が図書室から出てくる。

その日の夕食は4人揃ったものだった。

「やっぱ巧くんたちがいないとこの寮も少し寂しいね」

留美の言に明彦が同意する。

「ああ、そうだな。まあ、人口密度が半分になるんだから当然だが」

「大げさね。明日には4人とも戻ってくるでしょう？」

穏やかな夕食は続く。

だが、それは穏やかな1日の終わりと共に強制的に終了した。

突然訪れる揺れと轟音。4人はイスから転げ落ちた。

「なんだ、一体？」

芳樹は作戦室に走り出した。3人もそれに続く。

作戦室では赤いアラームと警告音が鳴り響いていた。

「芳樹？」

「ああ、襲撃だ。山間から砲撃されている」

芳樹はタッチパネルを素早く操作し、迎撃システムをオンにする。寮の庭に迫撃砲が現れ、攻撃を開始する。

フォートファイブスは、その名の通り、小規模ながらも要塞としての機能を兼ね揃えていた。

「……駄目だ。外部との連絡が取れない。これは、マニゴルドの作業だな」

「直接襲撃してくるのは久しぶりだねえ。えっと、3年ぶりかな？」

芳樹がここに赴任してからは初めてだね」

砲撃は10分ほどで止み、マニゴルドが敷地内に侵入してくる。

フォートファイブスの迎撃システムも遠距離用から近距離用に切り替わる。

最新の現代兵器で武装するマニゴルドが近接戦に拘るのには訳があった。

12番戦争初期、人類は白金を圧倒的な軍事力によって圧殺しようとして目論んだ。

しかし、それは早々に失敗する。

古今を問わず、戦争の初動は情報戦により始まる。現代戦においてはその主流は人工衛星による電子戦だった。

まず地球の気圏上に浮かぶ数万の人工衛星が使用不能になる。

『悪魔』の称号を持つコットンテールはインターネット空間を完全に支配下に置き、一部を除き、全ての人工衛星を地球に落下させたのだ。

こうして、情報戦で完全に敗北した人類はほぼ全ての現代兵器を無力化された。

一度、数人のストウレーガに向けて放たれた核ミサイルは進路を

変え、軍事的な重要施設を消滅させたことがあった。

現代において、軍事は言うに及ばず、医療、経済、実生活での様々な分野にマイクロチップなどの電子部品は使われている。

その全てを白金の支配下に置かれた人類の軍事的優位性はなくなっていた。

人類が白金に対抗するには前世紀に小国が大国に抗ったように、ゲリラ戦、またはテロリズムによる奇襲しなくなっていたのだ。個体差で圧倒的に劣るマニゴールドが数を頼りに接近戦を挑むのは、実は、それがもっとも低コストであり、低リスクな戦法だったのだ。

「数が多いな。このままでは防御陣が破られるぞ」

芳樹がそう言った直後、男子寮側から洋館内に騎士たちが侵入する。

「ほらあ、やつぱりここから破られた。前から言っていたでしょ？ここが弱いつて」

「いや、私も上に進言はしていたんだが、問題ないって予算が下りなかったんだよ。理論上は問題ないってな」

「たまらないな。エクセルだけで仕事が出来ると思っているんだから。仕方ない。留美、行くぞ」

留美と明彦が作戦室を出ようとする。それを久菜は止めた。

「私が行くわ」

留美は久菜の顔を覗き込んだ。

「珍しいね、くーちゃんが自分から動くななんて」

「さすがに、人の家に土足で上がりこまれたら不愉快にもなるわ」  
久菜はそう言うのと独り作戦室を後にした。

「さてと、明彦、私たちも行くよ」

「?どこにだ?」

「2階のテラス。あそこも弱いからね。芳樹はここでじっとしてていいよ」

「ああ、そうさせてもらう。とりあえず2時間ほど時間を稼いでくれ。それだけ連絡が取れなければ黒金の本部も異常に気付いてくれるはずだ」

「2時間もあればおなかいっぱいになるね。ご飯を中断されたお返しはしっかりさせてもらうよ」

留美は右の拳を左の手のひらに打ちつけ、明彦を引き連れて作戦室を出て行った。

## 『アーペレジーナ』

男子寮側から侵入したマニゴルドの騎士たちは2手に分かれた。

一部屋一部屋を調べてストウレーガを探す部隊とそのまま他の場所に向かう部隊だ。

その部隊がちょうどエントランスに差し掛かったときに異変は起こった。

先頭を走っている騎士の足が止まったのだ。

後続の騎士は不振に思いつつも同じように立ち止まった。

どうしたのかと尋ねることはできない。

それは私語だからだ。

マニゴルドはひとつの群体でありその中に個人はない。

働き蟻のようにひとつの目的のために無心で動かなければならぬのだ。

別の部隊の騎士は先頭で立ち止まる騎士を追い抜き、エントランスに入った。

そこには背の低い少女が立っていた。

可憐な外貌とは正反対の冷やかな眼差しを騎士たちに向けている。

少女、馬場久菜は一步前に出て言った。

「呼ばれもしないのに集団で押しかける。あなたたち、失礼よ」

騎士たちは自分の身体に異変が起こっていることに気付いた。

身体が熱い。発熱、発汗、嘔吐感までがある。

騎士のひとり熱さに耐え切れず兜を脱いだ。

他の騎士たちはそれを見て目を見張った。

兜を脱いだ騎士の顔には、無数の赤い斑点が浮かんでいたのだ。騎士たちは慌てて手甲を外し自身の手を見た。やはり赤い斑点が浮かんでいた。

騎士のひとりが吐血しその場に倒れこむ。それに続くようにその場にいた全ての騎士が倒れた。

久菜は特殊なウィルスを操る。騎士たちは、そのウィルスに感染させられたのだ。

「それが『アーペレジーナ』の能力？ 噂通り残酷ね」

その声は入り口の扉から聞こえた。

扉はいつの間にか開け放たれ、そこからサングラスをかけた女性が入ってくる。

「……マニゴールドではないわね」

「あら、わかる？ ええそうよ。私は白金」

「白金がなんの用かしら？」

女性はサングラスを外し、もだえ苦しんでいる騎士を見た。

騎士は見られた瞬間、一度だけ体を跳ね、動かなくなった。

「私個人としては用はないんだけど、付き合いよ」

「……あなたは誰？」

女性は心底可笑しそうに笑い、名乗った。

「聞いたことぐらいはあるでしょう？ 私は『正義』。ゲルトルー

ト・ガルボよ」

## 『ネクロシス』

「明彦、そつちから来たよ！」

「ああ、わかつてる！」

渋谷明彦はテラスの手すりを越えて侵入してくる騎士に向かっていった。

振り回される剣を潜り、騎士の胴体を手のひらで押した。

ずるりと、騎士の上半身は下半身からずり落ち、テラスから落ちていった。

下半身の切断面は、腐っている。

明彦は、細胞を異常促進させて対象の身体を腐らせているのだ。

明彦は手を振り、腐汁を払い落とす。

「ちよつと！ その臭いはなんとかならないの！」

「肉は腐りかけがうまいっていうぞ」

留美はにやりと八重歯を見せた。

「お肉はやっぱりちまちまとは駄目だね。丸呑みが一番おいしいよ！」

踊るように飛び跳ね、騎士を3人まとめて赤黒い胃袋に包む。騎士たちは、生きながら消化された。

3人の騎士が同時にテラスに踊りあがる。

「舞台には上がらないで！ マナーの悪いお客さんは退場だよ！」

テラスに上がった3人のうち2人は留美の餌食になり、1人は明彦に腐らされる。

だが、別の場所から別の騎士がテラスに上がってきた。

「つたく、きりがないな！」

「マニゴルドは物量戦術しか芸がないからね。一発屋の芸人は苦勞するよ」

留美と明彦は背中合わせで立ち、一息吐く。

その間にも騎士は続々とテラスに満ちてくる。その数が20を超える頃、それは起こった。

留美たちを包囲し、輪を縮める騎士たちのひとりの足が止まった。他の騎士たちは、足並みを乱したその騎士を見た。

その騎士は、ゆっくりと左右に分断された。

騎士の立っていたところには、下から縦30センチ、長さは2メートルほどの長方形の鉄板が生えていた。

その鉄板は、鮫の背びれのようにテラスを徘徊し始めた。

「明彦、よけるよ！」

留美と明彦は鉄板を避けるために左右に飛んだ。20人以上いた騎士たちは、鉄板に切り刻まれて命を落としていった。

留美はテラスから飛び降り、下にいる男を見た。

「君、誰？」

右手が鉄板になっている男は、上に突き刺している鉄板をゆっくりと引き抜くと留美を見た。

背の高い、痩せ型の男だ。

日本人ではない。

男は下卑た笑いを留美に見せた。

「なんだよ、助けてやったんだろ？ 小うるさいマニゴルドの蠅からよ。」

「頼んでないよね、それ」

遅れてテラスから降りた明彦は、庭園の様子を見た。

そこには、無数のマニゴルドの死体が転がっていた。すでに全滅しているようだった。

「『プレデター』の岡地留美と『ネクローシス』の渋谷明彦、だな。へへ、楽しめそうだな」

「もう一度聞くとよ。君、誰？」

「俺か？俺は『ブレード』。『正義』に仕える使徒だ」

## 『愚者』対『仮性メイド』

「なにがあつたんだ、一体？」

芳樹は作戦室からその様子を見ていた。

マニゴルドの攻勢を留美たちはよく防いでいた。

その戦況は一変する。

門から堂々と3人の人物が入ってきたのだ。ひとりは痩せ型の男、ひとりはサングラスをかけた女。そして、最後のひとりは日本刀を持ったメガネをかけた少年だった。

3人は水溜りを飛び越すような軽い足取りでマニゴルドの騎士たちを駆逐し始めた。

痩せ型の男は自身の右手を長大な鉄に変えて、女はただ見るだけで騎士たちを殺していった。

メガネをかけた男はタクトを振るう指揮者のように日本刀を振るう。

騎士たちは、まるで空間自体がずれるように鎧ごと身体を分断させられた。

庭園内にいた騎士たちが全滅すると痩せ型の男はテラスに、女はエントランスに向かう。

芳樹は3人を攻撃目標にしようかためらった。

3人がストウレーガだということはその異様さからもわかる。

だが、彼らは、黒金の援軍なのか？ それにしては来るのが早すぎる。

「へえ、ここが悪名高いフォートファイブスの作戦室か。はは、すごいな。金がかかってる」

芳樹は急に聞こえたその背後の声に、振り返りざまに拳銃を乱射した。

だが、そこに人の姿はなかった。

「酷いな。別にお茶を出せとは言わないけどさすがにそれはないんじゃない？」

芳樹は左を向いた。

そこには、メガネをかけた男がいた。

「どうやって入ってきたかは知らないが、不法侵入だぞ」

男はたまらずに嘔き出した。

「ああ、ごめん。この状況でそれを言うんだ。黒金にはユニークな人が多いね。君といい巧くんといい」

「巧？ ああ、そうか。おまえがこの間うちの巧にちょっかいを出した『愚者』だな」

「ご名答。ちょっかいを出したって言い方には少し引っかかるけどね」

『愚者』、神田惣一は側にあつたイスを引き寄せると腰掛けた。

芳樹は拳銃で惣一を狙い定めている。

「それで、なんのようだ？」

「実は巧くんに借りがあつてね。でも、急に伺ったら迷惑かもしれないだろ？ だから君たちを人質に取って巧くんから僕のところに来てもらおうと思つてね」

「直接巧の前に現れても逃げられてしまう。だが私たちを人質にすれば巧は逃げないというわけか。だが、それは見当違いだぞ。巧はそんな危険を犯さない」

「もし本気でそう思っているなら君より僕のほうが巧くんを理解しているってことになるね。彼が君たちを見捨てるはずないじゃないか」

惣一は微笑み、逆に芳樹は口角を下げた。

「飯田恵さん。彼女ね、多分放つておいても死んでいたよ、残念なこと。だけど巧くんはとどめを刺した。放つておけなかった、見捨てられなかったんだよ。結果は変わらなくても、自らの手が汚れることになつてもね」

「……巧のことをよくわかってるじゃないか」

「うん、彼とは友達だからね」

芳樹は拳銃を握る指に力を入れた。

「悪いが倒させてもらうぞ。これでもこの寮母でね。巧たちの安全を守る義務があるんだ」

「辛いところだね、お互い。勝てないのを承知でそういうのは立派だけど、僕もはいそうですか、というわけにはいかないから」

芳樹は引き金を引いた。

惣一の姿が消え、銃弾は空を切った。

瞬間、芳樹は背後からの斬撃をかわし、ソバットを後ろに放つ。

「おっと！」

背後に現れた惣一はそれを間一髪でかわした。

「瞬間移動か！ その程度では私は倒せないぞ！」

「みただいだね、いや、驚いた！」

芳樹は惣一の斬撃をかわし、眉間に銃口を突きつけた。芳樹の首筋には冷たい真蛇の刃が当てられている。

「すごいな。どうだい、白金に来る気はないかい？」

「私はただの人だぞ。ストウレーガではない」

「ああ、そのことは気にすることはないんじゃないかな。最盛期の悪魔狩りではアルビノやオッドアイ、果ては超過記憶保持者やサヴアン症の子供までストウレーガとして殺されたそうだから」

「悪いが断るよ。今の仕事が入っているんでね」

「巧くんたちを監視するのが？」

「いや、メイドの仕事」

「っは！ああ、ごめん、そうだったんだ」

必死で笑いを堪える惣一。芳樹の首から刃が離れた。

芳樹は引き金を引いた。だが、弾丸は発射されなかった。

「な！」

拳銃は音を立てて割れる。

ゴトと、重い音を立てて拳銃が地面に落ちたとき、芳樹の手元には銃巴だけがあった。

綺麗な切断面。斬られてなどいないのに。

「うん、気に入った。君を殺すのはやめるよ」

惣一は一步前が出る。

芳樹の反応は遅れた。

惣一は柄で芳樹の鳩尾を打った。

芳樹は、苦悶の表情を浮かべながら気を失った。

## 『ブレデター』対『ブレード』

留美は黒い胃袋を『ブレード』にかぶせた。『ブレード』はそれを鼻で笑い、長大な右手の鉄板で切り払う。

「いったーい！」

胃袋を留美の手に戻す。留美の指先には小さな切り傷が出来ていた。

「駄目だね。もし丸呑みしても内側から切られて逃げられちゃうよ。明彦、あの鉄板、なんとかならない？」

「いや、無理だな。俺が作用できるのは細胞だ。見た感じあれは細胞以外の物質に変容している」

「だから明彦はホモなんだよう！そこをなんとかしてよ！」

「ホモは関係ないだろ！」

「なにごちゃごちゃ喋ってるのか知らないが、こつちから行くぜ！」

『ブレード』は留美と明彦に突進する。2人は左右に分かれた。

『ブレード』は、留美に目をつけた。

「ちよつと！あつち狙いなさいよ！」

「レディファーストだろ！」

「うれしくな〜い！」

ぶん、と空気を叩く音と共に鉄板は留美の頭上を過ぎ去る。

留美は距離を置こうと『ブレード』から離れるが、『ブレード』は間を置かず攻め立てた。

「しつこいと女の子にもてないよ！」

留美は軽口を叩きながら『ブレード』の猛攻をかわす。明彦はそれを見て唸った。留美は、普段の大食いと奇矯からは想像もつかないことながら、かなり運動神経が高いのだ。

「明彦、いつまで遊んでるの！」

「ああ、今行く」

明彦は背後から『ブレード』に近づいた。

それに気付いた『ブレード』は大降りに鉄板を振り回した。

その間に留美は『ブレード』の射程内から離れ、明彦に近づいた。「それで、なにか思いついた？」

「……、ああ。なんとかあいつに近づければな」

「そっか。それじゃあよろしく」

留美は、そう言うと思いつき切り明彦を突き飛ばした。

突然の事態によるける明彦の胸に、どす、と、鉄板が突き刺さる。

「へへ、ひつでえ女だな。仲間を盾にするとは」

鉄板は明彦の胸を貫き、背中に突き出ている。

明彦は、吐血すると鉄板からずり落ちた。

『ブレード』はとどめを刺すために鉄板を振り上げようとした。

だが、鉄板は、なにかに挟まったように動かなかった。

「なん、だ？」

『ブレード』は鉄板を見る。

鉄板の先は、留美の黒い胃袋が覆っていた。

留美は『ブレード』と目が合うと、にやりと笑って八重歯を見せた。

「いつくよ〜！」

『ブレード』は、鉄板ごと空中に持ち上げられ、一度地面に叩きつけられる。そして、バウンドと共に、デスロール（鰐が大きな獲物の肉を引きちぎるために行う旋回運動）のように振り回され、空へ放り投げられた。

「明彦、いつたよ〜！」

「ああ、わかつている〜！」

『ブレード』の落下地点には明彦がいた。

貫かれた胸は服に血が残るものの、完全に塞がっている。自身の細胞を促進させて治したのだ。

落ちてくる『ブレード』の硬質化していない右肩を明彦は腐らせた。

『ブレード』の右腕は、肩ごともげ落ちる。

『ブレード』は、地面に叩きつけられてうずくまった。なくなった右腕を押さえながらゆっくりと立ち上がる。その前に、留美が立った。

後ろで手を組み、下から『ブレード』を見上げる。

「うん、やっぱりお肉は丸呑みだよな」

『ブレード』の視界は、留美の八重歯を見ると同時に、暗転した。留美の足から伸びた胃袋は下から『ブレード』を包み込んだ。

胃袋を身体に戻すと、留美は明彦を見た。

「さて、と。こっちは片付いたかな。でも、白金が来てるのならくーちゃんが心配だね。……明彦？」

「しばらくおまえとは口を聞かん。話しかけるな」

「なに？ 突き飛ばしたことを怒っているの？ ホモのくせにおしりのあなのちっちゃいやつ〜！」

「うるさい！ ホモホモ言うな！」

留美と明彦は口げんかをしながらテラスを後にした。

## 『正義』対『アーペレジーナ』

『正義』、ゲルトルート・ガルボはその作り物めいた銀色の瞳を久菜に向けた。

久菜は跳ねるように物陰に隠れた。

「あら、どうしたの？ 『アーペレジーナ』とは思えない臆病さね」  
「『正義』、あなたの魔眼のことは聞いていますわ。見るだけで相手の身体を壊す『裁き』」

「聖眼といいなさい。内容は、まあ、概ね合っているわね。だけど、補足するなら壊すだけではないのよ。たとえば、瞳から身体の中に侵入してアドレナリンや脳内麻薬を分泌させる。敵には至死量を超えるだけ、そして味方に適量を施せば……」

ゲルトルートはサングラスの鏡面を見た。自身の瞳が移る。一度だけ、心臓が跳ねた。

「こういうことも出来るのよ」  
ゲルトルートは跳躍した。

常人では出し得ないスピードで一気に回り込み、久菜を視野に入れる。

久菜はゲルトルートの視線から逃れるために飛んだ。  
その足をゲルトルートは捕らえた。

久菜の内股が爆ぜる。

「つく！」

久菜は足を引きずりながらも再び物陰に隠れた。  
ゲルトルートは、右手に微かな違和感を覚えた。  
見てみると、わずかに赤い斑点が浮かんでいる。

ゲルトルートはその部位を噛み千切り、吐き出した。  
床にべちゃりと肉片と皮の断片が落ちる。

「あなたの使うウィルス。射程範囲は10メートルというところね。私はその外からあなたを見ればいい。あなたに勝ち目は無い。そこ

で提案なんだけど……」

ゲルトルートは自身の説を証明するように久菜から10メートル離れた外縁部をゆっくりと歩き出した。

久菜は破れたスカートを裂き、大腿部を縛って出血を止めた。

「どう？ 白金に來ない？」

「……私のことを知って言っているの？」

「ええ。生まれながらの黒金。その能力の高さから将来黒金を背負って立つことを期待されているエリート。フェイカーの最高傑作」

久菜は傷ついた大腿を見た。

血が止まらない。わずかながら動脈を傷つけたようだった。

## フェイカー

フェイカーとは遺伝子操作によって人工的に造られたストウレーガだ。

フェイカー（偽者）という言葉には、ストウレーガに対する軽蔑が含まれている。

ストウレーガの本格的な研究は12番戦争が始まる前後から行われているが、現在に至るまで飛躍的な進歩が見えないのが現状だった。

理由は、ストウレーガという存在自体が秘匿にされているため大っぴらな調査が行えないことや、サンプルであるストウレーガが希少であることなどが上げられるが、その最大のもものは、ストウレーガをカテゴライズ化することが出来ないからだだった。

ストウレーガは、分類するには格子となる前提がまったくなく、あるいはありすぎた。

ストウレーガ個人個人に相関性はなく、それぞれが科学では証明できない理論によって能力を使っているのだ。

そんな未熟な知識の中でフェイカーの作成は行われた。

膨大な失敗とわずかな成功。

中でも『アーペレジーナ』の称号を持ち、生まれつきのストウレーガにも劣らない能力を保持する馬場久菜はフェイカーの成功例とされていた。

ゲルトルートは挑発するように一歩前に出た。

「私に言わせれば、あなたはフェイカーの成功例というより、フェ

イカーの中にたまたま生まれついたストウレーガが紛れ込んでいたんだと思うけど」

「それを知っていて私をスカウトするなんて、よっぽど白金は人手不足なのね」

「自身の生き方なんて強制されるものじゃないわ。あなたが白金に来るならいきっかけになるんじゃない？ それに、白金が人手不足というのも本当。世界は悪意に満ちている。それを正すのに手はいくらあっても足りないのよ」

「まるで正義の味方のような言い方ね」

「ええ。もちろん私たちはそのつもり。世界はもはや自浄では助からないほどに穢れているわ。ゴールドのパンデミックは自然界の人間に対する最後の抵抗だったのかもしれないわね。あれによって一時的に収まった自然破壊の勢いは再び世界そのものを壊しにかかっている。まず、両生類が死滅し、鳥類、爬虫類が絶滅の危機に瀕している。最後に影響を受ける哺乳類も現在、如実にその影響を受けている。それがストウレーガよ」

「それは違うわ。ストウレーガは一部のダーウィニストが言うようにゴールドによって新たな耐性を得た新種ではない。人類生誕以来、確実に、低確率ながら存在してきたはずよ。ストウレーガの能力は遺伝しない。ストウレーガの子供はストウレーガにはならないもの」

「ええ、その通り。私たちストウレーガは1万人にひとり、10万人にひとりの確率で存在してきた。それは、変種ということよ。もちろんそれは非難されることではないし私たちはその差別に対して戦ってきたわ。その私たちが如実に増えてきていること自体が人類の生態系の異変を表していると思わない？」

久菜は大きく息を吸うと、立ち上がり、ゲルトルートの前に立った。ゲルトルートは訝しげに久菜を見た。

「確かに、あなたの言うことには一理あるかもしれないわね」

久菜は片足で前に出て、月明かりに照らされた。

ゲルトルートは眉をひそめた。

久菜の周囲には、無数の黒い埃のような物体が浮かんでいた。病  
原体のコロニーだ。

それは、ひとつひとつが蜂のように独自の軌道を描き、ゲルトル  
ートに踊りかかった。

「こんな切り札を残していたの、『アーペレジーナ（女王蜂）』！」  
コロニーのひとつがゲルトルートの腕にぶつかった。コロニーは  
霧散し、その後には黒く変色した腕が残った。

腕に残った黒い染みはゆるやかに広がっていく。

「仕方ないわね！」

ゲルトルートは久菜を睨んだ。

途端、久菜の胸は爆ぜ、膝を突いた。

コロニーはひとつ残らず空中に霧散し、腕の染みは広がりを止め  
る。

「さすがに焦ったわ。あと一秒遅かったら全身を蝕まれていたかも。  
おしかったわね」

久菜は苦しそうに荒い息を吐く。

「今、楽にしてあげるわ」

ゲルトルートは久菜を見下ろした。

その時、間の抜けた放送が入った。

「あーあー、ぐっとモーニングベトナム。センドモアマナー。アイ  
ラブニューヨーク。みんな、聞こえるかな？ 僕は白金の『愚者』、  
神田惣一だ。君たちの作戦室は占拠したよ。美人のメイドさんと一  
緒にね。今から作戦室まで来てよ。それと、ゲルトルート。言った  
よね。黒金は殺すなって」

ゲルトルートは力を抜くと、肩を竦めた。

## 留美の期待、惣一の期待

作戦室に入ってきたゲルトルトを見て、惣一は指差して笑った。「あつはは、ゲルトルト！その腕、『アーペレジーナ』にやられたんだね！」

「ええ、見事にやられたわね」

ゲルトルトは、不愉快そうに髪を掴んで引き摺ってきた久菜を、気絶している芳樹の隣に転がした。

ゲルトルトは変色した腕を惣一に伸ばした。

惣一は真蛇を一閃した。

ゲルトルトはわずかに眉を寄せ、変色した腕は床に落ちる。

ゲルトルトは、自身の腕だったものを掴み上げるとゴミ箱に捨てた。

騒がしい足音が近づいてくる。留美と明彦だ。

「クーちゃん！」

留美は苦しそうに寝ている久菜に寄った。

明彦はすぐに治療にかかる。

留美は、挑むように惣一とゲルトルトを見上げた。

惣一は思わず苦笑した。

この少女は白金最高幹部である『愚者』と『正義』を2人まとめ相手にするつもりらしい。

「クーちゃんをいじめたのは誰？」

「ああ、ごめんごめん。そんなつもりじゃなかったんだ。ま、こっちも『ブレード』をやられているわけだけだね」

「君？」

「おっと、いや、僕じゃないよ」

それを聞くと留美はゲルトルトの作り物めいた銀色の瞳を睨んだ。

それを惣一は遮る。

「まあまあ、仲良くしようよ。目的が達成できたら大人しく帰るか  
ら、ね」

「目的？」

留美は惣一を見上げた。

惣一は微笑みを持って留美に答える。

「僕の目的は秋葉巧くんだよ。彼に興味があつてね」

「たくみ、くん？」

留美は一瞬きよとした後、八重歯を見せて笑った。

「言っておくけど、巧くんははやいよ〜！」

惣一はたまらず笑い出した。

この少女は自分が白金最高幹部のひとり、『愚者』を相手にでそ  
う言ったのだ。

惣一は、胸に期待を膨らませて答えた。

「ああ、知っているよ。うん、すごく楽しみだ！」

**留美の期待、惣一の期待（後書き）**

最近短いのが続いて申し訳ありません。

## 巧、憶良市到着

憶良市に入ったところで俺はバイクを止めた。

秋葉邸からここまで2時間かかっていない。

秋葉邸の外にはマニゴルドはいなかった。マービンを倒したために撤退したのだろう。余分なロスはしないですんだ。

フォートファイブスがマニゴルドに襲撃されているならここからは敵地と見るべきだ。

俺は携帯を取り出して正志に電話をかけた。

電話は通じ、数コールで正志は出た。

「正志、そっちは無事か？」

「ああ。今タクシーで憶良市に向かっている。おまえは？」

「憶良市に着いた。恵比寿と新橋は？」

「恵比寿は俺の隣にいる。新橋は、ひとりで先に行った」

「ひとり？ 何で止めないんだ！」

「仕方ないだろ？止める間もなかったんだから、あ、恵比寿……」

「巧、聞こえる？」

急に通話口から恵比寿の声が聞こえる。たぶん、正志の携帯を恵比寿が奪ったのだろう。

「恵比寿！なんで新橋をひとりで行かせた！」

「あ、ごめんなさい……」

声を荒げた俺に臆したわけでもないだろうが、恵比寿は俺に謝ってくる。正直、拍子抜けだ。

「いや、悪い。新橋のことだから滅多なことはないだろうが……」

「なに、心配なの？」

恵比寿の声は一転して不機嫌なものに変わる。なんなんだ、いったい。

「当たり前だろ？ それより状況はどうなってるんだ？ 馬場先輩

たちのことだからそう簡単にはやられないと思うが」

『それが、本部に確認したところ、ちよっと取り込んで……』

「なんだよ、取り込んでるって」

『フォートファイブはもう占拠されてるわ。でも、占拠しているのはマニゴールドじゃなくて、白金だって』

「白金？　なんで白金がフォートファイブを狙うんだよ」

『知らないわよ。それで、本部から命令があつて、一度小中学生寮に集合しろって』

「本部のマヌケに地獄に落ちろって伝えとけ！」

俺は携帯を切った。そして、次は馬場先輩の携帯に電話をかけた。もしマニゴールドの襲撃が終わっているのなら電波障害はないはずだ。

『もしもし？』

「その声、岡地先輩ですか？」

『あ、巧くん。やほー』

岡地先輩の能天気な声にむかつと来るが、俺は忍耐をフル動員してなんとか耐えた。

「そっちの状況はどうなってます？」

『うん、実は人質になっちゃった。芳樹なんてメイド服で縛られるんだよ！』

「なにか、卑猥ですね」

『このままだと、も、すごいえっちなことされちゃうよ！　だから、はやく助けにきて』

「余裕ありますね」

『実は、そうでもないんだ。ちよこつとだけまじめな話、くーちゃんがばいんだ。巧くん、少しでいいから時間を稼いで。その間に私たちはくーちゃんを連れて逃げるから』

馬場先輩が、負けた？

『あつと、もしもし？　巧くん、久しぶり』

突然男の声が聞こえる。この声には聞き覚えがあつた。

「『愚者』、神田惣一、か？」

『うん。君の友達には面白いのが多いね。犯人の前で堂々と逃げ  
て言うんだから』

「みんなは無事だろうな」

『今のところは、ね。聞いたとおり、『アーペレジーナ』は危険な  
状態だけど』

「おまえらの目的はなんだ？」

『もちろん君だよ。借りを返しにきたんだ』

「返済ならまってやらんこともないけどな」

『心配かけるね。でも大丈夫、この機会に利子つけて完済させても  
らうよ』

「わかった。今からそっちに行く。みんなには手を出すなよ。さも  
ないと……」

『さもないと？』

「往時の悪魔狩りを再現してやる」

『あはは、それはそれで面白そうだけど、うん。手は出さないでお  
くよ。その代わりに、はやく来てよ』

「ああ。すぐに行く」

俺は電話を切った。

身体を確認する。節々は痛むし頭痛は止まない。

俺は、空を見上げてわずかに欠けた月を眺めた。

そして、バイクを走らせた。

「巧くんはもうすぐ来るって。ああ、楽しみだな」

ゲルトルートは満面の笑みを浮かべている惣一を眺めて苦笑した。

「秋葉巧とはそれほどのストウレーガなの？ 未だに称号も持たな  
いのに」

「だからだよ。僕たちの知らないようなすごいストウレーガがいる。

それだけでわくわくするだろ？ ん、なんだ？」

突然寮が揺れた。それに呼応して停電が起こる。

「留美くん。これは、なにがあつたのかな？」

薄暗い作戦室の中で留美は八重歯を見せる。

「これは、自家発電機が破壊されたんだね。巧くんばかりに気を取りすぎたんじゃないかな」

「ああ、来たのね、彼女が」

ゲルトルートは残った左腕で胸を支え、くすくすと笑った。

「ゲルトルート、それじゃあ彼女は任せるよ」

「ええ、せいぜい楽しませてもらうわ」

ゲルトルートと惣一は、人質であるはずの留美たちを残して作戦室を後にした。

## 月下（前書き）

ここから視点を巧サイドと美異サイドに分けます。視点がころころ変わって読みにくいと思いますが、ご了承くださいませ。

## 月下

>>美異サイド<<

薄暗いエントランスに、『正義』、ゲルトルート・ガルボの足音だけが響く。

光は月明かりのみ。窓から差し込む月光に照らされて、ゲルトルートは足を止めた。

「いるのでしょうか、『世界』？出ていらっしやい」  
透き通るその声を、しかし、対象者は無視した。

「どうしたの？白金最強とまで謳われたあなたがまさか私が恐いともいうの？」

その声に反応するように微かな笑い声が暗闇から響いた。

ゲルトルートはその闇を見た。

わずかに白い影が揺らぎ、なにかが通り過ぎた。影は厨房に消えていく。

ゲルトルートはその影を追った。

厨房に入った瞬間、ゲルトルートは身をかがめた。先ほどまでゲルトルートの頭部があった場所を陶製の皿が過ぎ去り、甲高い音を立てて壁にぶつかった。

「野蛮な！そんなもので私が倒せるとでも！」

微かなきらめき、次いで飛んできたのは、包丁だった。ゲルトルートはそれかわす。

「いい加減にきなさい、美異！それが白金最高幹部のすること！」  
再び低い笑い声が厨房に籠る。

「ゲルトルート、あなた、腕はどこかに忘れてきたのですか？」  
ゲルトルートはわずかに頬を引きつらせる。

「……ええ。今メーカー修理に出しているところよ。やっぱり安物は駄目ね。買い替え時かしら」

暗闇からは確かな笑い声が響いた。

「ゲルトルート、私、これでも怒っているのですよ。私のささやかな楽しみだった旅行をあなたは台無しにしたんだもの」

ゲルトルートは声の方向を見た。

そして、目を見張った。

そこから投げつけられたものは、巨大な業務用の冷蔵庫だった。

ゲルトルートは横っ飛びに跳ね、冷蔵庫は轟音を立てながら壁に激突した。

「なんて滅茶苦茶な！」

ふわり、白いスカートがひるがえり、影は厨房から出て行った。

ゲルトルートは冷蔵庫に手を添えて立ち上がると、影を追った。

>> 巧サイド <

薄暗い峠道をバイクで駆け上がる。明かりはまばらな街灯と月明かりのみ。

徒歩なら20分はかかる道のりはバイクなら5分とかからなかった。

フォートファイブスの様相は一変していた。砲撃を受けたのか外装は崩れかけている。まるで戦時下の建物だ。

バイクを降り敷地内に入ると、マニゴルドの騎士達の無数の死体が転がっていた。死体の様子から、どうやら馬場先輩たちではなく、

白金の奴らにやられたようだった。

「おかえり、巧くん。待ってたよ」

俺は騎士たちの死体から視線を上げた。いつ現れたのか、神田惣一が立っていた。

「一応聞いておくけど、マニゴールドとつるんでいたのか？」

「おいおい、酷いな。これでもマニゴールドの襲撃から君たちを助けたつもりなんだけどな」

「襲撃タイミングが合いすぎてる。偶然だともいうつもりか？」

「僕たちがマニゴールドを利用したのは否定しないよ。どこの世界でも上のほうつてのは繋がっているものだからね。マニゴールドも白金も、そして黒金も。襲撃の日時がわかっていながら君たちに黙っていた黒金の本部のほうが問題じゃないかい？」

「ああ、それは問題ない。元々俺たちは本部をそれほど信用していないからな」

神田は苦笑しながら日本刀、真蛇を抜いた。

月光に真蛇が煌めく。

と、それに合わせるように寮内から轟音が響いた。

「後ろでも始まったみたいだね」

「後ろ？」

「うん。うちの『正義』と君の『世界』がね」

「『世界』？」

神田は一瞬だけ笑みを消し、いきなり笑い出した。

「あつはは！ああ、隠していたんだ！ とんだ猫かぶりだね、あの美異がね！」

「美異？ そうか。新橋が来ているんだな。それじゃあさっさと始めるか」

馬場先輩が倒されるほどの相手だ。新橋でも危ないかもしれない。

こいつを早く倒して応援に行かなくちゃな。

俺は落ちているセラミックソードを蹴り上げ、手に取った。

「まったく、君たちは楽しませてくれる。ああ、確かにこんなに楽

しいならこのおままごとみたいな学園生活も悪くないね」  
神田はわずかに身をかがめた。

途端に空気が一変し、殺気が寮の敷地内を覆った。

俺は息を呑んだ。

「さて、それじゃあ開演と行こうか。白金の『愚者』、その実力を  
見せてあげるよ！」

月が冴える。

神田は、一気に跳躍した。

俺は軽く息を吸い、足に力を入れて前に跳んだ。

## オープナー

>>巧サイド<<

一撃でセラミックソードは半分の長さにされる。セラミックソードを両断した真蛇はそのままの速度で軌跡を変え、俺の首に迫った。俺はそれを見切り、数ミリの差でかわしきる。

神田は手を置かず俺を攻め続け、俺はかわし続けた。空気を切り裂く音が耳を過ぎ、かわし損ねた突きが俺の頬を削いだ。

俺は大きく後退し、間合いを取った。

「その日本刀、なにで出来ているんだ？ 最新のセラミックソードがまるで紙だ」

「少しは楽しんでもらえているかな」

「まだまだだね」

俺は間合いを詰めた。

制空権が触れる寸前、俺は、持っていたセラミックソードを、落とすとした。

それを見てわずかに隙を作る神田。

俺はセラミックソードが地面に落ちる寸前に蹴りつけた。

セラミックソードは神田の顔面に飛んでいく。

神田はわずかに身を反らし、それをかわした。

崩れるバランス、俺は神田の手首を掴んだ。

「……それで、どうするつもりだい？」

「そつだな。こんなのはどうだ？」

神田は開いた手で俺を斬りつけてくる。

瞬間、俺は神田を回した。

仰向けに倒れる神田。その首に俺は足刀を落とす。

だが、足刀は神田には当たらず、地にめり込んだ。

「あ、はは！　すごいすごい！　倒されたのなんて『愚者』の称号をもらって以来、初めてだよ！」

神田は、俺から離れた背後に立っていた。

「瞬間移動、か」

「うん。僕は他に芸がなくてね。これでも苦労しているんだよ」

俺は頬から垂れてくる血を拭った。

神田は、ゆっくりと上段に構えた。

真蛇の刃が月光を写した。

「それじゃあそろそろ君の能力も見せてよ。時伏せ。ずっと楽しみにしていたんだ」

……心音を数える。大丈夫、使えるな。一気に決める！

「ああ、そうだな。新橋のところに行かなければならない。そろそろ決めさせてもらおうぞ」

俺は、一度大きく息を吸い、時伏せを発動させた。

>>美異サイド<<

ゲルトルートは美異の後を追った。

美異は着かず離れずにゲルトルートの先を進み、時折挑発するよ  
うにものを投げる。

投げられるものは、花瓶、砲撃で崩れ落ちた壁の破片、またはイ  
スやテーブルなど様々だ。

重力を無視して投げられるそれらは直撃すれば致命傷を被るだけ  
の攻撃力を持っている。

ゲルトルートは歯噛みしながら美異を追う。

「どこまで逃げる気？ まさか本気でものを投げて私を倒せると思っ  
っているわけではないでしょうね」

白いワンピースが踊った。

美異は階段を駆け上り、2階に上がり物陰に隠れる。

美異は携帯電話を耳に当てた。

『みいちゃん、ありがとう。私たちは無事寮の外に逃げられたよ』

美異は安堵の溜息を吐く。

時間稼ぎは成功した。

後は目の前の敵を殺し、巧を助けるだけだった。

「見つけた！」

美異はその声に目を見張った。

目の前にゲルトルトが立っていた。

美異が警戒していた階段を使わず、ゲルトルトは自身の脳内麻薬を分泌させて身体能力を向上させ、一気に吹き抜けのホールを飛び越えたのだ。

美異は咄嗟にゲルトルトの顔の前に右手を突き出す。

ゲルトルトの『裁き』は見られた箇所を破壊する。その中でも、目を見られればそこから脳内を壊されるのだ。

それだけは避けねばならない。

美異の右手は砕け、上腕までが一気に爆ぜた。

美異は砕けた手を振る。

血飛沫がゲルトルトの顔にかかり、視野がわずかに塞がれた。

瞬間、ゲルトルトは後ろに飛び、階下に落ちていった。

今までゲルトルトの立っていたところは美異の超重力によって陥没している。

「やってくれましたね、ゲルトルト。このワンピース、お気に入りだったのに」

美異は傷ついた右手には目もくれず、自身の血で赤く染まったワンピースを見た。

「まだ余裕があるのね。でも、その傷では今までのようには逃げら

れないんじゃない?」

美異は階下にいるゲルトルートを見下ろした。ゲルトルートは美異を見上げる。

「逃げ回るのは止めたの? それが正解よ」

「ええ、これで私も少しだけ本気を出せますから」

ゲルトルートは目を細めて美異を見た。

「……わかっているの? あなた、今、私の『裁き』の射程内に入っているのよ」

「それがどうかしましたか?」

美異はなにを聞いているのか、とでも言うようにくすくすと笑う。それを見てゲルトルートは一時戦闘態勢を解除した。

## 矯正

>>巧サイド<<

耳鳴りが始まり世界が凍る。

時伏せを発動した俺は神田に肉薄した。

上段から振り下ろされる真蛇、俺はそれを潜り抜け、拳を神田に叩き込む。

しかし、拳は空を切り、神田の姿は消えていた。

俺は反射的に前転した。今まで俺の頭部があったところを真蛇が切り裂く。

俺の背後に瞬間移動した神田が斬りつけたのだ。

こいつ、時伏せに対応してやがる！

俺は、距離を取って、一度時伏せを解除した。

「速い！ 目では追えないよ！」

神田は馬鹿にしているように手を叩いて喜ぶ。

「今のが最速かな？それとももっと速くなるのかな？」

「そうがつつくな」

俺は胃からこみ上がってくる血溜りを吐き出した。

「ああ、楽しいね。君の最速対僕の最短。どっちが速いかな？」

俺は軽い深呼吸を繰り返して息を整える。

神田は、その様子を見て真蛇を担ぎ、肩の力を抜いた。

「うん。そろそろ本題に入ろうかな。巧くん、どうだい？ 白金に来ないかい？」

「なんの冗談だ？」

「いや、本気だよ。僕は君のことが気に入っているし、手を合わせ  
てみて君の実力はわかった。君ならサバトの一員に推薦してもいい」

サバトは白金の意思決定機関だ。22人の最高幹部と56人の評

議員。2人の議長で構成されている。

「君も、この世界の歪みに気付いていないわけではないんだろ？」

俺は黙って神田を見た。神田の口元には笑みは浮かんでいない。

「君も家族に売られるっていう経験をしているわけだし、僕たちストウレーガ自身が被差別者だ。形式的には黒金は人類側とは和解しているけど、マニゴルドは人類側の全面的な支持を受けて活動している」

「それは、否定しようのない事実だな」

「差別を内包する世界が正しいわけないだろ？」

俺は押し黙る。

「その歪みは世界を侵食している。自然破壊やエネルギー問題に経済格差。それらは全てその歪みによる弊害だ」

「いきなり話を大きくしたな。なにが言いたいんだ？」

神田は目尻に笑みを浮かべ、ふっと軽く息を吐いて言った。

「世界の矯正」

>>美異サイド<<

「ふふ、あなたは、昔と変わらない白金の『世界』だわ。不敵でふてぶてしく、そして、強い。最強で最悪のストウレーガ」

ゲルトルートはゆっくりと階段を上りだした。

「心外ですね。それでも殺す相手は選んでいますよ」

「ねえ美異、いい加減、白金に戻ってきなさい。あなたは黒金として世界の歪みを肯定しているわけではないのでしょうか？」

「私には極めてどうでもいいこと、ね」

「世界の矯正には正義を布くことが必要なのよ。それには、あなたの力がいるわ」

ゲルトルートは足を止めた。

一段上、階段の踊り場の底が抜ける。美異の超重力だ。

「よく喋りますね。その舌を引き抜きましょうか？」

「美異、よく考えて。なにが正しくてなにが間違っているのか。あなたならわかるはずよ」

美異は小馬鹿にするように笑った。

「学校の先生の受け売りですけどね、正義の名の下に行われたことは碌なことがないそうですよ。聖地解放を謳った十字軍は虐殺を、大東亜共栄圏を謳った日本帝国は支配を、自由を謳ったアメリカは倫理と経済の崩壊を……」

「十字軍は東方への交易路を築き日本帝国は東南アジアの民族自決を即したわ。悪いことだけではないのよ」

「取って着けたような弁論ですね。それではアメリカは？」

「我々、ストウレーガを生んだ」

美異は一瞬だけ呆けた顔になり、狂ったように笑い出した。

「ああ、なるほど！ そういう見方もできるのね！ 確かに歪んだ世界が耐え切れずに発狂したきっかけはアメリカの金融崩壊ですものね」

「もつとも、それ以前にも予兆はあった。過ぎて初めて気付けるような、ね。今も同じよ。私たちはきつと予兆を見逃している。なにが起る前に行動しなければならぬのよ」

美異は笑いを収めると、ゲルトルートの銀色の作り物めいた瞳を見下ろした。

## 女は化ける

>> 巧サイド <<

「世界の矯正？」

俺は神田を見た。神田は身じろぎせず俺の目を見ていた。

「うん。世界を正すんだ。それは僕たちにしかできないし、僕たちにはその力がある」

「過信だな。能力なんてものは身体的特徴のひとつに過ぎない。それで差別される筋合いはないが、それでええばってどうする」

「僕たちの能力は特異だよ。僕がその気になれば今から1時間以内にこの国の重要人物を殺してやることも出来るし、それは君にも可能だろ？ それに、もし美異がその気になれば地球の地軸を狂わすことも、月を落とすことも可能だろうね。これは、自分たちの都合に合わせて世界を狂わせている連中には脅威だろうね」

「そういえば新橋は白金にいたことがあったらしいな。知り合いか？」

神田は嘖き出す。

「知り合いも何も……、彼女のことを君は知らないようだね。彼女の称号は『世界』。僕と同じ、大アルカナの称号を持つ白金最高幹部のひとりだよ」

「新橋、が？」

あの新橋が？

俺は新橋のことを考える。なぜかひとつまぶしをうまそうに食べているところを思い出してしまった。

自然に笑みが浮かぶ。

「ああ、そうだったのか」

「シヨックだったかな？彼女が僕たちの味方で」

「まさか。女の過去にこだわってどうするんだ？ 俺だって思い出したくない、嫌な奴だったときの過去はあるしな」

神田は口に微笑を浮かべた。

「うん、それは真理だね。それに、女ってのは化けるからねえ」

「ああ、そうだな。怖いなあ」

俺と神田は逸れた話で笑いあった。

「それじゃあそろそろ返事を聞こうかな。君も、この世界の歪みは理解できるだろう？」

「その前に、お前たち白金はなにがしたいんだ？」

神田は、聞かれるのを待っていたように、それを言った。

「12番戦争の再開」

『今』

>>巧サイド<<

「12番戦争の再開」

俺は笑みを消し、神田を見た。

「本気で言っているのか？」

「うん。僕たち白金は黒金と分かれてしばらくは活動休止状態になった。でも、その間にゆつくり見学させてもらったんだよ。黒金と人類がなにをしたのか。結果は世界の歪みを大きくしたただけだった。もう十分だよ。そろそろ、政権を交代してもらおうと思ってるね」

「それで、兵隊はひとりでも多いほうがいいってことか」

「質の高いのは特に、ね」

「出来るのか？ マイノリティであるお前らに」

「言つたる。僕たちにしか出来ないって。群体の中に個を埋没させたような連中には絶対に不可能だよ。僕たち、僕と君は少数派であるがゆえにそれとは無縁だろ？」

視線が絡む。

「それに、僕たちの敵は実はマジョリティを形成する差別者じゃないんだ」

「差別を斡旋するプロモーター、か。それなら確かに人類の、数による絶対的優位性は崩れるな」

風に揺れる森。雲はなく、月は燦々と輝いている。

俺は、神田に答えた。

「俺は白金にはならない。悪いが断るよ」

神田は眉を寄せ、口角を下げた。

「理由を聞こうかな」

「俺は、家だろつが組織だろつが、それこそ世界だろつが背負つのはごめんだ」

「君は世界がこのままでいいと思っっているのかい？」

「いや。そう考えているのは先が見えない楽観者か諦めている悲観者くらいだろつ。俺はどつちでもないんでね」

「それなら……」

「俺は俺なりに世界と向き合つよ。俺の守りたいもののためにね」

「守りたいもの？なんだい？」

「『今』」

神田は真顔になる。俺はそれに笑顔で答えた。

「もちろん歪みを肯定する気も泣き寝入る気もない。それをしてら今を続けられないからな」

神田の表情が崩れる。俺は、言った。

「俺は今を続けるために歪みと戦つよ」

「っふ、僕は『愚者』って呼ばれているけど、君のほうがその称号に相応しいね。君は楽しませてくれるよ。それがどれほど難しいことかわかっているのかい？」

「ああ。お前らのしていることと同じように人生をかける価値のあることだろ？」

「そうだね。なら、その今を破壊しようとしている僕は……」

敷地内は一気に殺気で満ちた。

俺も臨戦態勢を取る。

心音を数える。舌戦のおかげで大分落ち着いた。

俺は、全身に酸素を送り込み、吐き出した。

「ああ、お前は、敵だ！」

## ディメンション

>> 巧サイド <<

俺は再び時伏せを発動した。

スローモーションの世界、神田は真蛇を横薙ぎ一閃に払う。俺の速さに対抗するためか、それは俺が間合いに入る前に放たれた。

俺は刃が眼前を過ぎ去るのを待って神田に迫ろうとした。

その時、フラッシュバックが起こった。時詠みだ。

止まらない！

俺は転げるようにして今通り過ぎた真蛇の剣閃を潜り、そのまま転げて神田の横を通り過ぎた。

そのまま大の字に倒れる。

時伏せは解除され、俺は荒い息と共にむせ返った。

「かわしたんだ。そうか。速いだけではないと思ったけど、これは、未来視、かな？」

俺は激しい頭痛と軋む身体に耐えて半身を起こした。

「この、詐欺師が！ なにが最速対最短だ！」

「あははは！ わかったかい？」

神田惣一、『愚者』の称号を持つ白金最高幹部のひとり。

こいつは、次元を操るのだ。

2次元の世界、紙の上に鉛筆を立て、A地点からB地点に鉛筆を走らせるとき、紙の上ではどのような軌跡を描こうとも鉛筆の後が残る。

だが、3次元、次元を超えることが出来るなら、鉛筆は紙から持ち上げ、軌跡を描かないでB地点に到達することができるのだ。

しかも、次元を超えている間は時間軸にも左右されない。これが

瞬間移動の正体だ。

そして、次元に亀裂を作る、絵画にカッターで切れ込みを入れるように物理的な防御は不可能、あらゆるものを切断する真蛇の正体だ。

「本当はこれもないんだよ。名刀ではあるんだけどね」

神田は日本刀を鞘に収め、俺に放った。俺はそれを受け取る。

神田は軽く手を上げた。

「今までこの正体がばれることなんてなかったんだけどね。いや、さすがだよ。でも、これを破る方法は見つかったかな？」

神田は手を振った。

時詠みが発動し、俺は反射的に身を屈める。

俺の頭上を、不可視のなにかが通り過ぎる。

背後から森の揺れる音が響いた。次元の亀裂は俺を通り過ぎ、俺の背後の木々を切断したのだ。

「ふーん。君は中途半端には倒せないようだね。じゃあ、これならどうか？」

神田は手を目の高さに上げた。

ガンガンに鳴る頭痛、視界は赤く染まり、時詠みの警報音が鳴り響く。

俺は、包囲されていた。

180度、次元の亀裂は隙間なく俺を囲む。まずいね。今度は逃げ場がない。

「これが、『愚者』の能力、真蛇だよ」

俺はポケットからあるものを取り出した。

義手だ。マービン・クルードの持っていた指向性爆弾。

「ところで、巧くん。真蛇の意味を知っているかな？」

「悪いな、答えている余裕はなさそうだ」

「それはそうだ！ それじゃあ勝手に喋るよ。真蛇は能面の一種。

女の鬼の面でももっとも罪業深いものなんだけど……」

神田は指を鳴らした。亀裂はゆっくり俺に迫ってきた。

「その意味は、嫉妬だよ」

俺は、指向性爆弾を、使った。

## クイツクドロウ

>>美異サイド<<

窓から月光が差し込む。

作り物のような目とブロンドの髪を持つ女は艶やかな黒髪を持つ少女を見上げる。

少女、新橋美異は酷薄な笑みを浮かべながらゲルトルート・ガルボを見下ろした。

「お喋りは、もういいですか？」

「ええ、あなたが白金に戻ると言うならね」

ゲルトルートには余裕があつた。

美異の超重力は確かに強大な力だがこの間合いなら、美異が力を発動するより早くゲルトルートの裁きにより美異を破壊できる。

それは美異にもわかつているはずだった。

「ええ、そうね。はっきり答えておきましょうか。私は白金には戻りません。なぜかわかりますか？」

「……なぜ？」

美異は心底可笑しそうにくすくすと笑い、答えた。

「だって、白金には巧さんがいないもの」

一瞬だけゲルトルートは呆気に取られた。そして、気持ちを切り替える。

「なら、あなたはここで死になさい！」

ゲルトルートは『裁き』を発動しようとした。

だが、美異の動きを見てそれは止まった。

美異が、人差し指を立てていたのだ。

指差す先は天井。ゲルトルートはその意味を理解した。

「しまった！」

微かに身体に重みを感じる。次の瞬間、エントランスの吹き抜きの天井は崩れた。瓦礫が上から降ってくる。  
ゲルトルートは重い身体を動かした。

天井のなくなったエントランスは月光に包まれた。  
見上げれば月と星が輝いている。

美異は2階の階上から瓦礫の山と化したエントランスに降り立つ。  
痛みを握りつぶすように傷ついた右腕を押さえる。

美異は一度だけ大きく息を吐くと出口を見た。  
外には巧がいるはずだ。休んでいる余裕はない。

外から爆発音が響く。美異は目を見張り、駆け出そうとした。  
だが、それはできなかった。

うつ伏せに倒れる美異。美異のふくらはぎは、爆ぜていた。  
「ふふ、おしかったわね。あと一歩で私も死んでいたわ」

美異の後ろには、無傷のゲルトルートが立っていた。美異は振り返れない。

「後ろから騙まし討ち、あなたらしい攻撃ですね」

「『世界』を殺すのに卑怯という言葉は存在しないわよ。光栄ですよ」

ゲルトルートは絶対的な自信を持って美異に近づいた。足音が美異の背後に迫る。

「どうやって瓦礫をかわしたのですか？」

「階段の下に隠れたのよ。あなたが底を抜いた踊り場から逃げ込んでね」

美異は舌打ちをした。

ゲルトルートは満足そうに頷く。

「どうやって殺して欲しい？ リクエストがあるなら聞いてあげるわよ」

「悪趣味ですね。殺しを楽しんでいる」

「当然でしょう？ あの『世界』をおもちやにできるんだもの」  
ゲルトルートは足を止めた。

「さあ、振り返りなさい。その瞬間に殺してあげる」

美異は身体を起こした。

「ふふ、無駄でしょうけど、一応聞いてあげる。命乞いする？」

「歳ですね、おばさん。遊ばないで一撃で私を殺していればよかったのに」

ゲルトルートの笑みが凍った。

「挑発のつもり？ 無駄よ。どうやっても私の優位は変わらないわ」

「正直あなたに付き合うのは飽きました。そろそろ終わりにしまし  
よう。この後巧さんのところにも行かなければならないですね。

あなたは……」

美異は振り返った。左手を突き出す。

「邪魔です！」

「遅い！」

ぽつかりと、美異の伸ばした左手から穴が出現する。

ゲルトルートは美異を凝視した。

美異の左胸は爆ぜ、赤い花が散るように白いワンピースに染みを  
広げた。

ぐらりと、美異の身体が傾き、前のめりに倒れた。

直径1メートルほどに膨張した黒い穴に落ちて消える。

美異は、エントランスからその存在を消した。

## シュヴァルツシルト

>>美異サイド<<

「あつけないわね。これがあの『世界』の最後、か」  
ゲルトルートは勝利に酔うように高笑いを放った。  
エントランスに甲高い女の笑い声が響いた。  
ゲルトルートは笑いを収めると出口に向かった。

惣一はてこずっているようだ。  
いつものように遊んでいるだけだろうが、万一ということもある。  
ゲルトルートは様子を見に行くことにした。

そして、ゲルトルートは黒い穴が消滅せずに残っていることに気付いた。

シュヴァルツシルト半径。超重力の働くその範囲内では光すらも  
抜け出すことは出来ない。黒い穴、ブラックホールの正体だ。

ゲルトルートはそこから微かに引力を感じた。  
「……やっかいなものを残したわね。どうせ死ぬなら後片付けくらいしてから死ねばいいのに」

ゲルトルートは引力を振り払い、黒い穴の横を過ぎ去った。  
黒い穴に背を向け出口に向かう。

だが、ゲルトルートは出口にたどり着くことはなかった。  
黒い穴から引き込む力が上がってきているのだ。

ゲルトルートは危機感を感じ、必死に穴から遠ざかろうとした。  
そこに、穴から、引力とは違う別の力が加わった。  
かくん、と、首が傾く。

ゲルトルートは、それが自身の髪が引っ張られているのだと気付いた。

「捕まえた」

ゲルトルートは、耳元に少女の吐息を感じた。

美異は、シュヴァルツシルト半径から半身を出し、ゲルトルートの髪を引っ張っていた。

「なぜ生きているの？」

「ふふ、視覚とは光を眼球に取り込んで脳内に投影するのですよ。あなたには説明の必要はないですね」

「光を！ 捻じ曲げたの！」

「少し遅れましたけどね。でも、助かりました。あなたの能力、脳内に投影した映像を写真に落書きするように外部から手を加える能力だったんですね。ああ、痛かったわ。それでも、ずれたあなたの攻撃箇所は私に致命傷を与えられなかったようですね」

髪を引く力が強まった。もはやゲルトルートの頭部は完全に上を向いている。

「わかりにくかった。もし、物理的に攻撃する能力だったのなら防げなかったでしょうね。もともと、それなら私に触れることもできなかったでしょうけど」

チリと、シュヴァルツシルト半径の間に消えたゲルトルートの髪は分子レベルで圧縮され、消滅した。

徐々に、ゲルトルートは死の黒い穴に引き込まれていく。

「あなたは！ あなたはなんで死なないのよ！」

「私があなただけに殺されるわけじゃないじゃないですか」

「滅茶苦茶よ！ あなただって潰れて死ななくちゃならないのに！ なんであなただけ死なないのよ！」

「ああ、そのこと？ 馬鹿ですね。自分の力が制御できないわけないでしょう？ 私の力は私には作用しないのですよ。抑えていますから。じゃないと、こんな力危なくて使えないでしょう？」

美異の小馬鹿にした笑い声が微かにゲルトルートの耳に響いた。

ゲルトルートはすでに音すらも引き込まれる領域に達している。

このままではブラックホールに落ち、ゲルトルートは消滅させら

れるだろう。

ゲルトルートは意を決した。

身体力を抜く。

ガクンと、ゲルトルートは穴に落ちるように後ろにいる美異にぶつかった。

わずかに美異の、ゲルトルートの髪を掴む手が緩む。

ゲルトルートはその隙間を利用して身体を回した。

視界が回転する。

60度、120度。

わずかでも視界に収めればゲルトルートは裁きを発動することができる。

それで、それだけで美異を今度こそ殺せる。

だが、ゲルトルートは美異の姿を見ることはできなかった。

赤いなかかがゲルトルートの視界を覆い、ゲルトルートの光は永久に奪われた。

美異は、ゲルトルートの眼球に突きこんだ自身の砕けた右手の指を舐めた。

ひゅー、と、悲鳴にならない叫び声が美異の横を通り過ぎ、ブラックホールに落ちていく。

美異は、自愛に満ちた聖母のようにゲルトルートの頭を抱いた。

超重力の影響を受けない美異の声がゲルトルートの耳に届く。

「さようなら『正義』。あなたは、形も残さず消滅しなさい」

美異は、一転、打ち捨てるようにゲルトルートを穴に落とした。

ゲルトルートはもはや声も発することもできずにシュヴァルツシルト半径の絶対的な闇に消えていった。

白金の『正義』の最後だった。

ブラックホールはゲルトルートを飲み込むとゆっくりと縮小していき、やがてその姿を消した。

がくんと、美異の膝が崩れる。  
が、美異は歯を食いしばって体を起こし、出口に立っている男に  
笑顔を向けた。

## 背中合わせ

盛大に舞った土煙はようやく収まってきた。神田惣一は軽い落胆の溜息を吐くと、土煙の中に入っていった。

土煙は秋葉巧が起爆した指向性爆弾によるものだった。

巧は、土を舞い上げ不可視であるはずの真蛇の軌跡を確認し、かわすつもりだったのだろう。

だが、そこで巧が見たものは絶望だったに違いない。

真蛇は、網の目のように隙間なく巧に迫ったのだから。大きくても10cm四方の隙間ではかわすことなど不可能だ。

「ああ、残念だな。能力も、人柄も。彼とは仲良くなれると思っていたのに」

土煙は次第に晴れ始める。

そこに、巧の姿はなかった。斬殺体もない。

あるいは自身の起こした爆風で消し飛んだか、惣一はそう思った。

惣一は、立ち止まった。

そこで背中に軽い衝撃を受けた。

荒い息、異常に高い心音を背後から感じる。

背中合わせに、秋葉巧が立っていた。

>> 巧サイド <<

俺は身体を預けるように神田の背中に自分の背中を合わせた。

呼吸を整えるために大きく息を吸う。だが、うまく吸い込めずにむせる。

「大丈夫？ なにか苦しそうだけど」

「だ、だい、だいじょうぶ、だ。じきに落ち着く」

背中合わせのまま、神田は動かない。俺も、寄りかかったまま動かなかった。

「それじゃあ答えてもらおうかな。どうやって真蛇をかわしたんだい？」

俺は胃の奥から這い出してくる塊を吐き出して、答えた。

「指向性爆弾で地面を削って穴を作って、そこに隠れた」

「ふ、無茶するね。いくら指向性といっても地面に当てれば爆風は跳ね返って君を襲うだろうに」

「ああ、おかげで俺の身体はぼろぼろだよ。自分で感心してる。よく立ち上がったってな」

俺の身体は熱を含んだ大量の土砂を浴び、土と血に塗れている。

大量の土砂の中には当然石も含まれている。

爆風は俺の肌を焼き、爆圧で砕けた石は俺の皮膚と肉を裂き、骨を砕いていた。

「それで、どうするんだい？ なにか、放っておいても死んでしまっそうだけど」

「俺としてはおまえがこのまま逃げてくれれば助かるんだけどな」

「ああ、そうも行かないね。仲間にもならず、僕の実力の正体も知られている。それに、安いプライドだと思うけど、真蛇も破られたままだしね」

「そうか、そうだよな。それじゃあ続けるか」

「その身体で？ さっきからちっとも息が収まってないじゃないか」

「気遣ってくれるのか。悪いね」

「気にすることはないよ。僕たち、友達だろ？ ああ、メルアド交換がまだだったね」

俺たちは背中合わせのまま笑いあった。

大きく息を吸い込む。今度は成功し、血管を通して体中に酸素が行き渡る。

俺は、ゆっくりと息を吐いた。

「さて、待たせたな。そろそろ始めよう」

「この体勢で？」

「ああ、悪いけど、このまま決めさせてもらおうぜ」

## 決着

暫しの静寂。

俺たちは無言で互いの呼吸と心音を聞いた。

破壊されたフォートファイブス。

周りには夥しい数のマニゴルドの騎士たちがモノと化している。察は停電しているのだろう、月明かりだけが山間を照らす。

今宵は明るい月夜だ。

そよ風が頬を撫でる。

心地いい、実にいい季節だ。

森が揺れ、さわさわと葉擦れの音が響く。

……神田は、動いた。

自分の間合いに入るために俺から離れる神田に、俺は流れるように密着する。

そして、次の瞬間、俺は神田を投げた。

頭から落とす。だが、その投げは空振る。瞬間移動だ。

こうなることはわかっている。わかっていた。

勝負は、ここだ！

俺は腰を落とし、後ろを向いた。

どこに出現するかは、時詠みがハンマーで叩くような頭痛と一緒に教えてくれる。

俺は、日本刀の鯉口を切った。

俺の前に現れた神田はその頬を引きつらせた。

足に力を入れる。

爆風で傷ついた傷口から水が漏れるように血が噴出した。

苦痛に頬が吊り上る。

いや、これは高揚による笑み。

俺と神田、絡む視線、歪む唇。

俺は、時伏せを発動した。

……一瞬の交差、立ち居地が換わる。

俺は、前のめりに倒れた。

「お見事」

神田はそう言うと、ゆっくりと倒れた。

俺の手に握られた日本刀にはわずかに血糊が付着し、俺の腕には神田の胸を薙いだ感触が残っている。

神田が真蛇を発動するより速く、神田を斬り伏せたのだ。

俺は地面に倒れていた。

正直起き上がる気力もない。時詠みは俺の頭を鐘のように叩き続け、時伏せは呼吸をするたびに俺の体に激痛を走らせる。

悪いけど、このまま気を失おう。痛みから開放され、楽になれるに違いない。目を覚ます自信もないが、これ以上は動けない。

俺の理性はそう思い、目を閉じた。

だが、俺の本能は、それを認めなかった。

頭痛はまるで目覚ましのように俺の頭を叩き続ける。

俺は苦痛から逃れようと瞳を固く閉じた。だが、長くは耐えられずに俺は瞳を開けた。

赤く濁った視野には半壊の寮が見える。

「ああ。わかったよ！」

俺は誰に言うでもなく吐き捨て、刀を杖に立ち上がった。

ゆっくり、引き摺るように身体を動かし、寮に歩く。

俺にはまだやることが残っていた。

必死に、一步一步足を進め、寮の入り口に辿り着く。

そこは、まるで廃墟だった。

天井は抜け落ち、エントランスは瓦礫の山と化していた。

そこに、柔らかい月光に照らされて、彼女は立っていた。

許し

整った顔立ち、艶のある黒髪、着ているワンピースは鮮血で緋色に染まっている。

そして、まとっている空気は高貴で神聖 (divine being)。

あの海、あの時の、あの少女がここにいた。

少女は、微笑みを俺に向けた。

「あの時の少女はおまえだったのか、新橋。いや、今は白金の『世界』と言ったほうがいいのかな」

少女、新橋美異は笑みを凍らす。

「嫌なところを見られましたね。クールダウンが間に合いませんでした」

新橋は茶化すように舌を出した。

「巧さん。『愚者』に聞いたのですか？」

「ああ。おまえがそんな大物だとは思わなかった  
すうっと、空気が揺れた。」

新橋が一步俺に近づいたのだ。

新橋の顔には、微笑は浮かんでいない。

今の新橋は、触れることさえ叶わないと思ったあの時の少女そのものだ。

「いや、女は化けるね。おまえがあの少女だとは思わなかった」

「失望しましたか？」

「さあ、な。複雑ではあるけど」

なにしろ本人にそれと気付かず片思いの気持ちを語ってしまったのだ。

俺は刀を前に突きたて、新橋に近づいた。

「ええ、そうですね。白状します。私は巧さんとあの海であったこ

とがあります。そして、あの時から、私は白金の『世界』になりました」

「そうだったのか」

「隠していたこと、怒っていますか？」

「いや、別に」

俺は軋む身体と割れそうな頭痛を噛み殺し、さらに一步新橋に近づいた。

視界がぶれる。

ああ、そろそろ限界、だな。

「私を、許してくれますか？」

「許す？」

新橋は物理的にも鋭利さを感じるほどの冷徹な目を俺に向けた。

俺は苦笑してしまう。

こいつは、どんなに飾っても新橋だ。

俺は新橋に手の届く距離まで歩み寄った。

わずかに刀を持ち上げる。新橋は俺を見上げた。

「許しが欲しいのか？」

新橋を見下ろし、瞳を見つめる。

新橋は、俺の質問には答えず、俺の瞳を見返してきた。

「この距離なら刀はときますよ。私を、『世界』を殺しますか？」

月の蒼い光は新橋の整った顔立ちを鮮明に浮かび上がらせる。

俺は、新橋の肩に手をかけた。

そのまま寄りかかるように抱きつく。

ふっと、身体が軽くなった。

新橋が俺を支えられるように重力を軽くしたのだ。

「そうだなあ。どうしようかなあ」

「……巧さん？」

新橋の左手が俺の背に回される。

月光に照らされ、俺と新橋は抱き合った。

無言で新橋を抱きしめる。

新橋の温もりだけが俺に伝わった。

俺は目を瞑った。

俺は、魂を引き抜かれるようにそのまま意識を失った。

どこか遠くで新橋の俺を呼ぶ声が聞こえた気がしたが、無視した。

許し（後書き）

次回『正義』編最終回です。

## 続けられる場所

……軽い記憶障害。

ここは俺の部屋で俺はベッドで寝ている。

日はすでに高く、窓からは昼の陽光が差し込んできていて、正午が近いことを教えてくれる。

もう一度確認。ここは俺の部屋で俺はベッドで寝ている。

「……こいつ、なんでここにいるんだ？」

ベッドの横にはイスに座った恵比寿が居眠りをしていた。人の部屋に勝手に入ってきてこいつはなにをやっているんだ？

俺は身体を起こそうとした。

だが、できなかった。身体中に激痛が走ったのだ。

それで、俺は気を失う前に起こったことを思い出した。

「おーい、恵比寿。おきろー」

控え目に恵比寿に声をかける。

恵比寿は、うるさそうに眉間に皺を寄せて、ゆっくりと瞳を開けた。

意識が覚醒すると、恵比寿はいきなり俺に抱きついてくる。

「たくみ！」

「ば！ いったえよ！ 抱きつくな！」

俺は突き飛ばすように恵比寿を引き剥がした。

「あ、ごめんなさい。身体はどう？」

「痛い。頭は、けっこうクリアだな。軽い鈍痛だけ」

「よかった。巧、1週間も目を覚まさなかったのよ」

「1週間！ そんなに寝ていたのか」

「ええ、体もぼろぼろで、それ以上に脳にかかった負担がすごかったって。もう目を覚まさないかもって言われていたんだから」

泣いているのか、恵比寿は目を擦っている。

まあ、時詠みを使いまくったからなあ。俺、あの日だけで何回使ったんだ？ その回数はそのまま俺が殺されていた回数でもあるわけだ。

「それで、新橋は？」

恵比寿は急にきつい目を細めて俺を睨んできた。

「なんで美異が出てくるのよ」

「あいつ、最後に見たとき血塗れだったんだよ。普通に話せたから大丈夫だとは思っけど」

「ああ、そういうこと。大丈夫、傷は深かったけど後遺症は残らないらしいわ。馬場先輩も一時は危ない状況だったけど、もう完治している。昨日は学校にも行けたぐらいだから」

「そうか」

俺はほつと息を吐いた。なんとか、俺の守りたいものは無事だったみたいだな。

「巧、なにか欲しいものはない？ お腹が減っていたりとか……」

「ああ、そういうえば。少し腹が減ったかな」

「まだ病み上がりなんだからしつかりしたものは駄目よ。まっつて、芳樹さんになにか作ってもらってくるから」

恵比寿は飛び出すように俺の部屋から出て行った。

まっつたく、せわしない奴だ。

しばらくベッドの上で寝転んで過ごす。

部屋を見渡すと机の上に、日本刀、真蛇が置いてあった。

俺は痛む身体を動かし、真蛇を手を取った。

鯉口を切り、刃に陽光を照らす。

……いい天気だった。

俺は、そのまま自分の部屋を出た。

フォートファイブスの損害は、中央の共有スペース、それと防衛システムが壊滅的なダメージを負っているものの、男子寮、女子寮は共にほぼ無傷だった。

俺は修復途中のエントランスから外に出た。

そこは、よく手入れされている庭園だった。

芝生は入れ替えられ、大規模な戦闘の後は全てなくなっている。

1週間も寝ていたため身体が弱っているのだろう、軽い疲労を覚えた俺は芝生の上に寝転んだ。

夏が近い。

日差しは暖かく包むようなものからちりちりと肌を焼くものに変わっている。

草の匂い、土の香り。

俺は思い切り伸びをして目を閉じた。

うとうととまどろみの中に落ちていく。  
気持ちがいい。

だが、そんな幸せを叩き壊すために微かな足音が近づいてくる。

俺は固く目を閉じた。

俺に近づいた人物は俺の隣に座った。

すっと、影が差す。

目を開けると、新橋の笑顔があった。

「目が覚めましたか？ 心配したんですよ」

「ああ。よく寝たよ」

新橋は俺の頭を持ち上げ、膝枕をしてくれた。

新橋の細い指が俺の髪を撫でる。

「巧さん、なんで私を殺さなかったんですか？ 私、あの時、死ぬつもりだったんですよ？」

「？　なんで俺がおまえを殺さなくちゃならないんだ？」

「だって、私は『世界』ですよ。この寮を襲った連中と同じ白金の

「？？　昔の話だろ？」

「それはそうですけど……」

新橋は納得していないように口をへの字に曲げた。

俺は、苦笑しながら手に持っている真蛇を新橋に渡した。

「？　『愚者』の持っていた日本刀ですか？」

「神田は俺に言ったよ。この日本刀の名前は真蛇。嫉妬だってな…

…」

新橋はなぜか一度目を見開き、自愛に満ちた顔を俺に向けた。

「私にはその意味がわかりません。私には、巧さんが『いる』から。

それは、『いない』人には嫉妬の対象でしょうね」

「？　さっぱりわからん」

「ええ、それでいいんですよ。差別なんてものは、所詮は多数派が少数者に嫉妬しているだけなんだから」

「？？　やっぱりわからんなあ」

俺は立ち上がった。新橋も立ち上がる。

「それで、巧さん。教えてください。私を殺さなかったわけ」

「なにか拘るね、新橋さん」

新橋は俺の目をじっと見て、俺が答えるのを待っている。

しかし、俺としてはそれは当然で、理由なんてあるわけもないのだが。

……仕方ないな。俺は少しだけ胸の内を話した。

「俺の守りたい『今』の中に、新橋美異はちゃんと『いる』んだよ」

新橋は一呼吸分だけ俺の言葉を黙考する。

満足したのか、新橋は微笑んで頷くと、一步俺に近づいた。

「巧さん、昔から私のことが好きなんですよね」

「？　まあ、好きか嫌いかで言うんなら好きだけど」

新橋は、小悪魔チックな笑みを浮かべ、瞳を閉じた。

「?? みい子ちゃん? なにやってるの?」

新橋は言葉では答えずに顎を突き出した。  
なにやっているんだ、この娘は?

いや、その意味するところは健全な男子高校生である俺にはわかるけど、なんで? この飛躍はなんだ?

「はやく」

新橋が俺を即す。

……女つてのは本当にわけのわからない行動を取る。

俺は意を決し、新橋の顔に自分の顔を近づけた。

軽い息遣い、睫毛の数えられる距離。

俺は自分の頭を、新橋の額に、ぶつけた。

「痛っ」

新橋はおでこを押さえて数歩後ずさる。

涙目で俺を睨んできた。

「昼間からなにを公然猥褻しているんだ、おまえらは!」

その声は寮の外門の側から聞こえた。

渋谷先輩だ。部活帰りかラケットを持っている。

「巧、どうやら目が覚めたみたいだな」

「ええ、ご迷惑をおかけしました」

「しかし、こんなところで、しかも女とそついうことは遠慮しておけ」

女とつてあんた……。

渋谷先輩はラケットで寮を指した。

俺と新橋はその方向を見た。

その方向にはテラスがあり、馬場先輩と岡地先輩がいた。

岡地先輩は元気よく手を振り、馬場先輩は顔を赤らめて下を向いている。

今の、見られていたのか？

「あ、巧！ あんたなにやってんのよ。病人なんだから部屋で寝てなさいよ！」

エントランスからは恵比寿が走ってくる。

それを追いかける正志、さらにその後ろには芳樹さんが苦笑しながら歩いてくる。

「よゝしきー！ 今日は天気がいいからお昼ご飯は庭で食べようよ！」

岡地先輩がテラスから叫ぶ。

渋谷先輩は俺たちの側にいながら自分の道に行く。

岡地先輩は破天荒に、馬場先輩は静かに俺たちを見守っている。

恵比寿は俺に駆け寄り、正志は恵比寿の後を追う。

それらを眺めている芳樹さん。

そして、俺の隣には新橋美異がいた。

俺の守りたい『今』がここにあった。

それがどれほど難しいことかわかっているのかい？

俺は反射的に後ろを向いた。

きよとんと、新橋が俺の様子を見ている。

俺は、苦笑した。

新橋から真蛇を受け取る。

俺は真蛇を抜いた。

刃が陽光に輝く。

俺は、真蛇の持ち主だった友に言った。

「まあ見てろって、相棒！」

俺は真蛇を一閃して影を斬り捨て、刀を鞘に戻した。

了

## 続けられる場所（後書き）

長々とお付き合いありがとうございます。これにてフィルムブルヴェルトラプソディ『正義』編、終了でございます。

この作品は、第16回電撃大賞落選作でございます。かなりの高評価をいただきどうもありがとうございます。感無量でございます。

今回は『月』編の予告を掲載して今作は一時休載になります。ええ、まだ一文字も書けていないので。

最近『ぞんびもの！』を書くのが楽しくなっちゃったんで、その区切りがついてからになります。どうか気長にお待ちくださいませ。

ぞんびもの！ も合わせてこれからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0213q/>

---

フィムブルヴェルト・ラブソティ

2011年3月13日02時40分発行